

群峰

富山文学の会10周年記念号

5

二〇一九年四月
富山文学の会

群峰 5

富山文学の会

Ⅱ 目次 Ⅱ

◇特集 富山文学の会 10周年

高志の国文学館

お祝いのことば

3

高熊 哲也

富山文学の会との出会い

24

富山高等専門学校

祝辞

4

今村 郁夫

金子幸代氏の講義と富山関係の業績

26

金子 幸代

「群峰」記念号に寄せて

5

綿引 香織

高志の国文学館と富山の文学

29

富山文学の会

富山文学の会 十年の軌跡

——二〇〇九年から二〇一八年
まで——

7

近藤 周吾

富山高専と富山文学の会

33

黒崎 真美
富山文学の会発足あれこれ

22

西田谷 洋

尾島菊子『教育勅語御伽噺 少女の

一念』のこと

35

金山 克哉

さまざまな〈富山〉

37

◇研究論文

水野 真理子

小寺菊子の死生観

—「逝く者」より

39

金山 克哉

高島高詩集『山脈地帯』における「戦

争の詩」

51

丸山 珪一

堀田善衛の天皇小説「曇り日」をめぐって

64

中山 悦子

佐多稲子「水」における敗北と春の陽

—感情表現をふまえて—

81

高熊 哲也

黒部ダムをめぐる作品群

—吉村昭「水の葬列」と「高熱隧道」、

そして木本正次「黒部の太陽」

99

谷川 拓矢

断絶と和解の円環

—山川健一『人生の約束』論

116

関戸 菜々子

姫野 諒太郎

早瀬 裕也

小谷 瑛輔

ナツヅタの樹液による芋粥再現実験

122

◇2018年度 活動報告

143

お祝いのごとば

高志の国文学館

富山文学の会結成 10 周年に際し心よりお祝いを申し上げます。

貴会におかれましては、研究会や講演会、読書会等の開催、会報「群峰」の刊行など幅広い活動を通し、富山ゆかりの文学の発掘、調査と発信に真摯に取り組んでられました。

この 10 年のたゆみない歩みに心より敬意を表し感謝申しあげます。

当館は、富山県ゆかりの作家や作品の魅力を幅広く発信し、誰もが気軽にふるさと文学に親しみ学ぶことができる施設として平成 24 年 7 月に開館し、これまで展示、教育・普及、資料収集などの取組みを実施してまいりました。

この間貴会の皆様には、常設展の展示内容へのご助言や企画展イベント、文学講座の講師など多くの事業にご協力を賜り、厚くお礼申しあげます。

当館では、今後開館 10 周年、20 周年をめざし、より多くの幅広い県民の皆様は文学等に親しみ学んでいただけるような魅力ある展示、教育・普及活動、貴重な文学資料の収集・保管・活用などに、引き続き全力で取り組んでまいりたいと考えております。

富山文学の会の皆様には、今後とも当館の事業推進に格別のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。結びに、貴会の今後ますますのご発展と会員の皆様のご健勝、ご活躍をお祈り申しあげます。

祝辞

富山高等専門学校

富山文学の会の創立10周年、心よりお祝い申しあげます。

貴会が地域のニーズに応え、富山文学の研究や啓蒙に大いに貢献されてきたことに対し、敬意を表します。

本校の副校長である高熊哲也教授、射水キャンパス国語科主任の近藤周吾准教授、そして黒崎真美非常勤講師の三名が、富山大学の先生方はじめ多くの先生方のご指導の下、互いに切磋琢磨し、連携を深めながら、貴会創立以来、一貫してその研究や運営に携わって参ったことは本校にとつても意義あることです。

本校は、図らずも貴会が創設されたのと同じ平成21年10月、富山工業高等専門学校と富山商船高等専門学校が統合されて誕生しました。

本校は工学系4学科（機械システム工学、電気制御システム工学、物質化学工学、電子情報工学）、人文社会系1学科（国際ビジネス学科）、商船系1学科（商

船学科）の合計6学科の本科および専攻科からなっており、国内57高専のトップ校として北陸および我が国、そして世界で活躍する技術者、ビジネスパーソンを育成し、高度な研究を行っている国内有数の高等教育機関です。そのような研究の成果を地域社会に積極的に還元することを、本校は非常に重要視しております。

これからも貴会および地域の皆様には本校の教育・研究活動にもご注目いただき、格別なるお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

末筆になりますが、貴会の今後ますますのご隆盛を祈念申し上げます。祝辞とさせていただきます。

「群峰」記念号に寄せて

富山大学名誉教授 金子 幸代

今から20年ほど前、森鷗外を中心とした比較文学を講じるために富山大学に赴任し、未知の地であった富山で、新しい出会いや発見を重ねた日々を懐かしく思い出している。富山での暮らしが落ち着いてきた頃、荘厳な立山の威容と四季折々に変貌する日本海の姿を眺めているうちに、私のなかにいつの間にかふたつの夢が生まれてきた。ひとつは、「文学不毛の地」といわれる富山における近代文学研究を盛んにしたいという夢であり、他のひとつは、いつか富山に近代文学館を建設したい、という夢だった。

日本だけでなく世界に名だたる企業も多い富山の地は多くの実業人を輩出し、富山の売薬さんなど篤実に働く人々の姿で知られてきた。このような実業重視の富山人の気質から、ややもすると文化芸術への関心が薄いとされ、著名な文学者も、例えば隣県の石川県などと比べると少ない。しかしながら、私の接した範囲では、一般市民

のなかに文学に強い関心を寄せている人々やサークルは決して少なくなかった。そのような文学に親しむ会に呼ばれて森鷗外などについて講演したことも数多く、聴講者の熱心さに驚かされた。比較文学の学生たちも意欲的に文学を学んでいて、富山の文学を研究テーマにした学生もいた。

私自身も、文学に関心をもつサークルや個人と触れ合うことにより、富山の文学に関心を深めるようになり、さまざまな富山文学の先人たちを知るようになった。また、米騒動や「横浜事件」など富山に関わりのある近代史の大事件についても調べるようになっていった。

そのような中で、丸山先生、高熊先生、近藤先生、黒崎先生など、富山の近代文学を研究する方々と知り合うことができ、富山の近代文学研究を共同して進める「場」を作ろう、と構想がまとまった。こうして、講演会、シンポなどを重ね、参加する方々も徐々に増えていった。やがて、富山文学の会に発展し、関係者のご努力により、規模も拡大していった。私も、自分が関係する各種学会、近代文学会北陸支部、比較文学会関西支部、社会文学会などの大会や研究会を積極的に富山で開催し、私や院生

も含め、富山文学研究者の研究発表の場を確保しようと努めてきた。それにより富山文学の存在について、他地域の研究者にも認識を深めることができたのではないかと考えている。

このように富山文学研究の気運が高まるなか、私の富山文学研究の対象は小寺菊子に向かうようになった。小寺菊子は「大正の3大閩秀作家」と称されていたが、ほとんど忘れられた存在になっていた。私はさまざまな出会いにより菊子を知り、その作品を読み進め、菊子の文学作品の重要性に気づくようになり、紹介や研究を進めた。幸い新聞や金沢文学館などで菊子を取り上げられるようになった。菊子の3巻本の作品集を桂書房で出版していただいたのも、うれしいことであった。

私のもうひとつの夢であった富山の文学館建設も、「高志の国文学館」の建設により実現することができた。これらから各種資料の収集が進み、富山文学研究の拠点として重みを増していくことを期待している。

本誌「群峰」も号を重ね、富山文学研究の深化を感じさせる研究論文や資料紹介が多く、これからの富山文学研究の峰々の一層の高みを期待すること大である。

森鷗外は、青鞥社同人である尾竹紅吉が新たに発刊する「番紅花^{さくらん}」に寄稿を求められた際に、「サフラン」という巻頭文を書いた。植物のサフランと自らの関わりを幼年期からたどった内容であるが、結末は次のようになっている。

宇宙の間で、これまでサフランはサフランの生存をしてみた。私は私の生存をしてみた。これからも、サフランはサフランの生存をして行くであらう。私は私の生存をして行くであらう。

「番紅花^{さくらん}」ならぬ「群峰」の一層の成長を祈り、これからも遠方の地から応援していきたいと心から思っている。

富山文学の会 十年の軌跡

——二〇〇九年から二〇一八年まで——

富山文学の会

富山文学の会が、十周年を迎えた。これを機に、この十年の活動を振り返ってみたい。

その前に、参考として、この十年を具体的にイメージできるよう「読者が選ぶ県内10大ニュース」(『北日本新聞』12月)の1位を挙げておこう。

- ① 一年目 二〇〇九年(平成21年)
「おくりびと」米アカデミー賞外国語映画賞
- ② 二年目 二〇一〇年(平成22年)
クマ出没 人身被害相次ぐ
- ③ 三年目 二〇一一年(平成23年)
「えびす」食中毒で5人死亡
- ④ 四年目 二〇一二年(平成24年)

新湊大橋が開通

⑤ 五年目 二〇一三年(平成25年)

富山一が夏の甲子園8強

⑥ 六年目 二〇一四年(平成26年)

富山第一高サッカー全国制覇

⑦ 七年目 二〇一五年(平成27年)

北陸新幹線が開業

⑧ 八年目 二〇一六年(平成28年)

田知本・登坂選手が金メダル

⑨ 九年目 二〇一七年(平成29年)

「富富富」新富山米の名称決定

⑩ 十年目 二〇一八年(平成30年)

奥田交番襲撃2人死亡

一 夜明け前

◎富山文学の会 前史

富山文学の会が発足したのは、二〇〇九年の秋である。が、もう少し遡った時点から、いわばその前史から書き留めておくことにしよう。この時期のことは会員であつ

でも知らないことが多いと思われるからである。

これまでの富山県は「文学不毛の地」と言われ、文学研究においても「後進県」と目されていた。たしかに事実として文学不毛の地であったという面も否めないだろうが、しかし、それ以上に文学研究の遅れの方がより深刻であった。富山県は他県に比べて高等教育機関が少なく、また産業県であることから実業志向が非常に強く、文学研究のプロパーが極端に少なかったことがその最大の原因であった。もちろん、一般の愛好家や読書家は少なくなく、熱心に活動していたのだけれども、そのことがかえって文学研究を必要としなかったという皮肉な結果をもたらした。富山県の多くの人々にとって、文学とは教養であり、趣味であり、それ以上のものではなかった。なるほど、富山県に文学研究者がまったくないなかったというわけでもないのだが、なかなか定着しないし、絶対数も少なかったので、大きな動きを生むには至らなかった。また、当時の人文科学には共同研究という発想がなかったことも災いした。

そのような状況にあつて、富山文学の会が誕生することになった背景には、二つの出来事があつた。一つは日

本社会文学会の富山開催、もう一つが文学館建設の運動であつた。

二〇〇七年一月一〇日から一二日の三日間にわたり、富山大学で日本社会文学会の秋季大会が「文学に見る環日本海」のテーマのもと開催された。文学の全国学会が富山県で開かれたのは非常に珍しく、日本社会文学会の大会に限って言えば、これが初の開催となつた。

幸い、この研究会は好評であつた。『社会文学』第29号（二〇〇九年二月一七日発行）の特集〈環「日本海」文学の可能性〉に結実した。成田龍一「環日本海文学」の可能性——地域文学史を書き換える試み——を巻頭論文とし、金子幸代「小寺（尾島）菊子と「女子文壇」・「青鞥」、今村郁夫「小泉八雲のヘルン文庫」を含めた七本の特集論文、さらには紹介欄に逸見久美「父翁久允と移民文学」、エッセイ欄に黒崎真美「社会文学者横山源之助と富山」、丸山珪一「孫蔵の肖像と日本近代——中野重治『村の家』のひとつの問題」などが掲載された。

ここに富山文学の会の萌芽があることは、確かである。この大会を運営し、この特集号の編集委員長を務めたのが、後に富山文学の会を興した富山大学人文学部教授の

金子幸代であった。金子のリーダーシップとカリスマ性には大きなものがあり、狭義の研究教育の枠に収まらず、富山の文学研究を牽引し、多くの足跡を残した。

富山県内では『北日本新聞』の「越中文学館」という連載が好評を博してもいた。この連載は、二〇〇七年八月から〇八年九月まで四十七回にわたり、朝刊の文化欄に掲載され、最終的には、北日本新聞社編集局編著『越中文学館』(北日本新聞社、二〇〇八年一〇月一七日発行)としてまとめられた。二〇〇八年一〇月一七日には、いわばメディア・イベントとして「越中文学展」および「越中文学の魅力シンポジウム」が北日本新聞社本社で開催され、富山市出身の直木賞作家・源氏鶏太を中心とした展示などにより、文学館建設の機運が高まった。

このような流れの中、富山県も文学館建設へと積極的に動き出している。まず、生活環境文化部文化振興課が県内の有識者を集め、ふるさと文学魅力推進検討委員会を設置した。その目的は、「富山県ゆかりの文学を広く紹介し、ふるさとへの愛着心を醸成するなど、富山の文学振興を図るための方策を検討するため」である。二〇〇八年六月二日、富山大学学長(当時)の西頭徳三を座長と

し、その初会合が開かれた。この席には八木光昭、木下晶、近藤周吾も出席していた。会合後、八木と近藤は初対面にもかかわらず、今は閉店してしまった喫茶店「ロニアン」(教育文化会館の裏)にて富山文学研究の将来について熱く語り合ったという。二〇〇九年二月三日、同委員会は五回の討議を経て「ふるさと文学の振興に関する報告書」を富山県に提出、文学館建設の方向性とその具体像を明らかにした。

県外に目を向けると、神奈川近代文学館では二〇〇八年一〇月から堀田善衛展が行われていた。ここでも富山に文学館があればという話になっていた。(この堀田展は結局、二〇一〇年に高岡市美術館にて開催された。)

ともあれ、以上のような背景の中、富山文学の会もまた胎動しつつあった。

二 “創業”の第Ⅰ期——シンポジウム時代

①二〇〇九年 富山文学の会 誕生

二〇〇九年九月三〇日、富山文学の会の第一回の会合

が開かれた。場所は、西町にあるオレンジシャリマティ総曲輪店。参加者は、金子幸代・丸山桂一・萩野恭一・黒崎真美の四名。当時、金子は富山大学教授（現・名誉教授）、丸山は金沢大学名誉教授、萩野は射水市中央図書館の前館長、黒崎は富山国際高校の講師（現在は富山大学、富山高専の非常勤講師も兼務）。テーマは「ふるさと文学の発掘と普及に向けて」。金子・丸山・黒崎は日本社会文学会のメンバーであつたが、「ふるさと文学」とあるのは萩野の助言があつた。富山県は当時、「ふるさと文学」という言葉を多用していた。初期の富山文学の会がしばしば「ふるさと文学」という語を掲げるのは、文学館建設運動を意識していたからにほかならない。

これ以降は、富山大学人文学部で実施された。第二回は、同年一〇月二日に開催。やはり「ふるさと文学について」と題して、各自がどのようなテーマを持っているかの発表が行われた。発表といつても、ブレインストーミングのようなものだったのだが。参加者は先の四名に加え、勝山敏一・高熊哲也・近藤周吾・今村郁夫が加わった。勝山は桂書房の代表。高熊は当時、富山高専の准教授で、近藤が講師だった。今村は富山大学大学院生

だった。

この回では、富山県の「ふるさと文学魅力紹介活動支援事業補助金」を申請する相談がなされた。その際、会の規約づくりの必要から、金子が代表、丸山が副代表、黒崎が事務局長ということが決定された。規約には「本規約は2009年10月15日より施行する。」とある。規約の施行日と、会の開催日の間にズレが生じているが、これは申請の兼ね合いによるものだった。

第三回は同年の一二月一七日、萩野恭一が「ふるさと文学の現在」という題で公開研究発表を行っている。ここで瀧澤弘が合流した。瀧澤は富山大学名誉教授。日本社会文学会にも参加していた。

以上を総合すると、富山文学の会の創立が二〇〇九年秋であることは確実だとしても、日付を特定するのは難しい。九月三〇日説、一〇月一五日説、一〇月二一日説の三種が立つからだ。

ちなみに、同じ二〇〇九年の一〇月には富山高専専門学校が開校した。富山文学の会の出発は、高熊の所属する富山工業高専（現・富山高専本郷キャンパス）と、近藤の所属する富山商船高専（現・富山高専射水キャンパ

ス)が折しも高度化再編し、全国で四つのスーパー高専として始動したそのタイミングとも軌を一にしていた。歴史に「もし」はないが、もし九月末日に高熊と近藤も集っていたら、彼らはまだ同僚ではなかった。

この年の特筆すべき出来事としては、金沢の徳田秋聲記念館が一〇月一日から二月一三日までの間に「生誕130年記念 小寺菊子展——秋聲と北陸の作家たちⅡ」を開催したことだろう。これも金子の尽力が大きかった。

②二〇一〇年 第一回シンポジウム(富山大学)

第四回は二〇一〇年二月一七日に、金子幸代が「小寺菊子の児童文学」という題で公開研究発表を行った。このとき、第一回シンポジウムの打ち合わせも行われた。

最初の年のメンバーは、日本社会文学会への参加者をコアとしつつ、金子の伝手と、富山在住の日本近代文学会会員に片っ端から声をかけるといふ方法により集められた。しかし、この方法では当然、限界があった。ところが、幸いなことに、申請していた「ふるさと文学魅力紹介活動支援事業補助金」を受給できることとなり、シ

ンポジウムを開催できることになったのだ。多くの方に、私たちの活動を知っていただく好機となった。

二〇一〇年三月一三日、第一回のシンポジウムが行われた。場所は、日本社会文学会が開かれたのと同じ富山大学人文学部二階の4番教室。第一部が朗読、第二部が研究発表。朗読サークル「言の葉」による三島霜川「水郷」の朗読を入れたことが奏功し、用意した資料が足らなくなるほどの盛況だった。「少年少女の眼から見たふるさと富山の文学と風景」という総題のもと行われた研究発表も、それぞれに力が入っていた。萩野恭一「瀧口修造の描くふるさと」、黒崎真美「横山源之助の描いた子供——『貧しき小学生徒』」、金子幸代「小寺菊子の児童文学」、丸山瑠一「堀田善衛と『ふるさと』問題」、近藤周吾「文学にとって『ふるさと』とは何か」の五本は、それぞれ異なる作家やテキストを取り上げながらも、少年少女という視座から富山の文学を捉えており、清新であった。

このシンポジウムで配布された全94ページの『富山文学の会ふるさと文学を語るシンポジウム報告書』は、表紙に当時のポスターを印刷した予稿集であったが、たちまちのうちに品切れとなり、現在はほとんど残されてお

らず、関係者でも入手が困難な稀少な冊子となった。なおこの冊子には、表紙や目次には名があるものの、萩野の論文が収められていない。手違いがあったとのこと。また、表紙には名前が出てこないが、公開読書会の予稿として、高熊哲也「蜃気楼の町魚津を背景とする「押し絵と旅する男」」も掲載されていた。

ある種、伝説的なシンポジウムであったと言えるかもしれない。日本社会文学会大会と違って、県外の人材に頼らず、曲がりなりにも富山在住の研究者だけでこのシンポジウムを成し遂げたからである。私たちは、これによって、自信を得た。このシンポジウムがなかったならば、富山文学の会は十年もの長きにわたって、活動を続けてくることはできなかっただろう。その意味では、このシンポジウムが富山文学の会の原点と言えるかもしれない。三島霜川、瀧口修造、横山源之助、小寺菊子、堀田善衛に加えて、角川源義、田中冬二、森山啓といった、さまざまな文学者たちが次々と紹介されていく。実際、このシンポジウムは、この会の今後の研究内容の縮図となっていた。「ふるさと文学魅力紹介活動支援事業」に改めて謝意を表するとともに、朗読サークル「言の葉」の

皆さんにも感謝したい。

この年にはほかに、四月に丸山珪一による公開読書会「堀田善衛「鶴のいた庭」」、六月に黒崎真美による研究発表「1910年の横山源之助」、八月に高熊哲也による公開読書会「江戸川乱歩「押し絵と旅する男」」、一二月に勝山敏一による研究発表『女一揆の誕生』が行われるなど、充実していた。公開読書会は、中央通りであった「和が家」で行われた。金子や高熊には、まちなかの賑わいを創造しようとする志向があった。

一〇月には、金子のはからいで、富山大学で行われた国際シンポジウム「文学における国際交流―異文化理解の検証と普及」でのデンマークコペンハーゲン大学(当時)の長島要一の講演等を聴講することもできた。

この年に刊行された会員の著作としては、金子幸代監修・解説『小寺(尾島)菊子選集』(全六巻、富山大学人文学部比較文学・比較文化研究室、二〇一〇・三)や勝山敏一『女一揆の誕生―置き米と港町』(桂書房、二〇一〇・一二)がある。

③二〇一一年 第二回シンポジウム（富山大学）

二〇一一年は、会の運営も軌道に乗り始めた。

二月一六日に萩野恭一「新発見資料瀧口修造の短歌七首」を行い、翌月のシンポジウムの打ち合わせを行う。

三月一九日には富山大学人文学部4番教室にて、第二回ふるさと文学を語るシンポジウム「現代から見た富山の作家と作品」が開催された。この年は三部制で、第一部が金子幸代の基調講演「小寺菊子の少女小説」、第二部に近藤周吾「川口清と源氏鶏太」、丸山珪一「幻想文学としての「鶴のいた庭」、高熊哲也「幸田文「木」「崩れ」をめぐって」という三本の発表が続ぎ、第三部が昨年同様、朗読サークル「言の葉」による幸田文「崩れ」の朗読であった。さらには、紙芝居「瀧口修造の少年時代」

（絵 野島一子 作 野島清治）の展示も行われた。

この年には他にも、四月に近藤周吾による公開読書会『痴人の愛』が「和が家」で行われた。六月に金子幸代による研究発表『鷗外と近代劇』があった。八月に丸山珪一による公開研究発表「人間生活と時間」がMAG.NET富山まちなか研究室で行われた。一〇月に高

熊哲也による研究発表「幸田文と国語教科書」があり、一二月に黒崎真美による読書会「室生犀星「古城下町へ」が八百松亭で行われた。（場所を特記しないものは、すべて富山大学人文学部。）

この年の特筆すべき出来事としては、歌人・作家の辺見じゅんの死去であった。高志の国文学館の館長に内定していただけにショックであった。

この年に刊行された会員の著作としては、金子幸代『鷗外と近代劇』（大東出版社、二〇一一・四）がある。

④二〇一二年 第三回シンポジウム（富山大学）

二〇一二年は、前年六月に金子に誘われ加入した新メンバー中山悦子による研究発表「富山県出身の偉人、独学の国語学・国文学者―山田孝雄について」が二月に行われ、シンポジウムの打ち合わせもこのときに行った。

第三回ふるさと文学を語るシンポジウムは、二月二六日に富山大学人文学部4番教室で開催された。前年同様の三部制で、第一部が丸山珪一による講演「堀田文学の北陸モチーフ」。第二部がシンポジウム『場』として

の富山」で、司会に近藤周吾と中山悦子を立て、金子幸代「小寺菊子と富山」、高熊哲也「幸田文と国語教科書」、黒崎真美「室生犀星「古城下町へ」の三本の発表が行われた。第三部では、朗読サークル「言の葉」による小寺菊子作品の朗読が行われた。

この年には他にも、四月に黒崎真美による公開読書会「古城下町へ」に描かれた少女」がフォルツァ総曲輪で行われた。六月に高熊哲也による研究発表「泉鏡花「蓑谷」について」があった。また、一〇月には、富山文学の会では初の文学散歩「伏木堀田文学散歩」が行われた。これは丸山珪一を中心とし、野村剛・澤田隆彰・萩野恭一が協力して成った労作であり、一同はその緻密な実証に溜飲を下げた。(ここで開拓された文学散歩は以後、日本近代文学会北陸支部や、丸山が翌二〇一三年に興すこととなる堀田善衛の会でも踏襲される名物コースとなった。)一二月には近藤周吾による読書会「太宰治「走れメロス」研究史」が漁菜亭で行われた。

この年の特筆すべき出来事としては、三月一日、金子幸代の『鷗外と近代劇』が第20回やまなし文学賞研究・評論部門を受賞したことと、七月六日に高志の国文学館

がオープンしたことである。

⑤二〇一三年 第四回シンポジウム(高志の国文学館)

二〇一三年二月、金子幸代による研究発表『鷗外と近代劇』補遺』を行い、例年のようにシンポジウムの打ち合わせを行った。

三月三日、第四回ふるさと文学を語るシンポジウム「文学の原風景」が高志の国文学館101研修室で開催された。これが富山文学の会が高志の国文学館を使用した最初のイベントとなった。会場の関係から時間を切り詰める必要があった、これまでの三部制から、研究発表のみの構成となったところが残念であったが、それでも多くの観客を集め、好評であった。黒崎真美と萩野恭一を司会に立て、高熊哲也「泉鏡花の『蓑谷』」、金子幸代「小寺菊子―徳田秋声と三島霜川―」、丸山珪一「堀田善衛の詩「故里」―「死の影」のもとで―」、近藤周吾「井上靖と源氏鶏太」という四本の研究発表が行われた。

この年にはその他にも、四月に今村郁夫による公開読書会「ヘルン文庫の書き込み調査報告―『化け物の歌』

の原典『狂歌百物語』がフォルツァ総曲輪で行われた。六月に萩野恭一による研究発表「瀧口修造の少年時代」

があり、八月に黒崎真美による公開読書会「三島霜川「水郷」を読む」がフォルツァ総曲輪で行われた。一〇月には、高熊哲也による文学散歩「縄ヶ池（泉鏡花「蓑谷」と井波（池波正太郎ふれあい館）」を実施し、前年に続く文学散歩が好評を博した。一二月は丸山圭一による読書会「堀田善衛『路上の人』」が八百松亭で行われた。

この年は、水野真理子『日系アメリカ人の文学活動の歴史の変遷——1880年代から1980年代にかけて』（風間書院、二〇一三・三）、『詩が光を生むのだ 高島高詩集全集』（桂書房、二〇一三年一〇月）が刊行された。

この年から高志の国文学館が、富山県ゆかりの文学や郷土の研究を行う優れた団体や個人に奨励金を交付する「高志プロジェクト」を開始した。第一回に選ばれたのは丸山圭一「堀田善衛の北陸、北陸の堀田善衛」、萩野恭一「須山ユキエにおける〈雪〉へのあこがれ——越中万葉に惹かれた女性移住者のまなざし——」、金子幸代「富山の女性作家の調査研究とデータベースの構築」であった。

⑥二〇一四年 第五回シンポジウム（高志の国文学館）

二〇一四年は二月に金山克哉による研究発表「詩人高島高をめぐって」で幕を開けた。金山は富山商業高校教諭で、この会には前年に加わった。このときに例年どおり、シンポジウムの打ち合わせが行われた。

第五回ふるさと文学を語るシンポジウムは、三月二日に高志の国文学館で開催された。まず金子幸代「小寺菊子と泉鏡花——「屋敷田甫」と「蛇くひ」——」を発表し、次に水野真理子「翁久允の人間観——在米時代を中心に——」の発表があった。その後は「小特集 三島霜川没後80年」を掲げ、中山悦子が「水の郷」を朗読し、黒崎真美「「水の郷」考」、野村剛「三島霜川の足跡——北陸との関連を念頭に」をそれぞれ発表した。前年は行われなかった朗読が復活している。ただし、発足当初から続いていた朗読が、これ以降、なくなってしまうのは残念である。（正式なプログラムにはないが、最初のころは富山高専演劇部による朗読も行われていた。これは遠く、二〇一六年一月二三日に高志の国文学館の第2回高校生による朗読会に招待された富山第一高校放送演劇部と富山高専演劇部の合同公演『青い夜道』朗

読につながっていく。高志の国文学館年報の記録では「富山第一高等学校放送部」「富山高等専門学校放送部」となっているが、正確にはそれぞれ「富山第一高等学校放送演劇部」「富山高等専門学校演劇部」である。

この年にはその他にも、四月に野村剛による公開読書会「霜川文学の原点『ひとつ岩』を読む」がフォルツァ総曲輪で開かれた。六月に近藤周吾「新民謡の流行―『民謡詩人』を中心に」、八月に丸山珪一「名前をめぐる問題あれこれ」、一〇月に水野真理子「概説 翁久允の生涯と思想―久允文庫所蔵の書籍を視野に入れて―」という研究発表が行われた。八月と一〇月の会場には富商会館が使われた。この年の特徴としては、金山、水野、野村ら、新しい会員の活躍が挙げられよう。金山は富山商業高校教諭、水野は富山大学非常勤講師（四月から准教授）、野村は在野の研究者で、緻密な考証に基づいた年譜研究に力を発揮する。さらには、西田谷洋が、愛知教育大学から富山大学の教授へ転じてきた。この年は新しい仲間が加わり層が厚くなった、と記述できるはずだったが、この会の代表である金子幸代が病となり、秋から富山大学を去らざるを得なくなった。さらに悪いことに、富山

県の補助金が第五回シンポジウムまでで打ち切りとなった。このダブル・パンチは大きな痛手となった。これまでに金子に頼りきり、補助金に依存してきたからである。

これは富山文学の会だけのピンチではなかった。富山大学人文学部比較文化分野、日本近代文学会北陸支部、文学に親しむ会の運営など数多くの業務に連鎖した。急遽、富山高専の近藤周吾が兼務し代行することになった。富山文学の会の代表代行（後に代表）には、同じく富山高専の高熊哲也が就いた。このときに私たちは改めて金子の偉大さを思い知ることになったのである。

この年は、金子幸代編集・解説『小寺菊子作品集』（桂書房、二〇一四・二）が刊行された。

高志の国文学館の高志プロジェクトには、優秀として金子幸代「富山の女性文学の基礎的研究」が認定された。

三 “守成”の第Ⅱ期——『群峰』時代

⑦二〇一五年 『群峰』の創刊

二〇一五年は、まさに“守成”の年であった。県から

の補助金のみならず、金子の想定外の退場により富山大学の施設を使用することすらできなくなった私たちは、墜落する飛行機を操縦するような不安を抱いた。

まず経済的に切り詰めるため、宿願であったはずの高志の国文学館の使用を泣く泣く断念、富山大学に会場を戻した。まだ金子の名前が辛うじて富山大学に残っていたことと、西田谷、水野が加わったこと、近藤が臨時で雇われていたことを利用した。

シンポジウムの報告書は、補助金打ち切りに伴い、発行義務がなくなったため、新たに機関誌『群峰』を発行することにした。これまでのように業者に全面委託というわけにはいかなくなり、簡素化せざるをえなくなり、創刊号は高熊の手作業によって編まれた。

二月、高熊哲也による研究発表「『蛇くひ』をめぐる」が富山大学で行われた。ここで今後についての種々の相談も行われた。

三月七日、第6回研究大会が富山大学人文学部四番教室行われた。これまでの名前を研究大会と改めたが、通し番号は継続した。黒崎真美「横山源之助と富山」、野村剛「歌人・藻谷銀河——戦後70年に想う」、近藤周吾「文

学者は県境を越える——井上靖記念館所蔵の富山文学関係資料について——」の三本が発表された。金子のいない寂しさは埋めようがなかったが、これまで六年の蓄積で何とか乗り切った。

この年はほかには、四月に野村剛による公開読書会「横山源之助『日本の下層社会』を読む」がフォルツァ総曲輪で行われた。六月には中山悦子による研究会「馬場はるとラフカディオ・ハーン ハーン作「ハル」とともに」が高志の国文学館で行われた。大会で高志の国文学館を使えなかったため、小さな部屋ではあったが、ここで高志の国文学館を利用した。中山はこのとき、高志の国文学館長秘書であった。八月には高熊哲也による「泉鏡花「蛇くひ」をめぐる(再)」が藤本研究室で行われた。澤田の配慮により、藤本研究室をお借りした。一〇月には、近藤周吾が文学散歩「源氏鶏太の散歩道」を担当した。金山の助力も得て、富山商業高校から出発し、中山輝旧邸を経て、高志の国文学館に寄り、新発見の写真を初公開した後に、城址公園、源氏鶏太生家跡を巡った。

この年の特筆すべき発見としては、源氏鶏太の写真数百点がある。幼いころの源氏鶏太の家族写真や軍隊時代

の写真など貴重な写真群を近藤が発掘した。

また、この年に特筆すべき出来事としては、富山大学の人事である。前年の水野、西田谷に続いて、小谷瑛輔が四月に富山大学准教授に着任した。それぞれに多忙な三氏に金子の役割のすべてを期待するわけにはいかないもの、それぞれの立場ややり方によって、富山の文学研究や富山文学の会に助力いただいた。また、富山大学ヘルン研究会などの新機軸を次々と打ち出し、新しい動きを起こしていったことは好ましいことであった。皮肉なことではあるが、金子がいなくなつた後、金子が願っていた文学研究の最盛期が富山にも訪れることになる。

高志の国文学館の高志プロジェクトには、優秀として近藤周吾「環日本海地域におけるメディアミックス—文学と隣接ジャンルとの交渉、特に前史としての詩と新民謡の交渉史を中心に—」が認定された。

⑧二〇一六年 八木光昭の登場

二〇一六年は、二月に野村剛による研究発表「啄木『一握の砂』の成立と橘智恵子 附…札幌の橘家と越の橘家

のことなど」が藤本研究室で行われた。

三月五日、富山大学人間発達科学部において第七回研究大会が開催された。懸案の会場は、西田谷の尽力があった。第一部に八木光昭を招き、講演「富山の近代文学」が行われた。八木は、富山文学研究の第一人者であったが、聖徳大学教授として東京にいた。ところが、定年されて富山に戻ってきたため、八年目にしてこの講演がようやく実現した。八木は後に会員となり、金子のいなくなつた今、心強い後ろ盾となつてくれている。第二部では、金山克哉「詩人高島高の活動—いくつかの雑誌を中心に—」と、近藤周吾「源氏鶏太の伝記的研究」の二本の研究発表が行われた。

この年は他にも、四月に今村郁夫による研究発表「小泉八雲『常識』研究—ヘルン文庫書き込み調査から—」を藤本研究室にて、六月に高熊哲也による公開読書会「泉鏡花『黒百合』を読む」を文苑堂書店豊田店にて、八月に金山克哉による研究発表「詩人高島高の〈冬〉—『北方の詩』から『山脈地帯』へ—」が行われた。文学散歩は十月、澤田隆彰による「高志の国文学館」周辺の文学散歩」が県民カレッジと合同で開催された。鱒寿司の食

べ比べが行われるなど、楽しいイベントとなった。

この年の著作としては、近藤周吾「富山の文学——文学とサブカルチャーの『両輪駆動』」（二〇一六・一一）がある。日本近代文学会の『日本近代文学』に、富山の文学の論考が載るのは初のことであった。ちなみに、この研究ノートの英題は“On the Koshinokuni Museum of Literature”である。

高志の国文学館の高志プロジェクトには、優秀として黒崎真美「横山源之助の人物像に迫る」、小谷瑛輔「若者・若手作家の感性からの見る富山文学」が認定された。

⑨二〇一七年 上田正行の登場

二〇一七年は、二月に近藤周吾による研究発表「富山の文学」が行われ、研究大会の打ち合わせが行われた。

三月四日、第八回研究大会が富山大学人文学部4番教室で開催された。会場は小谷の尽力による。第一部に上田正行を招いての講演「日本海詩人」のこと、千石喜久のこと」が行われ、第二部では黒崎真美「横山源之助と郷土の人々」と、小谷瑛輔「山内マリコ作品における〈地

方〉と〈階層〉」の二本の研究発表が行われた。上田は金沢大学名誉教授で、室生犀星記念館と徳田秋聲記念館の両方の館長を務める石川県の文学研究の第一人者である。また、満を持って登場した小谷の発表は、これまでの会が取り上げてこなかった現存する作家である山内マリコを取り上げ、その内容も新鮮であった。

この年はその他にも、四月に木下晶による研究発表「愛玩から鑑賞へ 林忠正の提言」が富商会館で、六月には近藤周吾による公開読書会「源氏鶏太『青空娘』を読む」が富山大学で、八月には萩野恭一と近藤周吾による読書会「須山ユキエ『延段』」が富山高専射水キャンパスでそれぞれ行われた。文学散歩は一〇月、黒崎真美による魚津文学散歩が行われた。

木下は県立高校校長協会会長を務めるなど、富山県の国語教育の分野で大きな功績を残した後、現在は富山県立大学参与で、『とやま文学』の編集長。

この年の特筆すべき出来事としては、全国国語国文学会が富山大学で開催されたことである。高志の国文学館館長の中西進が会長である縁もあり実現した。上田正行による講演「千石喜久という詩人——『日本海詩人』を

視野に入れつつ」などが行われた。

この年は、西田谷洋『村上春樹のフィクション』（二〇一七・一二）、小谷瑛輔『小説とは何か？——芥川龍之介を読む——』（ひつじ書房、二〇一七・一二）が刊行された。また、西田谷洋の編んだ『文学研究から現代日本の批評を考える——批評・小説・ポップカルチャーをめぐる』（ひつじ書房、二〇一七・六）に西田谷洋『機動戦士ガンダムUC』における主体性」、近藤周吾『『おおかみこどもの雨と雪』論——『二十四の瞳』『八日目の蟬』とのテキスト連関』、小谷瑛輔『亀井秀雄『感性の変革』と柄谷行人『日本近代文学の起源』』が載り、萩野恭一ら富山県郷土史会の編んだ『郷土研究を志す人へ』（桂書房、二〇一七・一一）には近藤周吾が「富山の文学に興味を持つ若い友人へ」を寄稿した。

⑩二〇一八年 新しい世代の台頭

二〇一八年は、二月に孫媛媛による研究発表「芥川龍之介の金沢訪問と室生犀星」が行われた。孫は当時、富山大学の大学院生で、現在は金沢大学大学院博士後期課

程に在籍する留学生。近藤周吾の説を批正し、新しい世代の台頭が印象づけられた。

三月には、第九回研究大会が富山大学人文学部4番教室で開催された。会場は昨年度に引き続き、小谷の尽力による。第一部では、高熊哲也「高熱隧道」と「黒部の太陽」と野村剛「音楽少年」から「詩人・堀田善衛」への二本が発表された。第二部では、丸山珪一による講演「曇りの日」のことなど―堀田善衛生誕百年を迎えて―が行われた。副題にもあるとおり、堀田善衛生誕百年を記念して、この回は堀田善衛小特集となった。

この年はその他にも、四月に中山悦子による研究発表「はじめに―文学と観光の相互関連 没後20年 佐多稲子「水」を読む」が高志の国文学館で行われた。六月には富山大学日本文学分野近代ゼミと共催で「山内マリコ『メガネと放蕩娘』を読む」が行われた。小谷瑛輔の指導により、若い大学生二名が発表した。八月には金山克哉「高島高の戦争詩」と、谷川拓矢「山川健一『人生の約束』の二本の研究発表が行われた。この時期に二本の研究発表が行われることは例がないが、谷川が福島県からわざわざ来ることから、このような形になった。谷

川は福島県の私立高校の教員。文学散歩は一〇月、村上瑞季による「中央通り・いたち川 山内マリコ」『メガネと放蕩娘』ツアー」が行われた。村上は六月にも発表した富山大学の学部生である。

この年には、黒崎真美『童子と笛の音と富山と——室生犀星論——』（龍書房、二〇一八・八）、竹内栄美子・丸山珪一編『中野重治・堀田善衛 復書簡 1953-1979』（影書房、二〇一八・一一）が刊行された。また、木下晶が編集長を務める芸術文化協会の『とやま文学』第三十六号（二〇一八・三）が「特集 女性作家として生きた二人——小寺菊子・尾竹紅吉——」を組み、西田谷洋「富山への相反する思い——小寺菊子「念仏の家」、水野真理子「小寺菊子と翁久允——文学を通じた交流」、小谷瑛輔「レズビアニズムと尾竹紅吉」を掲載した。

四 今後の展望

金子幸代が去った後しばらくは、富山高専勢——高熊・近藤・黒崎——が急場を凌いできた感もあったが、小谷瑛輔の活躍などにより、富山大学のプレゼンスが再び高

まってきたと言えよう。若手の台頭が目立ち、新しい時代の到来を予感させる。その一方で、その小谷が富山を去ることになり、富山文学の会は再び試練に立たされることになりそうだ。富山の高等教育機関で富山の文学を専門的に探究する場がなくなってしまうことは、（若い世代を育てるといふ観点からして由々しき事態であると言えらる。）

二〇一九年の第一〇回記念大会がさしあたり、この会の、そして富山の今後の文学シーン、研究シーンを占う一つの試金石となるだろう。

付記 この十周年記念号を刊行するに際しては、創業者である金子幸代氏より過分なる御寄付を頂戴している。これまでの幾多の御高恩とともに、心よりの謝意を表するとともに、氏の回復を一同、祈念してやまない。

富山文学の会発足あれこれ

黒崎 真美

二〇〇七年に日本社会文学会の全国大会が富山大学で開催された。その開催実行委員の依頼としてその年の四月にお電話をいただいたのが、そもそのきっかけだった。二〇〇二年に富山に移り住んできて、文学研究に触れる機会が少ないことに寂しさを募らせていたので、この依頼の連絡は大変ありがたかった。富山大会は十一月十日から十二日まで三日間開催し、最終日の文学散歩では岩瀬から水橋、魚津の米騒のモニュメントや横山源之助の顕彰碑、最後は横浜事件につながる旅館紋左を巡った。この日本社会文学会の富山開催が、金子幸代さんとの初対面だった。

金子さんとの知己を得てから、東京での文学研究会でも親しくお話するようになった。その際に、仕事や育児のために遠方で開催される文学研究会に参加できないもどかしさを語り、地元で文学研究会の会がないことを嘆き、ぜひ地元富山で研究の場を作ろうと持ち掛けた。それが

実現したのが二〇〇九年九月であった。

初回の発足会議は、金子幸代さんが丸山珪一さんや萩野恭一さんに声を掛けてくださって、私を含めた四人で総曲輪のオレンジシャリマティに集まった。ちょうど富山県ではふるさと文学推進の気運があり、県の推進事業として補助金交付の予算が組まれていた。そこで、「富山の文学の発掘と紹介」をテーマの一つに掲げて、文学研究会を作るために県内在住の文学研究者や文学に関わる方にお声がけをした。十月の顔合わせに参集してくださったのは、発足会議参加者の四人の他に桂書房の勝山敏一さん、富山高等専門学校の高熊哲也さんと近藤周吾さん、当時はまだ院生だった今村郁夫さんだ。さらに瀧澤弘さんが加わった総勢九名で、富山大学を活動拠点にして、代表金子幸代さん、副代表丸山珪一さん、事務局黒崎真美で富山文学の会が動き始めた。

発掘と紹介のために、二か月に一回の研究會・公開読書會や、年一回のシンポジウムの計画、報告書の作成などの活動の骨格を定め、実際の研究会として機能し始めたのは三回目の十二月からだった。例会を通じて、小寺菊子や堀田善衛、瀧口修造、三島霜川、源氏鶏太、横山

源之助など、これまで触れることのなかった作家や作品に出会った。江戸川乱歩や与謝野晶子、泉鏡花、室生犀星が富山を描いていることを知った。大正から昭和にかけて富山を中心に詩作が盛んにおこなわれていたことを知った。研究報告があるたびに未知の作家や作品に出会い、富山は決して文学不毛の地ではないことに驚喜した。〈富山〉という切り口で想像していた以上に世界が広がり、文学研究の面白さを再確認し、文学に親しむ喜びを感じた。また、公開した読書会や大会には大勢の方がご参加くださり、県内の文学研究者や文学愛好者と知り合うことができたことも、富山文学の会発足の収穫の一つである。

県への報告のために作った報告書が五回、それを引き継いで作った機関誌『群峰』も今回で五号を数える。『報告書』には富山ゆかりの作品とその解説を載せ、いづれは作品集にまとめる計画もあったが、立ち消えになっていることには、悔いが残る。『群峰』を創刊後には、学術機関リポジトリに登録したり、ホームページを作成したり、インターネットを通じて富山文学の会から発信する試みも続けている。

大会の開催は今回で十回目である。例会すべてを数えると六十九回の会を重ねてきた。発足当初九名だった会員は、現在多くの学生の参加を得て三十五名である。会員はそれぞれに多忙の中でも、時間を作って例会に集まってくださっていることに敬意を表する。

研究者が少ないと思っていた富山の地で、気が付いたら分野の違う研究者や各専門分野の第一人者が集まる会になったのは嬉しい誤算である。残念なのは若い研究者や愛好家の少ないことだ。それでも、これからも地道に活動を続けていくことで、さまざまな方法論と出会ったり、多方向からの思考を吸収したり、異なる意見の交換をしたり、それぞれの研究の試論をする場であり続けられたらと思う。

富山文学の会との出会い

高熊 哲也

金子幸代先生から、富山ゆかりの近代文学について、フランクに研究成果をもちよってみたらどうかとお誘いがあったのは2009年だった。早いものです。10年の歳月が流れたが、その間隔月に1回程度の例会を重ねて、個々の会員の皆さんにとつても、会全体としても相応の研究成果を積み上げてきたと言つていいと思う。よい勉強の機会を与えていただいたという思いで、例会にはほぼ欠かさず出席した。今となつてみれば、会員のみなさん方の多様な研究主題に接し、議論を交わしたことは得がたい経験になつたと振り返つている。

私自身は、それまで富山を出自に持つ文筆家にあまり興味を持つたことがなく、翁久允や堀田善衛といった固有名詞は知つていても、彼らの営為についてほとんど知識もなく、さらに作品の舞台を富山に設定した作品群も視野に入れて「ふるさと文学」という括りで捉えるといったことは、自分の問題意識の範疇には全く入つていな

かつた。自分のそれまでの研究テーマは、梶井基次郎などを題材に、対象を捉える表現主体のあり方、表現主体がテキストを織り出すプロセスを考察することであつた。人がどのように環境と交渉を重ねながら人となるかという、誰しもがくぐる主体の獲得という問題への関心から文学的営為にアプローチしていたということになるうか。そういつた自分の主題と本会を結ぶものとして、蜃気楼をモチーフとした乱歩の「押絵と旅する男」を自分が担当した例会で取り上げた。ミステリー仕立ての怪異譚は、エンターテイメントとして現代でも色褪せず、様々なオマージュを生んでもいる。富山が作品の舞台に選ばれることをどうとらえるかという視点からの分析を試みたが、それが今自分の取り組む主題につながる契機になつたのだなと改めて感じている。

幸田文の「崩れ」を、造山運動でできた山岳を削りながら国土を形成してきた、日本の風土の原風景を描いた作品として読むとき、富山をその一典型と捉えることができる。今なお砂防工事が続く鳶崩れは、常願寺川下流域の人々に自然への畏れを刷り込み、今なお様々な形で語り継がれ、近代文学にも影響している。例を挙げれば、

鏡花の「黒百合」がその代表格であるが、自分の住まいの近くを流れるいたち川沿いに目をやると、源氏鶏太の旧居跡を本会の近藤さんに案内してもらったこともある。さらには宮本輝の「蛍川」の舞台になっていることは有名だが、いずれも今述べた富山の風土の影響下にその文学的営為を考えることもできると思う。

そのような視点から作品に描かれた「描かれた富山」を見ると、実はそれは近代化の断面を示す相に他ならない。鳶崩れは自然への畏れを植えつけたが、同時に、自然に抗い人々の暮らしを守るための人の営みを生む。治水事業にエネルギーを注ぐことは、人間の力が豊かさを生み出すという近代の理念を具現化することである。一方でそれは、「黒百合」に描かれる立山の幻想への郷愁や、主人公お雪の悲恋といった前近代的な情緒への憧憬も併せて進行する。先に述べた「押絵と旅する男」において、近代の産物レンズが、蜃気楼と重ねられることで不思議を生み出す構造とパラレルだとも言えよう。

時代が進行して、近代産業化が富山という地方の市民社会に目に見える形で浸透し始めた姿を、最も顕著に示しているのが吉村昭の「高熱隧道」や木本正次の「黒部

の太陽」であろう。ダム建設を人間の暗い情念の実現として描くか、戦後民主国家への明るい展望として描くかは別にして、ダム建設は近代化の光と影を象徴しているのである。

「描かれた富山」を近代化の断面として捉え、その跡付けと構造の分析を進めるのが、今の自分の関心事だが、そこから敷衍して「富山を出自とする言語表現者」たちが近代という時代の層にどのように位置づけられるのかという主題も見えてきそうな気がしている。

私にとつては、このような形で自分なりの研究テーマとの出会いを与えてくれた本会は大切な存在であり、とりわけ誘って下さった金子先生には心から感謝している次第である。

金子幸代氏の講義と富山関係の業績

今村 郁夫

富山文学の会を設立した金子幸代氏は、富山大学人文学部教授として、学部生および人文科学研究科の大学院生に比較文学の講義を行っていた。筆者も学部から修士修了までの二〇〇四〜二〇〇九年度に教えを受けた。金子氏の講義や主な富山関係の業績について、簡単に紹介したい（講義名は筆者受講当時）。

学生の自主性を養成

金子氏が主に担当していたのは、比較文学概論、比較文学講読、比較文学演習、比較文化実習などである。

概論では、森鷗外や夏目漱石、小泉八雲、永井荷風、芥川龍之介、太宰治ら作家をはじめ、映画、アニメなどを取り上げ、比較文学の視点からどのような研究ができるか概説した。受講生にはおすすめの本を紹介してもらうなど学生参加型の講義だった。

講読は、主に鷗外の作品を取り上げ、受講生が調査・研究し、成果を発表する形式で、作品へのアプローチ方法を教授した。二〇〇七年からは、鷗外が海外新聞記事を紹介した『椋鳥通信』に書かれている記事を分類し、当時の時代背景とも絡めながら読み解くことも行った。

演習は通年で開講され、前期には受講生が作品を研究するための文学理論をまず学び、それを実際の作品で実践した。後期になると、主に鷗外の戯曲や翻訳戯曲を題材に演劇の上演に取り組んだ。演劇は脚本や衣装、大道具・小道具など全て受講生が準備する本格的なものだった。もともとは『演芸画報』という雑誌の劇評研究に端を発しているが、上演という形をとることで、当時の時代背景や登場人物の心情、せりふの意味などの理解を深めていった。

実習では、富山の女性作家、小寺菊子の作品研究を進めた。各作品の解題作りや掲載雑誌の調査をはじめ、作品研究を通しておすすめの作品を選出した。成果として、計約二〇〇〇ページに小説と随筆五〇作品を収めた『小寺（尾島）菊子選集』（全六巻）（二〇一〇年三月）を制作した。

講読や演習、実習といったゼミ形式の授業では学期末に、受講生がグループで調査・研究し、発表した際のレジュメを冊子にまとめたり、受講生に発表内容を整理したレポートを執筆させたりして、きめ細かにフォローアップを行った。

学外実習では、主に富山県内の美術館や文学館を見学したほか、三月には卒業論文に向けた資料収集も兼ねて東京方面で実習旅行を行った。国立国会図書館や神保町の古書店、森鷗外住居跡（水月ホテル）をはじめ、年によつては横浜まで足を延ばし神奈川近代文学館、日本新聞博物館、鎌倉文学館なども訪れた。

夏と春の長期休業中には、太宰治の研究者や岩波書店の元編集者ら外部から講師を招き、集中講義形式で比較文学特殊講義が開講された。

これら比較文学の専門科目のほか、所属講座のリレール形式の演習である文化環境論演習では、米騒動を扱った。当時の新聞記事や文学作品での描かれ方などを調査して発表する形式で、文献調査という研究の基礎の養成にも力を入れていた。

一年生向けには、前述の概論のほか、国際文化入門、

教養教育の日本文学を担当し、比較文学・比較文化を専門に学ぶ学生以外にも文学研究の面白さを伝えていた。

ちなみに、二〇〇八年度からは『富大比較文学』という機関誌の発行も始めた（二〇一六年度まで。現在は富山大学人文学部近代文学ゼミが第二期を発行中）。主に卒業論文・修士論文の抜粋を掲載した。

映画を年間百本

金子氏は文学だけでなく映画にも精通しており、年間百本観ることを目標に映画館に足を運んでいた。映画の映像表現を説いたり、ドキュメンタリーものを題材に現代の社会を考えさせたりする講義も行っていた。金子研究室には、映画やアニメのビデオ・DVDが約三百あり、借りに来た学生と映画談議に花を咲かせることもよくあった。

金子氏と映画の関係では、まちづくりとやまが運営する公設民営のフォルツァ総曲輪を外すことはできない。フォルツァ総曲輪は二〇〇七年二月に開館し、単館系の映画を数多く上映してきた。金子氏は映画監督の山中貞

雄の魅力を解説するトークイベントなど講演を多く行ったほか、演習の講義で上演する演劇を同館のホールで披露し、まちなかのにぎわいに貢献した。加えて、金子研究室ウェブサイト内のコラム日本海詩人日記(文づかひ)で、同館で上映している映画を紹介するなど、富山の映画文化発展に尽力していた。同館は市民に惜しまれつつ、二〇一六年九月から休館している。

富山文学振興に尽力

金子氏は富山文学の裾野を広げるのに学外での活動にも力を尽くしており、高志の国文学館の「文学講座」や、文学に親しむ会の講師も務めた。

富山市の郷土史家、故岡本悦子さんの遺族から作品のコピーを譲り受けた小寺菊子関係では、二〇〇九年六月に富山県立図書館でのふるさと文学講演会で「富山の女性文学―小寺菊子の先駆性」と題して講演したほか、富山県と富山大学の連携協力事業のふるさと文学県民講座で、「富山の女性文学の先駆者・小寺菊子を読む」「富山の女性作家・小寺菊子の生き方を読む」の講義を行った。

さらに、二〇一四年一月には、桂書房から『小寺菊子作品集』(全三巻)を刊行した。A5判、総ページ数約一五〇〇で、九〇作品が収録されている。

学生思いの教授

ところで、筆者が金子氏に教えを受けていた前後の二〇〇五〜二〇一〇年の間に、筆者も含め六人が大学院に進学している。一学年が約五人の小規模なゼミでこれだけの人数が進学しているのは、研究だけでなく教育にも力を入れていたことを物語っていると思う。

最後に、金子氏の印象的な言葉を一つ紹介したい。「今やっていることは無駄ではない。確実に力になっている」という趣旨のことをゼミ生に常々言っていた。筆者も仕事をできるようになった今、そう感じる事が多くあり、金子氏の学生思いを表す言葉だと思っている。

高志の国文学館と富山の文学

綿引 香織

高志の国文学館について

高志の国文学館は、富山県立の文学館として、平成24年7月6日に富山市内に開館した。「富山県ゆかりの作家や作品をわかりやすく紹介するふるさと文学の総合窓口」「文学作品のみならず、絵本、映画、漫画、アニメなど幅広い分野の作品を気軽に楽しみ学ぶ機会の提供」「深く探求する・創作する・発表する刺激ともなる場の提供」という三つの基本理念のもと、展示、教育普及、調査研究、収集・保存等の活動をすすめている。

開館後6年が経過した現在、富山の文学との関わりを軸に、これまでの当館の歩みを振り返ってみたい。

展示活動

常設展では、『万葉集』から現代の文学、漫画、アニメ、

映画にいたるまで、富山県にゆかりのある作家や作品の魅力や、ジャンル・時代ともに幅広く紹介している。さらに、郷土の先人や富山大学附属図書館所蔵のヘルン文庫（小泉八雲旧蔵資料）についてもとりあげ、ふるさとの豊かな文学風土の紹介につとめている。

「富山県文学鳥瞰地図」や「ふるさと文学年表」、富山県出身の作家・漫画家の作品を並べる大書架は、富山の文学を概観するための展示である。

『万葉集』の歌人大伴家持が、国守として赴任した越中国で残した多くの歌は、富山県の文学の始まりともいえることから、映像や音声による展示装置や、歌をテーマに描いた絵画など、多彩な手法で紹介している。

近現代の文学者については、横山源之助、筏井竹の門、三島霜川、小寺菊子、前田普羅、田部重治、大井冷光、翁久允、田中冬二、瀧口修造、岩倉政治、高島高、新田次郎、源氏鶏太、曙文兵、角川源義、堀田善衛、佐伯彰一、遠藤和子、柏原兵三、木崎さと子、辺見じゅん、宮本輝などを取り上げて紹介している。

漫画家については、山根青鬼、山根赤鬼、藤子・F・不二雄、藤子不二雄[Ⓐ]、まつもと泉、原秀則、花咲アキ

ラを紹介している。漫画やアニメの制作過程がわかる展示装置もある。

また、テーマ展示の形をとっているのが、本県の山にまつわる文学作品をまとめた映像装置「山岳文学物語」、平成29年より新たに設けた「クローズアップコーナー」、企画展の関連資料や当館のコレクションなどを紹介する「特別コレクション室」である。

ヘルン文庫コーナーでは、小泉八雲と、ヘルン文庫を富山に誘致した南日恒太郎を、越中の先人コーナーでは、安田善次郎、浅野総一郎、高峰譲吉など諸分野で活躍した郷土の先人をとりあげて紹介している。

企画展については、年間4〜5回程度、文学、漫画、映画、アニメなどさまざまなテーマで開催している。開館記念展は「大伴家持と越中万葉―風土とこだまする家持の心―」であり、以下、富山ゆかりの作品（『長い道』と『少年時代』、『おおかみこどもの雨と雪』、作家・先人（大伴家持、辺見じゅん、藤子・F・不二雄、久世光彦、田中冬二、林秋路、宮本輝、堀田善衛、棟方志功、里中満智子、株式会社ピーエーワークス、浅野総一郎）、特定のテーマ（立山曼荼羅、おわら風の盆、川の文学、

三禅定の旅、温泉の文学、北陸を舞台にしたミステリー、竹久夢二の旅、竹久夢二と音楽、収蔵資料）に関する企画展を開催。近年は、「上橋菜穂子と〈精霊の守り人〉」〔没後20年 星野道夫の旅〕展など、富山ゆかりに限定しない巡回展も行っている。

また、回廊部分では、富山ゆかりの映画の公開に合わせて、映画パネル展なども随時開催している。

教育普及活動

企画展関連講座のほか、定番の文学講座として、県内大学から講師を招く「大学連携シリーズ」、郷土ゆかりの文学者を扱う「ゆかりの文学者シリーズ」、郷土の先人を扱う「巨人の物語をひもとくシリーズ」を開設。その他のイベントとして、「読書感想文サポート講座」「サブカルチャー講座」など児童・生徒向けのもの、「朗読と音楽の夕べ」「ミュージアムコンサート」「文芸サロン」など一般向けのもの、観桜や観月に合わせた季節のイベント、日頃の活動成果を披露していただく「書道パフォーマンス」 「高校生による朗読会」 などがある。

平成28年度からは、大伴家持生誕1300年記念事業として、県内および首都圏でのシンポジウム、記念式典、県内中学校における出張短歌講座、県内高校における出張万葉集講座などを実施。文学館職員が講師を務める出張講座も実施している。

研究助成制度「高志プロジェクト」

平成25年度から、富山県ゆかりの文学や郷土の研究を行うグループや個人を公募・選考し、奨励金を交付する研究助成制度「高志プロジェクト」を立ち上げた。古典から現代までの富山の文学に関するもの、歴史・民俗に関するもの、伝統工芸に関するものなど、多彩なテーマのもと意欲的な研究がなされている。

文学賞の創設―「大伴家持文学賞」「高志の国詩歌賞」

大伴家持生誕1300年記念事業の一環として、世界の詩人を対象とした「大伴家持文学賞」および富山県ゆかりの若手詩人を対象とした「高志の国詩歌賞」を創設。

第1回は、イギリスの詩人マイケル・ロングリー氏が大伴家持文学賞を、歌人の山田航氏が高志の国詩歌賞を受賞した。

資料の収集・保存・調査研究

このほか通常業務として、ゆかりの文学資料の収集・保存を行っている。収集資料や展示資料について整理し、調査研究を行った成果は、企画展および常設展の内容、展示に合わせて発行する図録やガイドペーパー、『高志の国文学館紀要』、講座等に反映できるよう努めている。また、ライブラリーコーナーには富山文学に関する本を並べ、自由な閲覧に供している。収蔵資料の閲覧希望に対しては、個別に対応している。

「富山文学の会」と高志の国文学館

「富山文学の会」には、第4回シンポジウム（平成25年3月）および第5回シンポジウム（平成26年3月）で、当館の研修室をご利用いただいている。

一部の会員の方々には、企画展関連講座や文学講座の講師、友の会バスツアーの特別解説員を務めていただき、「高志プロジェクト」へのご応募など、個人の研究成果を当館の活動に還元していただいている。

これからも「富山文学の会」の皆さまのご協力をいただき、地域に根ざす文学館として、共にふるさと文学の発掘・普及に尽力して参りたい。

黒崎真美著

童子と笛の音と富山と

——室生犀星論——

定価二、〇〇〇円＋税

二〇一八年八月二四日 初版発行

龍書房

東京都千代田区飯田橋二、一六、三

〇三、三二八八、四五七〇

・・・愛息豹太郎の死と〈笛の音〉が結びついたとき、犀星の悲嘆と慈愛の根源が見えたような気がした。「童子と笛の音」は、犀星の慈愛の分析となった。

（「あとがき」より）

富山高専と富山文学の会

近藤 周吾

「高専」の略称で親しまれてきた高等専門学校（歴史も、すでに半世紀を越えたが、数が少なく、大方には依然、秘密のヴェールに包まれているのではないだろうか）

かくいう私自身も赴任する以前は高専のことを詳らかにし得なかった。だから、高専のことがよくわからないという人がいても不思議に思わない。むしろ当事者として高専のことを外部に説明する責任があると痛感する。

というわけで、以下、高専、とりわけ富山高専と富山文学の会の関係について、公私緬い交ぜになることを厭わず、何かしら草しておこう。

高専は五年一貫教育を特色とする、知る人ぞ知る学校で、社会的評価は高い。海外でも Social Doctor としての役割に注目を集める。五年一貫教育と言ったが、全国に五つしかない商船学科の場合は、五年半で卒業する。九月卒業、十月就職という国際的なスタイルは先端を行く。さらに専攻科へ進むと、学士の学位が取得できる。専攻

科生は七年（七年半）にわたり、高専生活を過ごすから、高校と大学（学部）が一体となった学校だ。かつての旧制高校をイメージするとわかりやすい。

ただし、高専は高等教育機関であり、一五歳からカレッジライフが始まる。教育委員会の管轄でも、学習指導要領があるわけでもないのが、高校というより、短大や大学に近い。商船学科は文部科学省だけでなく、国土交通省の管轄でもある。教員も教員免許のない者が多数派だが、その代わり、大学のように博士が揃う。

全国の高専の中でも、富山高専はひととき異彩を放つ。旧富山工業高専（現在の本郷キャンパス）と旧富山商船高専（現在の射水キャンパス）が高度化再編し成立した高専だからである。統合高専はスーパー高専と呼ばれ、規模が大きい。富山高専の他、仙台高専、香川高専、熊本高専がスーパー高専だが、富山高専がユニークなのは、そのダイバーシティにある。高専といえは、工業高専で男子が多いというのが定説で一般的なイメージだろう。

ところが、富山高専の場合、機械システム工学科、電気制御工学科、物質化学工学科、電子情報工学科という工学系はもちろん、国際ビジネス学科、商船学科という学

科も擁し、バラエティに富む。日本一、女子学生が多く、規模、多様性の点では他校のステレオタイプに当てはまらない、異色な高専なのである。

就職・進学率がほぼ一〇〇%の学生はもちろん、教員の能力も総じて高く、研究者の実力を測る指標である科研究費の取得状況を見ても、全国で一、二位を争う。しかも、富山県は高等教育機関が極端に少ない県である。富山高専が地域で果たす役割は大きい。国語科の教員として例外ではなく、地域の要請と無縁ではない。

富山高専の国語科には、教授二名、准教授二名、非常勤講師若干名がいる。近代文学専攻の教員は、高熊哲也、近藤周吾、黒崎真美の三名。そしてこの三名が偶然とはいえ、そのまま富山文学の会の代表・副代表・事務局長であることを考え合わせると——半ば偶然の産物に過ぎず、一部で不満があるかもしれないが——高専が富山文学の会の屋台骨を支えてきた事実が明るみになる。いや、もちろん、富山大学の金子幸代先生を筆頭に、西田谷洋先生、水野真理子先生、小谷瑛輔先生(現在は明治大学)、金沢大学の丸山珪一先生、聖徳大学の八木光昭先生(現在は定年)ら、錚々たる大学の名誉教授、教授、准教授

の足下には遠く及ばないことは自明である。この会が会場も含め、富山大学を中心に回ってきたという事実をねじ曲げる意図はなく、謝意を表したい。しかし、それはそれとして、高専がまがいなりにも一貫してこの会の設立・運営・研究を縁の下の力持ちとして努め、果たしてきたという事実は、ことが文学だけに、全国的にも稀有な例と言える。少しだけ強調しておく次第である。

旧富山商船高専に私が赴任すると、富山文学の会が設立された。だから、富山文学の会の十周年は、私の富山・高専・結婚の十周年とも軌を一にする。一般に「創業守成」は「創業」より「守成」が難しい。結婚と同じと考えれば、合点もいく。よって「成人式」や「銀婚式」などは夢のまた夢だが、健康に気をつけ、また一歩ずつ、皆様と協力しながら歩んでいけたらと希う。私は富山の前は北海道、その前は熊本にいた。北海道や熊本には『位置』『方位』という批評誌があり、かつて私はこの両誌に心から焦がれ、羨望したものだ。今はまだ小ぶり、朴訥で、ぶつきらばう、愛想はなく、目立とうともしない、いかにも富山らしい『群峰』だが、いずれはその名にし負う連峰に育ち、新しい世代に届くまで成長してほしいと庶幾してやまない。

尾島菊子『教育勅語御伽噺 少女の一念』のこと

西田谷 洋

富山文学の会には短い間参加していたものの、金沢から通勤することを選ぶと平日夕方という例会の開催時間帯は体が持たないので出席できず、出欠を問われるのがとても心苦しく退会させてもらった。しかし、この十年は愛知教育大学では愛知や石川の文学について多少まとめ、富山大学では富山ゆかりの文学に触れることで地域に何らかの還元をしたいという思いはずっと持っている。金子幸代さんが編まれた三巻本『小寺菊子作品集』を通して小寺菊子の作品を読み解き、徳田秋聲とつなげていこうという私の心秘かな目論見もそうした中から生まれたものである。その点で富山文学の会にはとても感謝している。

今回、本稿で触れたいのは八木光昭さんが集められたのであろう富山県立図書館洗足文庫所蔵の一冊、尾島菊子『教育勅語お伽噺 少女の一念』（金港堂書籍一九〇八・一二）である。『少女の一念』は、男児を求める父親が長

期に家を空けるなか、気に病んだ病身の母がますます体調を崩したため、「村で評判の孝行娘」玉子が母親の体を丈夫にして赤ん坊を埋めるように村の天満宮に願掛けをした結果、母の体調が回復すると共に男児を出産し、父も帰宅しどこにも行かないと告げる物語である。

玉子の家は「代々の富豪家」であり、「お金で自由になるものなら、何一つ思ふやうにならぬことはなからうと云ふ程、結構な身分」であり、語り手も「実に羨ましいくらいであります」と語るが、「何うしてもお金では得られないと云ふ、悲しい事」があつたとして男児のいないことによる父母の不和をあげる。

玉子の願掛けはその解消を目的としているが、願掛けの途中での母の回復や願掛けが終わったの後の母の出産を考えると、母の体調不良はどうやら妊娠していたためであり、「お父様は嫌がつて始終東京へばかり出てゐて、一向お家にお帰りにならぬ」いことも母や玉子が不安に思っていただけで出産日には帰宅しているところを見ると実際にはそうではなかったのだろう。語り手がうらやましがる玉子の主観に引きずられた表現が示されている。とすると、玉子の親孝行の「一念」を語る物語は、親を

心配する気持ちを強調する一方で、出産・和解には全く関与しない玉子の空回り・妄想を語る物語である。もちろん、空回りであっても母が「涙を零してお悦びにな」ったのは玉子が自分を心配しているからだろう。

こうした展開の『少女の一念』は、角書が示すように「教育ニ關スル勅語」の「爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ」という一節をお伽噺としたものである。しかし、母が病氣ないし虚弱であるならば母を丈夫にするのは医者の治療や母本人の運動であろう。しかし、葉は「中々急に癒りさうにない」ということで玉子は、願掛けへと至る。天満宮を参拝することは、「何百という高い石段は、見上げると唯幅がだん／＼狭くなつて見えるばかり、逆も可弱い女などの登られさうな所ではありません」とされ、「何しろ危険いところ」であり、「平常は滅多と参詣するものは」なく玉子の決意は「大した覚悟」とされる。仙人に課題を与えられること、狛犬や大牛など神威と結びついた存在を飛び越えていくこと、大臣といった権威と結びついた存在の障壁を突破すること、一日一段ずつ前日よりも高く登れるようになること、といった実効性を持たない努力の積み重ね、試練の突破だけが目指される。

玉子が仙人に「私は如何困難でも忍びます。親の為めならどんな辛い事でも嫌と思ひません」という決意を語ることもその精神主義を示していよう。

玉子は毎夜、祈禱がすむと安心して眠ってしまい、目覚めると家のお座敷で寝ていた。これは夢の中での参拝とも、実際に参拝しつつ神の加護により帰宅していたとも考えられるが、少女の一念による加護の獲得と空回りという物語の二面性はどちらの読解も可能にしよう。「毎晩上まで登りもしないで、例も途中で帰つて了ふんだもの、真実にずるいよ、だから私達は神様に告げて願の叶はぬやうにしてやるのだ」、「玉子さんの親孝行も偽なんだ」という狛犬たちの発言は、物語の試練と共に空回りをも示唆しているとも読み取りうるからである。

このように、『少女の一念』で描かれるのは実効性のある合理的な孝行ではなく、非合理的な妄想であるが、やがてその後の「念仏の家」の結核の妄想にも受け継がれていく。

さて、この十年の私は、こうした浅い作品解釈を主軸としていたが、そろそろもう少し丁寧に取り組む必要があるだろうと思うようになった。少しずつ努力したい。

さまざまな〈富山〉

金山 克哉

富山で生まれた人。人生の過程で富山に来た人。富山を離れて、再び富山に戻ってきた人。富山にいたことはいくらでも、なぜか富山に縁があつて富山につながり続けている人。好きで富山を選んだ人。何らかの理由でしかたなく富山にいる人。

富山と関わる人はさまざまだ。

「文学」あるいは「文学研究」は、いかなる立場の人を排除することもなく、かといって優遇するわけでもなく、あたたかく、かつ冷ややかに取り込んでいく。

〈富山〉もまた、分け隔てなく人を受け入れ、そして送り出していく。

この土地は動かない。ここに関わる人たちの視点が新たに変わっていくのだ。

「富山文学の会」は10周年を迎えた。

「富山の文学」「富山で文学を」「富山に文学を」「富山から文学を」「富山を文学で」。

表現を微妙に変えるだけで、この会には多くの表情があることが自然と分かるというもの。その人が、〈富山〉に対してどのような接近、あるいは離反を試みるか、ということとを統一することは誰にもできない。そんな土壤からさまざまな〈富山〉が生み出されていく。

だから、〈富山〉について語ることは、ほとんど無限の多様性を含んでいる。

特殊な地貌を持ったこの土地の風景は、今も昔も変わることなく存在している。

しかし、その風景の中に何を、何を託すかはやはりおのおのの主体の在り方に関わっている。日常性の中に落とし込まれた心の在処は、普段、目には見えない。でも、自分という存在の基盤を何らかのかたちで支えているもののひとつに〈富山〉というものがあるとすれば、言葉をもってしてその内実をとらえたくなくなるのもまた真実。

「群峰」という言葉の意味。

むらがりそびえたつ山々。

それぞれに形や高さ、地質や植生の異なった山々が、

「富山文学」というキーワードのもとに思想や詩想をと
もにする時間がある。そんな祝祭にも似た瞬間を積み上
げていけば、たしかに10年という長さに至り着くことも
理解できる。

それぞれの山々が、これからも充実した静けさとともに
にそのたたずまいを確かなものにしていきますように、
心ひそかに願うわたしがいる。

地域コンテンツ研究会「編」

大石 玄・近藤周吾・杉本圭吾・谷口重徳・

西田隆政・西田谷洋・風呂本武典・横濱雄二

地域 × アニメ

——コンテンツリズムからの展開

(成山堂書店 二〇一九年四月八日初版)

A5判・並製・272頁

定価 本体2600円(税別)

小寺菊子の死生観

—「逝く者」より

水野 真理子

一、はじめに

大正の三閨秀の一人とも称された、富山出身の女流作家小寺（尾島）菊子（一八七九—一九五七）は、これまでに少女小説の作家として評価されてきた¹。実際に、一九〇三（明治三六）年、二十四歳で、秋香女子のペンネームで小説を書き始めた彼女が、作家として名を成していく過程においては、当時少女らに人気の高かった少女雑誌に、数多くの少女小説を発表し、少女時代の家庭での経験、父との関係、また嫁姑問題に翻弄された母の姿、それらを描きながら、その家庭環境の中で少女が煩悶し、成長していくという物語に秀作が見られた。

しかし、彼女には、少女小説作家の枠には収まりきらない文筆力があり、少女小説作家以上の評価を与えるこ

とができるかと筆者は考えている。近年、最も網羅的に小寺について調査し、多数の研究論文を発表してきた金子幸代も、同様の評価をしている。金子は、小寺の執筆活動をおおよそ三期に分けて、その中期については、作品発表の場が少女雑誌のみならず、一般の文芸雑誌にも広がり、「少女小説作家を超える本格的な作家」として、飛躍した時期だと捉えている²。金子は、明確な年代分けをしていないが、作品や発表媒体、活動状況に基づいて、初期はおおよそ一九〇三年から一九〇八年まで、中期は一九〇九年から一九二六年頃まで、そして後期は一九二七年、徳田秋声の妻はまの一周忌を節目として知人の作家や門下生などが会する二日会に参加し、雑誌『あらくれ』の同人として活躍していく頃から晩年までとしている³。

少女小説家を越えて本格的作家を目指した小寺が、テーマの一つとして選んだのは、「死」の問題であった。というの、この中期において、「死」を題材とした作品がかなり見受けられるからである。作家デビューから約一〇年が経過した一九一六年には、「死」について真正面から捉えた短編小説「逝く者」〔『文章世界』一九一六年十

一月)を執筆している。他には、子犬の死を扱った随筆「小さき生涯」(『太陽』一九二〇年二月)また、東京に住む従姉の家に寄寓していた際の精神的葛藤を扱った随筆「死の幻影」(『婦人画報』一九二〇年九月)、関東大震災の惨事を受けて人間の生死について思いをきたし、生き抜いていくことへの決意を述べた「新東京を前にして」(『週刊朝日』一九二三年十一月)、暗闇に覆われていた自身の少女時代を振り返る「死の魅惑に」(『婦人画報』一九二六年四月)を発表している。本小論では、これまですべてほとんど扱われることのなかった作品「逝く者」を中心的に取り上げ、その作品の特徴と、彼女が「死」の問題をどのように描いたかについて考察する。その際、同時代の文学的思潮を視野に入れながら、また「死」を扱った随筆から彼女の死生観と境遇を辿りながら、探ってみてみたい。

二、「逝く者」―弟の死を見つめて

「逝く者」は、一九一六(大正五)年一月の『文章世界』に掲載された^三。これを発表した頃、彼女は三十七

歳、画家の小寺健吉と結婚して二年後のことであった。彼女はこの作品を「私の好きな私の作」(『中央文学』一九二一年二月)において、「頬紅」「愛の影」「朱ローソクの灯影」とともに挙げている^四。したがって、彼女自身にとつても、思い入れのある特別な作品だったと考えられよう。

「死は今彼の眼前に迫っていた。」との直裁的な一文で始まるこの物語のあらすじはこうである。結核を患い、病院で看護婦に手を取られ、最後の時を迎えようとしている弟を、姉である「私」が母とともに、いたたまれない思いで見守っている。「私」の夫も、職場から病院に急いで駆けつけた。しかし、彼女らの願いも空しく弟は息絶える。その後、彼の亡骸は看護婦たちの手によって清められ、霊安室に安置されたのち、医師たちによって尸体解剖される。その後、ようやく火葬されることとなった、その一部始終を、私は悲しみに暮れながらも、時折、弟の死に対して、冷静な客観的な印象を与える眼差しで、追っていく。実生活において小寺は、弟を彼が二六歳の時に、結核で亡くしている。その経験を色濃く反映した作品と考えられよう。

この小説における特徴として、まず目を惹くのは、描写における写真性である。自然主義作家としてその地位を確立した徳田秋声に小寺は師事していたことから、文體上の影響を彼から、当然受けていると思われる。秋声から受けた影響について、ここで深入りすることはできないが、それを反映しているかのように、臨終間際の弟の様子は、まるですぐその場にいるかのような筆致で丁寧に描かれている。はじまりの緊迫した状況は次のように説明される。

一人の看護婦は彼の左の手を取つて、一心に時計を覗めてゐる。一人の看護婦は彼の右手に蹲踞しゃがんで彼の額あぶらからと鼻の下からとヂリ／＼滲み出す脂肪あぶら——人間の生命が今終わらうとするときに、異常な抵抗力で絞り出すその汗と脂肪あぶらを、ガーゼを持つて絶えず拭き取つてゐる。(六二頁)

二人の看護婦たちの息を呑むような臨終間際の看護が描写された後、さらに弟の苦しむ様子は次のように描かれる。

額に氷嚢をむすびつけて、右の胸にカラシを貼りつけて、氷の枕の上へのせた頭を、悩ましげに、

右に向け、左に向け、転々として喘ぎ悶えてゐる彼の顔色が、蒼白といふよりも、全く泥色ど——死灰——のやうであつた。荒い呼吸が彼の咽喉のどから激しく押し出されてゐる。さうして、彼はただ異常に苦しんでゐる。(六三頁)

死に際の弟の姿に、美化するような表現はなく、苦しみながら左右にのたうち悶える姿、「蒼白」というよりはむしろ「泥色」のような肌、「死灰」のようだというように、病に蝕まれる現実の苦渋と凄惨さが、強調されている。

こうした臨場感溢れる場面描写の合間に、彼女の死に対する認識が挟み込まれ、読者の内面に訴えかける。彼女はまず死を「不可思議な一大事件」(六三頁)ではあるが、しかし「人生の最も自然であるべき事件」(六三頁)と述べて、不思議でもありませんながら、それでもすべての人々が必ず迎えなければいけない結末として、自然の摂理であると冷静に受け止める。その上で、死に対して抑えがたい恐怖心、畏怖心を告白する。彼女のその心情は、次のような率直な心の叫びによく描写されている。

『死とは何であらうか、あゝ不思議な死！。不思議な生！。生まれるといふことの既に不思議でなければならぬえに、死といふものゝ、またなんといふ不可思議な事実なのであらう！』(六三頁)

臨終の弟を前にして、さらに彼女の自問は続く。

『あゝ、いやゝ、人間に死といふ悲しみがあるならば、もうゝ決して初めから生まれて来ない方が好い。人間が一度産声をあげたら、その瞬間、既に「死」の運命を担つてゐるのではないか。死はいやである。死はいやである。』(六四頁)

このように写実的な描写を積み上げながら、そこに「死」に対する率直な思いも重ねる。

描写に写実性が見られる一方、彼女は「死」を美しいものとして浪漫的に捉えてもいる。弟が息絶えた後、「私」は彼が情愛を持つて看護婦たちに看病された様子などを振り返る。「私」は、「再び蘇生する希望を持たない、血気の青年患者」(七五頁)であつた弟にとつて、看護婦たちは、まるで「天使のような感銘を持つて迎へられたであらう！」(七五頁)と思いを馳せ、それは、「両性の間に触れ合ふ、あたゝかい情合の親しみから、自然に離れが

たい懐かしみが、お互の胸に融け合つてゐるからに違ひない」(七五頁)と考へる。弟が結核と闘つてきたその月日は、患者と看護婦たちにしか築くことができない美しい関係性として、懐かしみをもつて想起されている。

さらに小寺は、「死」に対する直接的な美意識を「私」に語らせる。「私」は、毎日労り慰められながら亡くなつた弟は、「自分たちが今彼の若い死を悼み悲しむほどに、彼は決して、彼自身の死を、死の瞬間に於いても感じてはゐない」(七三頁)と思う。なぜならば、「死は生を意識してゐる間に於いてのみ恐怖を感じさせる」(七四頁)のであり、「死そのものは、死の瞬間は極めて安樂なものに違ひない」(七四頁)からである。だからこそ、死は美しいと思うと述べる。

弟の死に対して、浪漫的な感情も抱く一方、再び、「私」の視点は、その死の現実と悲哀から距離を取り、次には医学に対する疑念、批判へと発展する。例えば、弟の遺体の解剖を待つ「私」は、冷たい扉の奥で行われるその解剖という処置について、『死』といふものを飽くまでも学術的に研究する医員たちの残酷な手」(八四頁)によつて行われると表現している。先述の看護師と患者との

関係性とは対照的に、医者たちへの感謝の念もないわけではないが、その一方怒りや疑念を次のように吐露している。

彼女は又更に他の一方では三年間一時一刻も怠ら
ずに、医師の命を背かないで守つたあらゆる彼の
養生が、何の役に立つたらうかと怪しまれた。三
年間の苦い服薬、注射、日光浴、空気療法、營養、
精神の安静、そんなものゝ凡てを、彼女は今悉く
疑はねばならない。さうして、呼吸器病に対する
世界の医術の甚だしく遅鈍であることを嘆かねば
ならない。然かも彼女の苦しい精力から辛ふじて
産み出されたその間の多額の経費が、残らずそれ
等の無駄な一時的の気安め——医員たちの単なる
試み——のために消耗されたことを思ふと、彼女
は寧ろ腹立たしかつた。(八五—八六頁)

ここからは、結核に対して、庶民の間で行われる治療法
というものに、取り立てて特効薬もなく、さらに世界の
医療における結核の治療が、随分と遅れていたという当
時の状況、またそれに対して歯がゆい思いでいる庶民の
姿が明確にわかり、この時代においての死の病としての

結核の位置づけが確認されよう。

以上のような、写真と美化の描写、また近代的な医療
に対しても抱く批判意識などの描写によつて物語が進め
られる。「死」への畏怖と弟の「死」に対する悲しみや悔
しさを描いてはいるが、しかし最後には、意外にも「死」
に覆われた暗さで物語が終わるのではなく、死にゆく者
と比較して、今を生きる人間の「生」を肯定し、それに
讃歌を送つて物語を締めくくっている。

火葬場へ送られた弟を見送り、彼の肢体を熱い炎が覆
つていく様を「私」は想い浮かべながら、母と夫とも
に雨の降る暗い道を街に向かつて歩いていく。そして電
車に乗ったときに、「初めて人間の生きた世界に戻つて来
た——といふ安心と、淡いよこびとを感じた」(一〇〇
頁)という彼女は、「活々とした人だち」(一〇〇頁)が
大勢電車に乗っている姿を眺める。電車の終点には、若
者たちの心を誘う場末の遊廓があつた。そこへ集まる
人々の群れに思いを馳せ、彼女は次のように述べる。

彼等の誰も「人間の死」の街路が、すぐ眼の下に
細く長く永久に横はつてゐることに気附かない
であらう！否、或はそれに気附かうとして、強ひ

て、生の歎びに酔ふやうに、或は笑ひ、或は語り、或は楽しげに、或は無心に、或は又侘しげに、打興じ、打戯れ、打鬱ぎなどして動きつゝあるのである。彼女は淋しい心でそれ等の人々を眺めながら、一人々々の仕合はせな生を祝福してやりたいと思つた。(二〇〇頁)

暗い結末が多いと評された彼女の少女小説であつたが、この作品に関しては、「死」を迎えなければいけない人間の宿命を描きつつも、「生」に対する希望を描き、光を感じさせる印象を残している。

三、「逝く者」の評価―結核を描く文学として

小寺が結核によって亡くなった弟の姿を描いたが、結核による「死」というテーマは、明治から大正にかけての文学作品の中で、多く扱われたものだった。実際に江戸末期から明治維新を経て、日本が近代化、産業化、都市化の道を進んでいくにつれて、結核患者は増大し続け、昭和三〇年代に至るまで、一千万人以上の人々が結核で命を落とした^五。日本だけでなく西洋諸国においても、工

業化を成し遂げていく十八世紀後半から、結核が猛威を振るい、例えばロンドンにおいては、人口十万人に対して一千人という高い死亡率であつたという^六。また、結核の持つイメージとして、十分な病院施設、治療法などが確立されず、死を免れないという恐ろしい伝染病としての認識があつた。さらに、患者たちは世間から同情と差別の眼差しを向けられることも必至であつた。

しかし、このような苛酷な病氣であつたにも関わらず、他方では、ヨーロッパ、日本ともに、結核には独特な甘美なイメージが与えられたともいう。それは美しく若い女性が結核にかかつて早逝するという佳人薄命のイメージ、または才能のある前途有望な男性が結核を患つたことで、その天才ぶりを開花させ、命を落とすという、天才神話なるものが広まっていた。またロマンティックな情熱が結核を引き起こすという説まで、公に語られたという^七。

このような甘美なイメージを、結核に対して人々が抱くことに大きな役割を果たしたのが、文学作品であつた。福田眞人『結核の文化史』(一九九五)によれば、近代文学の中で結核(肺病)を扱った初期の作品には、古川魁

蓄『浅尾よし江の履歴』（一八八二〇明治十五年）、成島柳北『熱海文藪』（一八八三〇明治十六年）、末廣鐵腸『雪中梅』（一八八六〇明治十九年）があり、さらに物語の重要な背景要素として結核（肺病）を取り上げたものには、廣津柳浪『残菊』（一八八九〇明治二二〇年）があるという。その後、結核（肺病）のロマン化を決定的にしたものは、人気小説であった徳富蘆花の『不如帰』（一九〇〇明治三三〇年）であった^八。

明治三六年から執筆を始め、蘆花とも同時代に生きていた小寺は、当然、この結核のイメージを彼女の読書体験の中で得ていたと考えられる。彼女は東京の従姉の家^九に寄寓していた頃、朝から晩まで貸本屋から借りてきた諸作家たちの小説、尾崎紅葉、幸田露伴、樋口一葉、廣津柳浪、黒岩涙香、川上眉山、高山樗牛らの作品を耽読していた。『逝く者』は『不如帰』から十七年程経った後、大正五年に発表されたため、その間の医療の発達や社会状況の変化もあると思われるが、日本近代文学の枠組みの中から、小説家を目指した小寺の作品も、この結核の文学作品の流れを汲んでいると言えよう。

それでは、小寺の作品における結核の描かれ方、ロマ

ン化についてはどうであろうか。先に述べた作品の特徴にあるように、この作品においては、淡々と写実的に事態を捉えようとする態度が主であるが、その中に、甘美な「死」のイメージが垣間見えていると言えよう。しかし、弟という人物の人となりや家庭環境について推測させる描写は非常に少なく、裕福でもないが、その一方、治療費の工面に苦勞はしたものの、貧困の極みにあるという状態でもなかった。したがって、結核の定型イメージであった天才的、将来性がある青年の夭折という若者としては描かれておらず、むしろ市井の一人として描かれている。また彼の臨終の姿に至っても、「泥色―死灰―」の肌の色にも表れているように、美しい描写で描いてはいない。そして、最も重要なことは、結核によって引き起こされる「死」が、愛の成就となったり、才能の開花に結び付けられ、一つのクライマックスを提示するというのではなく、「死」はあくまでも恐るべきもの、人々が避けては通れない運命だとした上で、今を生きている人々のかけがえのない時間と「生」の輝かしさに眼差しを向けている。こうした点から、彼女の作品は、結核のロマン化の傾向があつた文学作品の流れを汲みつつも、

彼女の特徴の一つでもある写真性を生かしながら、「生」と「死」を見つめるといふ作品だったと評価できよう。

四、死への関心―「死の幻影」「死の魅惑に」

以上述べたような「逝く者」における作風については、彼女の目指した文体や秋声をはじめ彼女が好んだという永井荷風、有島武郎など様々な作家の影響があるだろう。それらの影響関係については稿を改めることとし、ここでは、「逝く者」にみられる作品の特徴を導いたと思われる要因を、彼女の死生観や作品を描くに至った状況に求めてみたい。

冒頭でも触れたが、小寺には自らの「死」に対する強い思いを描く随筆がいくつもあり、彼女が自殺を考えたことも幾度となく告白している。「死の幻影」においては、従姉の家に寄寓していた頃の彼女の境遇が詳細に述べられている¹⁰。小寺は富山市八人町尋常小学校高等科を卒業後、父の事業が失敗したことで、数え年十七歳の時（一八九五〇明治二八〇年か）、東京に住む従姉の樽井ふさの家に下宿するという道を選んだ。ふさの夫樽井藤吉は、

ふさより一八歳年長、東洋社会党に属する活動家であった。ふさは小寺よりも一〇歳前後年上であったと推測される。そこで、従姉の世話になり感謝の気持ちを抱きながらも、その生活は、小寺の学資を使い込んでしまうほどの貧窮であった。さらに、家を留守にすることが多かつた夫に対して、極度の寂しさを抱き、満たされない結婚生活に、後悔の思いにもかられ、精神不安に陥りがちなふさから、結婚適齢期の娘であった小寺は、嫉妬の対象ともなり、さらに彼女のヒステリーのはけ口ともされていた。文筆で身を立てることを望みながらも、女の幸せは結婚にあると迫る従姉の顔色を窺いながら、小寺は暮らした。その状況下において小寺の精神状態も悪化していき、自身の将来への希望を見出すことができないと痛感した彼女は、自殺を考える。

音無川に沿った「御院殿下」は「昔から世の落伍者や、厭世詩人が轍死を企てる所」（二二七頁）だと聞き、死ぬならこの場所と小寺は決めていたという。肌寒い冷気を感ずる初秋の頃、小寺は「御院殿下」へと向かっていった。そこは崖になっていて、崖下には四本の線路があった。その場を恐怖心とともに眺めながらも、彼女は死に

対して、酔いしれるような感覚を抱いていたようだ。

自分は今可なり『死』を美化してそれに酔ひすぎ
てゐるやうにも思はれた。けれど、死なう、とい
ふ心持はやつぱり美しい好い心持に違ひなかつた。
もう雫が垂れるほどに露のおりた冷たい草叢の上
に長々と足を伸ばしながら、私は長い間憧れてゐ
た夢の世界にやつと辿り着いたやうな、丸でお伽
噺にでも出て来る少女のやうな心持ちになつて、
今は怖いといふ觀念もなく、激しい蚊の群れを袂
で拂ひながら、そこではばらく冥想に耽つてゐた。

(一一二八頁)

こうした描写からは、彼女が死を幻想的に美化して捉え
ていただろうという様子がわかる。また、写実的な描写
を小説に取り入れてきた彼女であつただけに、彼女自身
が、その時代を振り返つて、「死」を美化していたことを
再認識して、当時の心境をこのように書き綴つたとも考
えられる。

もう少し、彼女の「死」に対してのイメージを見てみ
よう。

「死は此世の一切の苦しみ悩みを超越する。無明

の束縛から放たれる。そして、私の魂は初めて自
由に絶対無限の永遠に生きるであらう。あゝやつ
ぱり私は死ななければならぬのだ。」(一一二八—
一一二九頁)

ここには、「逝く者」にも描かれていた「死」の認識が
表れている。弟を病の苦しみから解放したのと同様に、
「死」は彼女の精神を蝕む悩みから彼女を解き放つ超越
的な力を持つものとして描かれている。

列車が通り身を投げるまさにそのタイミングを、彼女
はやはり「死」を目前にして足がひるんで、見送つてし
まった。しかし、自分自身はやはり死ぬためにここに来
たと、ひたすら盲目的に「死」を希求する彼女は、ふと
自分がどのように「死」を意識するようになったかを考
えようと、「又その冷たい草の上に蹲踞んで、うつとり
と眼を閉ぢながら夢現となく冥想」(一一二九頁)した。想
い起こせば彼女は自分が十二、三歳の頃から死を意識し
始め、その理由は、陰鬱な家庭環境にもあつたが、生来
の自分の悩みがちな暗い性格が原因であつたと述べる。
そして、彼女はいつしか『死』の幻影に憧憬してゐた」

(一一二九頁)という。

これらに描かれるような彼女の「死」に対するイメージは、ともすれば青少年期に浮かびがちな危うい感情であって、誰にでも起こりうる可能性のある「死」のように思える。どちらかというところ、この頃の「死」はまさにロマン化され、美化されていた「死」だったと言えよう。こうした「死」への幻想的なイメージを打ち破り、「死」から「生」の方へ、気持ちを向かわせたものは何だったのか。「死の魅惑に」では次のように記述している。

なんと考へても此世に生きるに望みなく『死』は自分を一切の苦しみから救つてくれるものだと思つて、毎日／＼あの御院殿下へ飛び込んで死ぬことばかり空想してゐるのでした。死んだあとで国にゐる母や弟妹がさぞ悲しむだらうと思つたり、やつぱり死んだ方が一番いゝと考へたり、淋しい歌を作つて見たり、哀れ深い日記をやたらにつけたり、そして毎夜／＼蒲団に顔を埋めて泣いてばかりゐたものでした。(後略)

あのくらゐに死にたかつた娘が、突如、『生きよう』と勇ましく決心したのは、その後間もなくのこと、たしかに文学に救はれたのでした。それ

と一つは、田舎にゐた次の弟が病死したので、私が母や幼い弟妹を背負つて立たなければならぬ、といふ大きな実際問題の暗礁に打突かつたためでした。(一九九頁)

彼女を死の道から救つたのは、文学とそして、まさに「逝く者」で再現されたと思われる弟の「死」とその後、自分が母や弟妹を養つていかなければいけないという實際的な生活上の責任であつた。ここから判断すると、彼女は、おぼろげに、美しいものとして描いていた「死」の幻影を、現実の弟の凄惨な「死」によつて打ち破られ、そこから、否が応でも、「生」へと向かわねばならず、生きる渴望を見出さなければならなかつた。「逝く者」の最後に送つた生きる者たちへの讃歌は、弟を失つた、自分への強い激励でもあつただろう。

五、おわりに

以上述べてきたように、本稿では少女小説家としての評価されてきた傾向のある小寺の作品の中で、本格的な小説家を目指して執筆した、「死」を主題に据えた「逝

く者」に焦点を当て、まずはその作品の特徴、「死」の描き方、また結核文学の流れにおいての作品の評価をまとめた。そして、結核による「死」を常套手段としてroman化することなく、写実的な描写に基づき、「生」の儚さと歎びを強調するという作品の特徴が、小寺自身が抱いていた死生観と関連づけられることを指摘した。

これまでの小寺の評価は、同時代の作家による評価としては女らしい素直さや甘さ、善良さなど性格論にすり替えられていたり、また決して多くはない先行研究においても、生活苦や少女時代の苦難ゆえの暗さばかりが強調されてきたようだ。そこに金子幸代は切り込んで、女性職業作家の先駆者の一人であるという評価をした^{二〇}。本小論で扱った「逝く者」を例に取っても、彼女の作品を再評価していく論点は、例えば小寺の文体に与えた作家の影響、「逝く者」で見られた「死」と「生」への眼差し、それが小寺の初期作品から晩年の作品においてどう表れているのか、また同時代の作家と比較してどのような類似点や相違点があるかなど、幾つも見出される。五百点も優に超える彼女の執筆記事や作品と、本格的な小説家を目指した彼女の再評価を、今後も続けていきたい^{二一}。

注

- 一 小寺菊子に関する先行研究としては、塩田良平「小寺菊子」『明日香路』一九五七年、一―三、塩田良平「小寺菊子」『明治女流作家論』(寧楽書房、一九六五年)、田中清一「小寺菊子」『郷土と文学』(伴印刷所、一九六三年)、島尻悦子「評伝小寺(尾島)菊子」『学苑』(309)、『一九六五年九月、渡辺陽「小寺菊子執筆目録」静岡国文学』一九七八年二月、八尾正治「大正の闊秀 小寺菊子(1)」(13)、『経済月報』二二〇―二三三号、一九七九―一九八〇年、杉本邦子「尾島(小寺)菊子解説」『日本児童文学大系6』(ほるぷ出版、一九七八年)、佐藤通雅「尾島菊子(1)」(3)、『日本児童文学の成立・序説』(大和書房、一九八五年)、小松聡子「尾島菊子の少女小説の文体」『国際児童文学館紀要(1)』一九九七年三月、小林裕子「『職業作家』という選択―尾島菊子論」『明治期女性文学論』(翰林書房、二〇〇七年)、山根春菜「尾島菊子の(少女小説)『綾子』にみる少女の『家出』」『安田女子大学大学院文学研究科紀要・合冊19』二〇一三年、下岡友加「尾島菊子「蚊ばしら」翻刻・紹介」『台湾愛国婦人』掲載小説』『広島大学大学院文学研究科論集』(77)、『二〇一七年一月、拙論「小寺菊子の作品に垣間見る宗教観―『他力信心の女』『念仏の家』より」』『群峰4』二〇一八年三月など近年その論稿も増えてきた。例外もあるものの、全体的に、少女小説家としての小寺菊子という前提が見られる。金子幸代による論

文は、「富山の女性文学の先駆者・小寺（尾島） 菊子研究（1）」作品執筆年譜を中心に『富山大学人文学部紀要51』二〇〇九年をはじめとして、本稿で後に触れるものその他、「富山の女性文学の先駆者・小寺（尾島） 菊子研究（3）」メディアとの攻防・『ふるさと』観の変遷『富山大学人文学部紀要（53）』二〇一〇年、「富山の女性文学の先駆者・小寺（尾島） 菊子研究（4）」徳田秋声・三島霜川・近松秋江と『あらくれ』のこと『富山大学人文学部紀要（55）』二〇一一年、「小寺（尾島） 菊子の少女雑誌戦略：家出少女小説『綾子』の『冒険』』『富山文学の会ふるさと文学』を語るシンポジウム2』二〇一一年三月がある。

二 金子幸代「富山の女性文学の先駆者・小寺（尾島） 菊子研究―作品執筆年譜を中心に」金子幸代編『小寺菊子作品集2』（桂書房、二〇一四）、五〇八頁。

三 小寺菊子「逝く者」金子、『小寺菊子作品集2』、六二―一〇〇頁。
以下引用箇所は本文中に頁数のみ記す。

四 「私の好きな私の作」ここでは金子、『小寺菊子作品集2』、一一四頁の再録を使用した。

五 福田真人『結核の文化史』（名古屋大学出版会、一九九五）、二八頁。

六 同上、二頁。

七 同上、二二三頁。

八 同上、一〇〇―一〇二頁。

九 小寺菊子「死の幻影」金子幸代編『小寺菊子作品集3』（桂書房、二〇一四）、一二二頁。以下引用箇所は本文中に頁数のみ記す。

一〇 小寺、「死の幻影」、一一四―一二九頁。

一一 小寺菊子「死の魅惑に」金子、『小寺菊子作品集3』、一九八―一九九頁。以下引用箇所は本文中に頁数のみ記す。

一二 金子幸代「小寺（尾島） 菊子と『女子文壇』・『靑鞆』―埋もれた女性職業作家の復権に向けて」金子、『小寺菊子作品集2』、五三―四―五四〇頁。

一三 作品数は金子幸代のまとめによる。金子、「富山の女性文学の先駆者」、三四三頁。

高島高詩集『山脈地帯』における「戦争の詩」

金山 克哉

1 はじめに

北方を描いた詩人高島高には、「戦争の詩」がある。『山脈地帯』（旗社出版部 昭和十六年二月二十日）の「第一部」にそれらは多数収められている。「あとがき」には次のようにある。

この中には、随分古いものもある。七、八年前、もつものものもある。だから第二詩集だからといって、必ずしも新しいものばかりとはかぎらない。これを第一部と第二部に分けた。僕の詩の個性の陰陽ともとも思つて分けてみた。く 略 く 第一部は多く戦争の詩（傍線金山）を採った。又極くはじめの頃のものも入れておいた。第二部はずつと古いのや新しいのがまざつて入っている。（昭和十五年八月十日記）

高島自身は戦争に関する詩のことを「戦争詩」「戦場詩」「愛国詩」「国民詩」と呼ばずに「戦争の詩」と素朴に呼んでいる。坪井秀人が『声の祝祭 日本近代詩と戦争』（名古屋大学出版会 一九九七年八月三十一日）の中で指摘するように、大東亜戦争が激化するにしたがつて詩は国民に対する呼びかけの意味を帯び、詩人は愛国の精神を高揚するための役割を担うことになるが、昭和十六年（一九四一年）の段階で高島があくまでも「戦争の詩」という呼称を使用していることには注目してもよいだろう。「戦争の詩」の「の」を多義的に解釈することが許されるならば、この「の」には、例えば「戦争に関係した詩」「戦争を称揚する詩」「戦争を批判する詩」「戦争に対する割り切れない感情を描いた詩」などの、戦争に対する様々な関与、思索の幅を含んでよいことになるだろう。この「戦争の詩」という呼称は、ナシヨナリズムによってひとくくりにはできない、（どのような視点で戦争を視るか）ということのバリエーションを内包する。だから、高島高の「戦争の詩」は（文学に描かれた戦争表現の多様性）へとつながっていくだろう。したがって、高島高

がどのように戦争に対してアプローチしたか、あるいはしなかったかは、その詩作品を読むことでこそ理解される。昭和十七年（一九四二年）に日本放送協会編集『愛国詩集』が刊行されているが、「愛国詩」という呼称が世に広まりつつあった昭和十六年（一九四一年）の時点で、高島高が、おそらく、あえて「戦争の詩」という呼称を使用していることはこのような意味で興味深い。

2、『山脈地帯』巻頭詩「北方五光景」

詩集『山脈地帯』は「北方五光景」という詩から始まる。〈北方の詩人〉とも言うべき高島高の描く風土は、冴え冴えとした寒気の中に、その寒さそのものを生命の象徴として感受する眼を持つ。「北アルプス幻想」「北アルプス雪景」「雪の湖」「立山風」「北方」の五篇をひとつのまとまりとした「北方五光景」は北の風土の描写に加え、北方を後にして戦地へと赴く者たちの姿が織り込まれている。四つ目の詩「立山風」に付せられた「註」の中には立山の「厳然、颯爽たる姿体」のすばらしさに触れた後、立山を「北方魂の火のごとき烈々たるシンボルであ

る」とする記述がある。そして、その立山から「今まさに皇国のために満丈の気を吐いている幾多の北方勇士をわれらの第一線に送っている」とする。さらには、「これらあらゆる北方人は、必ず寒冷膚を破る立山風によって育まれ、又きたえられるのである」とある。つまり、寒冷の風土によって鍛え上げられた北方人は、戦場に赴いても勇壮に戦うことができることを、故郷立山の勇姿に重ね合わせながら述べているのだ。逆の見方をすれば、戦地に赴く者の姿を想像することを機に、改めて〈北方〉という風土の強靱さを見いだしている、とも言えるだろう。

この詩を読む限り、高島高は、理不尽に戦地に駆り出されていく者がいることに対して強い疑問を抱いているわけではない。徴兵システムに対する批判や風刺を試みるというよりも、戦争の理不尽さの中にいながら、戦地に赴く者ひとりひとりの無事を祈る立場で詩を書いていく。故郷の風土は、戦地という遠方から思い返されるものとして、変わることはない寒冷の相貌をより冴え渡らせていく。その不変の寒冷こそが、時局に翻弄される兵士たちにとってのよりどころである、と言うように。

3、支那を舞台とした戦争の詩

『山脈地帯』の前半には多く「戦争の詩」が採られているが、そのほとんどが「支那」(中国)を舞台にしたものである。この詩集が刊行された昭和十六年(一九四一年)は、日中戦争を経て太平洋戦争へと時局が軍国一色へと傾斜していくころだ。戦地である支那の詩については、行軍(「夜戦塵」)、兵士たちの日常(「麦——麦と兵隊に」)、戦死(「日本人に題す」、兵士らへの慈しみ(「征野」)、生還の安堵(「熱河」)などに触れたものが多い。ニュース映画館で観たイメージから戦地を思い起こし、そこに駐屯する兵士たちのことを慮り、日本の風土を懐かしんでいるだろうその心中を察するような内容のものもある。『山脈地帯』所収「征野」の中に、ニュース映画館において、祖国を離れ大陸に駐屯する部隊のことに触れた部分がある。)

それらの詩は、日本軍の力を信じる一方で、支那の広大な自然の中に投げ出された兵士たちの無事を祈る優しさに満ちている。支那を舞台にした詩には月光や果てしない空や荒野などが多く描かれ、植生豊かな日本とは全

く異なつた荒涼とした、広大な、そしての未知の風土に立つ日本兵の姿がまるで影絵のような手法(「青空について(シネ・ポエム)」)で描かれている。モダニズムの手法をまじえ、支那の茫漠たる景色を視覚化している。

しかし、高島高の支那の詩には、敵国を攻撃し殲滅することを称揚した表現はほとんど見受けられない。あくまでも異国の風土の中で受動的に現実を生きなくてはならない兵士たちへの、強いられた状況に対する心痛が詩の土台となっている。

4、仮構された〈戦地〉と〈北方〉の関係

実は、高島高自身の軍医としての従軍経験が昭和十八年(一九四三年)から帰還する昭和二十一年(一九四六年)までの約三年間であることから、『山脈地帯』にある戦争の詩は直接戦地を経験して書かれたものではないことがわかる。だから、詩の中に登場する戦地としての支那は、銃後の生活の中でニュース映画などを通じて得られたイメージを仮構、総合して創り出された〈戦地〉だということになる。かつ、『山脈地帯』に収められた詩篇

は、その「あとがき」によれば「昭和十五年八月十日」から「七、八年前、もつともある」とされていることから、昭和六、七年（一九三一年、一九三二年）あたりから昭和十五年（一九四〇年）までの期間に書かれたものと推測することができると推測することができる。

かつ、昭和三年（一九二八年）東京の日本大学予科に入学、昭和五年（一九三〇年）同大学文科に進み、昭和六年（一九三一年）昭和医学専門学校に入学し直し家業である医師を目指すために学業に励み、そして昭和十一年（一九三六年）同校卒業後には横浜市磯子区にあった市の電気局病院内科に勤務、昭和十六年（一九四一年）父の医院を継ぐために郷里富山県滑川に戻っていることを考慮に入れるならば、戦争の詩はもちろん、〈北方〉を描写した詩の多くも東京、横浜在住時に書かれたということが推し量られる。そのことについては拙稿（〈北方の冬 高島高論』『群峰』第三号所収 富山文学の会編集 二〇一七年三月四日）で少し触れているが、今大切なことは、〈支那（つまり戦地）〉〈北方〉の詩のいずれもが、その場所に実際にいながらにして書かれたものではなく、あくまでも異なった場所から思い起こされた仮構の産物だ

ということだ。つまり高島高は、〈仮構された北方〉を〈仮構された戦地〉から思いやる兵士たちの姿を二重、三重に想像して「戦争の詩」を作っていることになる。

想像された戦地から想像された北方を思いやる、という想像。

または、想像された北方が想像された戦地の兵士たちの後押しをする、という想像。

体験主義を超えて想像され、仮構された〈戦地〉と〈北方〉という二つの場所は、詩人の思考のなかでつながりあっているのだ。

5、日本の地名が入った詩

前章では、〈戦地（支那）〉と〈北方（故郷）〉が想像の産物としてありながら、それが互いに有機的なつながりを持つていることについて述べた。

『山脈地帯』の「第一部」にはもう一つ、詩の配列とという意味において大きな特徴がある。それは、〈戦地（支那）〉や〈北方（故郷）〉と並置するかたちで、日本国内の具体的な地名を前景化した詩が「戦争の詩」と隣接し

て配されていることだ。

白蛇伝説を呼び水として黒部峡谷の民俗世界を呼び出す「溪潭譜——黒部峡谷に寄す」、早春の田野風景の中に自然と文化が融合した生命力をたたえる「馬込風景——或は早春の田野」、萩原朔太郎にあやかりつつ大井町にまつわる恋愛の記憶と現在を交錯させた「大井町の記憶——ある友のうたえる」、親不知の海岸風景を医師独自の医学用語によって描いた「北の貌——親不知附近の未明」、晴れた横浜の青空を描く「横浜山上の詩——ある年の記念のために」、横浜の街なみに乙女の姿を重ね見る「横浜風景」。これらの詩群は、戦争そのものや支那での戦いをテーマにした「北方五光景」、「夜戦塵」、「麦——麦と兵隊に」、「征野」、「日本人に題す」、「熱河」、「戦い」、「北の銃後」、「野戦病院への手紙」と同じ「第一部」に収められている。

伊勢功治が『『北方の詩』刊行と「麵麴」』（『現代詩手帖』第六十一巻・第四号 二〇一八年四月一日）において、戦争の暗い影が作品世界の陰鬱さに影響を与えていると指摘する「北の貌」以外に、これらの中には戦争の荒涼とした雰囲気伝えるものはない。一体、なぜこれ

らの詩が「第一部」に「戦争の詩」とともにおさまられているのか。

これらの詩に登場する土地はすべて高島高ゆかりの場所だ。黒部と親不知は〈北方〉の名所である。馬込や大井町は東京在住時の生活圏であり、文人知人が住む場所でもあった。横浜は高島高が勤務していた病院があった街である。

はるか遠い支那。

それに対して自分を育んだ北の風土や青春時代を過ごした関東の晴れやかな風土。

戦地とは対照的なこれらの土地を支那の風景と並置する理由は何か。それは推し量るに、空間の同時性ではないだろうか。想像力によって視ることが可能になった〈戦地〉もまた詩の中では確かに存在する現実であり、かつ、生活の基盤となつている日常的な街の風景もまた確かな現実である。これらかけ離れた二つの現実が反発もせず、矛盾もせず、浸食もせず平然と同時に存在しているという当然。世界にはいくつもの〈場所〉が時を同じくして存在しており、どちらかの世界がもう一方の世界を所有することなどできないはずだ、とでも言うように。そし

て、おそらく戦地に献ずるといふ思いが込められたこの詩集は、日本国内の具体的な地名を配することによって、遠く戦地からも日本の日常を思い起こせるように作られているのではないか。また、二つの現実の差異性を際立たせるように詩を配置することで、戦地が人間にとつていかに特殊な場所かを暗に示し、支那という異土に投げ込まれた人々への思いが深まるように意図されているのではないか。

6、「北の銃後」における〈空白〉の詩学

いったい、私は、誰を待っているのだろう。はっきりとした形のものは何もない。ただ、もやもやしている。けれども、私は待っている。大戦争がはじまつてからは、毎日、毎日、お買い物物の帰りには駅に立ち寄り、この冷いベンチに腰をかけて、待っている。誰か、ひとり、笑って私に声を掛ける。おお、こわい。ああ、困る。私の待っているのは、あなたでない。それではいったい、私は誰を待っているのだろう。旦那さま。ちがう。恋人。ちがいます。お

友達。いやだ。お金。まさか。亡霊。おお、いやだ。もつとなごやかな、ぱつと明るい、素晴らしいもの。なんだか、わからない。たとえば、春のようなもの。いや、ちがう。青葉。五月。麦畑を流れる清水。やつぱり、ちがう。ああ、けれども私は待っているのです。胸を躍らせて待っているのだ。眼の前を、ぞろぞろ人が通って行く。あれでもない、これでもない。私は買い物籠をかかえて、こまかく震えながら一心に待っているのだ。

太宰治の「待つ」は昭和十七年（一九四二年）の作だが、時局にふさわしくないとのことで規制を受けた作品である。本来は『京都帝国大学新聞』三月号に掲載される予定だったがかなわず、同年六月に刊行された女性独白体小説九篇を集めた太宰治の創作集『女性』（博文館一九四二年六月）に収められた。女性独特の軽妙な語りを用いつつも、何を待っているかを明示しない小説だ。「待つ」対象は、「私」本人にもとらえられない漠然としたものとして描かれる。あるいは、あえてはつきりと定義しないという方法が採られている。

中原中也「いのちの声」(『山羊の歌』所収 昭和九年刊行)もまた、求める対象を明示しない詩だ。

僕はその寂漠の中につき沈静しているわけでもない。

僕は何かを求めている、絶えず何かを求めている。恐ろしく不動の形の中にだが、また恐ろしく憔悴している。

そのためにははや、食欲も性欲もあつてなきが如くでさえある。

しかし、それが何かは分らない、ついで分つたためしはない。

それが二つあるとは思えない、ただ一つであるとは思ふ。

しかしそれが何かは分らない、ついで分つたためしはない。

それに行き著く一か八かの方途さえ、悉皆分つたためしはない。

そして同じく中原中也の「言葉なき歌」(『文学界』昭和十一年十二月号)。「あれはとほいい処にあるのだけれど／おれは此処で待つてゐなくてはならない」と始まるこの詩もまた、「あれ」の正体を明示することなく「待つ」姿勢だけが語られる。

これらの小説や詩の共通点は、対象がはっきりと語られないこと、求めながら何かを待つていることである。戦争に傾斜する中で、小説や詩は対象を空洞化しながらも、善や悪を確定せずに、その対象にまつわる周縁的な言葉を駆使する方法にたどり着いている。高島高には太宰治に関する詩が二つある。『北の貌』(昭和二十五年 スガキ印刷工業株式会社) 所収の「自虐 — 太宰治氏に手向く」と『続北方の詩』(昭和三十年 スガキ印刷工業株式会社) 所収の「或日の北国 — 太宰治氏の一章に」である。誰からも理解されない自意識の過剰さやそのことに起因する孤独について寄り添った内容の詩である。また、中原中也についても「夏も終わりに — わがささげる追慕」(『北の貌』所収)という詩がある。立原道造と中原中也が詩の中に登場するこの詩は、過ぎゆく夏のおびしさが夭逝した二人の詩人の死になぞらえながら描か

れている。高島高にとつて太宰治や中原中也は意識するべき大きな存在であり、その文学的な方法に対しても關心を抱いていたことが推測され、大変興味深い。また、本論からは逸れるが、『北の貌』『続北方の詩』が、高島高の故郷である富山県のスガキ印刷工業株式会社（当時の住所は富山市古鍛冶町五九で、須垣久作が印刷者）で印刷されていることも興味深い。

ところで、高島高の『山脈地帯』「第一部」には「北の銃後」という詩がある。その一部を引用する。

人々は待っているのだ

終日山をみつめながら人々は幾日も幾夜もじつと待っているのだ

そしてこの詩の後半には次のような詩句がある。

やがて雪が来ようとしているこの山麓の町に

その雪を踏みくだいてあの山のずつとむこうから必ずやうって来なくてはならないものがあるのだ

やうって来なくてはならないものがあるのだ

と人々は信じている

この詩は四章で構成されており、詩の最後には「この度の戦いに友人幾多の戦死に遭遇し感慨措くところを知らず。」という「附記」がある。友人たちの戦死を悲しむ気持ち伝わってくることから、「戦争の詩」であることは明白だ。しかし、用いられている詩法は太宰治の「待つ」、中原中也の「いのちの声」「言葉なき歌」にあるように、あえて〈空白〉をつくることで何を待っているかを明示しないというものだ。北アルプスの小さな山麓の町に降る雪を踏み砕いて「やうってこなくてはならないもの」が何か、それははっきりとは語られない。ただ人々は緊張し、何かと真剣に助け合いながら〈待っている〉。「門毎の日の丸の旗以外に／何物の信仰も尊ばれなかつた」という詩句からは、北方の片田舎の小さな町にさえ全体主義が浸透している様子が伝わってくる。と同時に、この詩の語り手である「田舎の医者」が、思想や信仰が制限された自分たちの不自然な状況を自覚的にとらえていることがわかる。自分たちを取り巻く戦争の影響をどこことなく知りつつも、〈何か〉を〈待っている〉銃後

の人々。戦場の正確な情報こそ得られないが、〈何か〉を一心に〈待つ〉姿勢だけが残る。対象を明示しない方法のみが可能にする〈空白〉へのさまざまな言葉の代入可能性がここにはある。このような作品を読むと、戦時、ものをはつきりと述べることから距離を取り、時局に対して中庸を保とうとした芸術家たちのしたたかな方法意識に触れることができる。「あくまでも対象を明示しない」という方法意識だけが明示されているのだ。

7、医師の眼

高島高の詩は〈医師の視点〉が入ることによってその魅力を増す。

『山脈地帯』「第一部」のラストに配置された「野戦病院への手紙」はまさに医師の視点から描かれた詩だ。「野戦病院への」とあることから、この詩が野戦病院に宛てて書かれたものであることがわかる。

ちよつとの擦り傷だと云って来たが

それはどの程度の傷か僕にはようくわかる

繃帯をしていてわからぬと思うから

君はそんなことが云えるのだ

君たちの仲間は

みんな繃帯をしてベッドにかくされているから

そんなことはなんでもないと考えている

そして人々にその程度のことを話し

君たちは平気な顔で笑ってさえみせている

それは君たちは君たち以上になっっているからだ

肉体の傷以上に魂が磨かれているからだ

と僕は考える

君の繃帯の中にかくされてある傷のことは

君が云わなくても医者である僕にはわかっている

それはわれわれの日常では殆んど見かけない程の傷だ

だがそんなことを君は何んとも思っていないことも

突撃する日の丸の旗と鉄兜と

曠野の草と崩れたあか土と

そうだ君の祖国愛は君以上にしているのだ

日の丸の旗の下に

君はいま鬱勃として崇高だ

それは民族としての崇高さだ

君の血液にも不肖僕の血液にも流れている

それは日本人としての崇高さなのだ

肉体を投げた人類最高の強さは

君を尚その負傷から切りはなさせているのだ

君のあせるのも無理はない

そして戦争というものも

非戦闘員である僕にもあましまわかって来た

(進め！ あたつてくだけろ)

それは祖国のためにだ

それは自分を生んだ国のためにだ

その言葉の実用を最も忠実にを行った君

そういう君があらゆる兵士の一人一人なのだ

僕たちにはわかる

僕たちにはわかる

日本が

どんなに強く

どんなに負けないかは

だが待つてくれ給え

君がいましきりに欲している

白いベッドと白い繃帯を

荒漠たる曠野と鉄兜に代えようとすする以上に

君の魂は充分にたたかっている

たたかっているのだ

と僕は云いたいのだ

君の晴れの日を祝ったあの北方の山河は

いま君の名誉の負傷を知っているかのように

常以上に生き生きとした秋晴れを装っている

そして悠々と自信たつぷりだ

しずかに落ちついた君よ

いま君はさらに尚重要な非戦の戦士なのだから

それは犠牲というもの以上の尊さだ

君の血をようく知っている僕

僕の血をようく知っている君

このような君と僕は

あらゆる国民全部の君と僕だ

一つの巨大な流通

それは国民全体の血液の流通なのだ

手段や科学や主義以上の流通なのだ

それが今しつかりと 手を握って

戦って 構えている

それ以上僕たちは何を云うべきであろうか
何をあせるべきであろうか

詩の語り手「僕」は、野戦病院に手紙を書く医師という設定である。「君の晴れの日を祝ったあの北方の山河」が「君の名誉の負傷を知っているかのように／常以上に生き生きとした秋晴れを装っている／そして悠々と自信たっぷりだ」に見られるように、故郷の悠々とした風景に戦地での「君」の勇姿が投影されている。本稿第四章で述べた仮構の〈戦地〉と〈北方〉との関係性がここでも導入されている。

兵たちは怪我を負い、戦うことができなくなつたことに負い目を感じている。それゆえ、重篤な状態にもかかわらず、自分の負った傷を隠そうとする。矜持と申し訳なさの両面を持った負傷兵の内面。そんな彼らの心中を察している医師である「僕」は、彼ら負傷兵に「手紙」で語りかけるのだ。身体は傷ついても「君」は十分に精神的な面で戦っているから、今は回復を図るべきだ、と。傷ついた者をいたわる医師の視点が生きています。〈傷〉は

現実の身体を削る痛みを伴った厳然とした現象だ。それは概念ではない。イデオロギーでもない。明らかな生身の身体に関わる状態だ。戦場で負った特殊な傷を、医師は決して見落とさない。

非戦闘員である医師の視点は、兵士よりも遠巻きに戦争を眺める視点を仮構し得る。それが医師の視点に与えられた独自性を保証する。「そして戦争というものも／非戦闘員である僕にもあらましかつて来た」という詩句は、この医師が、戦争の「あらまし」、つまりは仕組みやシステムの正体を理解し始めた、ということを意味する。戦争の「あらまし」とは「(進め！ あたつてくだける)／それは祖国のためにだ／それは自分を生んだ国のためにだ／その言葉の実用を最も忠実に行つた君」のような人間を量産するシステムのことを指す。このような詩句は、戦意昂揚のフレーズの「実用」を知り、国民に「忠実」な実行を強いるシステムの存在を看破した者だけが発語できる種類のものだ。また、「僕」は戦争が何かを手中におさめるための「手段」であり、精神性や民族性とは別次元の「科学」の成果によるものであり、時流によつて変化する可能性のある「主義」によつてい

を知っている。「僕」は前のめりに戦争に向かつていくこの国のからくりに対して自覚的な語り手だ。「僕」は、医師の視点を借りて遠方から戦地に「手紙」を書くという間接的な方法の中で、戦意高揚というよりはむしろ、傷つきながらも戦おうとする者たちをなだめ、兵士たちの矜持を守り、誇りを損なわないように配慮しながらも抑制のきいた立場で詩を展開させていく。それは軍の強さを信じながらも、「だが待ってくれ給え」と語りかけ、傷ついた身を祖国に捧げようとする負傷兵に何とか休息を与えようとする「僕」の姿勢に強く表現されている。傷を負い、戦死することが報国につながるという幻想に、この医師は歯止めをかけているとも言える。医師の視点の導入によって、「僕」の語りはナショナルイズムに完全に統合されていかず、あくまでも「非戦の戦士」である「あらゆる兵士のひとりひとり」に向けて投げかけられたものになっている。この詩の価値は、激化する時局に巻き込まれながらも、戦いそのものをいさめる要素を持つところにあると言えよう。

8、おわりに

本論考では、高島高の「戦争の詩」について詩法の面から考察を加えてきた。詩法のない詩は存在しないとすれば、『山脈地帯』に収められた「戦争の詩」はきわめて方法的であり、そこにこそ詩人独自の表現が息づいていることが確認された。

そして、太平洋戦争が激化し、終戦の昭和二十年に向かつて詩人たちの言葉もまたその姿を変えていく。時局によって書かされたという視点ではなく、いかなる状況であろうと、詩は、詩人自らの判断で選択された言葉によって創り出されたという視点で考えるならば、「戦争の詩」もまた強烈な詩意識によって創出された異形を持つことになる。今後は終戦の昭和二十年前後までの高島高の詩や詩意識について考察を加えていくことが必要となるだろう。これについては稿を改めたい。

※ 高島高の詩の引用はすべて『詩が光を生むのだ 高島高 詩集全集』(二〇一三年十月十五日 高島修太郎発行 桂書房) によった。

※ この論文は平成三十年八月に「富山文学の会」で発表した内容をもとにしたものである。

堀田善衛の天皇小説「曇り日」をめぐって

丸山 珪一

はじめに

堀田善衛の短篇小説「曇り日」が書かれ、発表されたのは、戦後十年を経た一九五五年である。作中に「戦後十年と合言葉みたいに言われる昨今、おれが思い出し、考えている」という主人公の言葉があるが、実際戦後十年は単に切りのいい数字というにとどまらず、ある種転換の意識を伴って広く受け止められ、その後の歩みのために一つのまとまった時期として振り返ってみる必要が感じられていた。翌一九五六年度『経済白書』の「序言」に言われた「もはや戦後ではない」などは、それを鮮明に示す代表的な言葉であろう。「合言葉みたいに言われる」という表現は、そのような状態に対応しているとともに、他方でその受け止められ方への、主人公の何らかの違和感が含まれていることをも感じさせる。しかし彼自身も「思い出し、考えている」のであり、そしてそれこそが

この作品の内容にもなっているのであれば、堀田はこの「戦後十年」を強く意識して書いた、あるいはさらに、それをモチーフとして書いたと言ってもよいだろう。文末には「おれはおれの敗戦十年を記念して、このことをしるしておく。」とも書かれている。「このこと」の内包は、おのずから作品全体へと及ぶものとして考えられるが、直接には「心はしこっていたり、むすぼれていた、屈していたりしたのは、心というものに、ならない、心はのびのびとまっすぐな方がいい。」という言葉を受けている。つまり、しこった心、むすぼれた心、屈した心が堀田にとつて「戦後十年」を経て直面している問題であることを示す。「そのときおれの心は、屈していた。」というのが作品の始まりであり、作中でも何度か繰り返される。文脈によつては「奴隷」の心とも言い換えられ、屈伸に富んだ用いられ方をしている。「曇り日」というタイトルももとより天候状態を表わす言葉でなく、そのような主人公の、ひいては作者の心的状態を象徴的に表わす表現である。戦後十年を経て、期待された心の解放は実現しなかった、なお晴れぬ日々が続いている、という作者の思いがタイトルに予示されていると受け止めてよ

いだろう。それは何に起因するのか。そして私たちの現在、それはどうなっているのかを読む者に考えることを促す。この作品から六十年余を経て、それは変化したてあろうか。

作者は、合言葉みたいに言われる「戦後十年」言説にも刺激されながら、それらとおのずから異なる「おれの敗戦十年」を書き留めておきたのだと思われる。その焦点は天皇制の問題にある。「よく、天皇は、あれじやまったく基本的人権もないみたいなものだね、と生活の不自由さ加減を推測して同情する人がある。しかし、とおれは考えた、商売とも職業とも、何ともつかぬものにならずさわる人と基本的人権とはどうかかりあいになるものか。」と作中に書かれているところなどは、「合言葉」というほどのものかどうか分からないが、作者の違和感が向けられている、その一端を示すものである。ここは作品によって投げかけられた重要な問いでもあり、後に忘れず立ち返ることにしよう。

「曇り日」は、最初一九五五年十一月号の『新潮』誌に掲載され、単行本としては『現代怪談集』（東京創元社、一九五八年刊）に収められた。『現代怪談集』というのは、

一九五五年から五七年にかけて書かれ発表された七篇の短篇集で、タイトル通り現代の怪談と言うべき現象に、いくつかの職業（航空機産業、石油業、詩人、官吏、銀行家、阿片捜査官）に即しながら迫った作品群を集めている。「曇り日」も、天皇という「商売とも職業とも何ともつかぬものにならずさわる」ような職業と見れば同類と言えないこともないが、天皇という「職業」ではなく、主人公の「おれ」の主観に即して書かれている点で、大きく異なっている。この本のなかで異色の短篇である。一九五〇〜七〇年代には出版社が競って日本文学全集を出し、この作品はそれらのなかにも少なからず収められていて、よく読まれたのだろうと推測するが、それにしてもこの作品を論じた批評がほとんどないのはどうしたことか。作品の「おれの敗戦十年」は、「おれ」の主観的な思い出をつづるスタイルで書かれているとはいえ、作者の「敗戦十年」に回収されてしまつてよいものではない。主人公と対話しながらじつくり読むべきであろう。

作品の構造と時間

作品は四つの部分から成り、一〜四の数が打たれている。以下、ここでは便宜上、第一節、第二節・・・と書き表わすことにしたい。第一節は、朝鮮戦争の時期で、主人公の日常にもそれが及んでいる。第二節は、君臨していたマッカーサーが解任される前後の時期、第三節は天皇の「終戦の詔勅」をラジオで聞く八月十五日の前後で、主人公は上海にいる。第四節は作中に「一九五五年三月頃」という日付が出て来、新宿のバーにいる。作品の発表がこの年の十一月号の雑誌だったから、十月には店頭に出たとして、書かれたのは九月頃だろうか。作品の現在視点もそのあたりと見てよさそうだ。そうすると、おおざっぱに言って、作品は時間的に三つに分かれ、敗戦を知った戦後当初の時期、それから第二節が第一節の二ヶ月後とあり、ほぼ同期の一九五一年前半期、そして戦後十年経ての春という、ちょうど「戦後十年」の初めと半ばと終わりの時期が選り取られている。作者堀田自身の「戦後十年」も三つに分けることが出来、上海に滞在した一九四五〜四六年、帰国後占領下で暮らした時期

(一九四七〜五三)、講和条約で独立した日本での生活(一九五三〜五五)とすると、作品の三つの時期はそれぞれ堀田自身の三つの時期に対応している。堀田自身の変化に基づくものであり、それに応じて天皇の占める位置に変化があり、またそれに応じて「おれ」の天皇に対する態度にも変化が生ずるという関係になっている。こうして作品のテーマの天皇制問題は、まず時期区分による節構造として具体化される。作品の執筆現在から振り返って、「おれ」の天皇経験がそれぞれの時期との対応において表現される。

この作品ではテキストの節への分化が構造のもっとも大きな要素だが、そしてそれが時間によって規定されていることが明らかになった。しかし、節は四つあつて三つではない。第一節と第二節は、大きく言えば同時期に属するのだが、いわばマッカーサー更迭の以前・以後で区別される重要な変化を伴っているのである。一つの時期がさらに二つの時期に分かれたれ、二つの節になったわけだから、その意味では時期区分による節への分化という同じ原則が働いているということもできるが、必ずし

もそれだけで済まされない面もある。この二つの時期への分割は、日本の支配構造の変化には関わらないからだ。天皇とマツカーサーの繋がりには強かったが、更迭によって構造に基本的な変化が生ずるようなものではなかった。この二つの節への分化については、むしろテーマとの関係での「おれ」の思いの変化が決定的である。「曇り日」は、戦後十年を経て、「心が屈している」ことの淵源を求めて、天皇制問題に焦点を当て、天皇と関わったみずから経験を想起し、書き記して行くことから成り立っている作品である。つまり、作品の構造は、支配構造に関わる時期区分によって規定されるとともに、作者が主人公の経験をいかに配置するか、言い換えれば、作者が読者に対しテーマをいかに展開するか、という面からも規定されているのである。作品が出来事や想起する経験の生起する時間順序において語られるのではなく、たとえば戦後十年の半ばの時期に当たる第一、第二節が、戦後当初の上海時代に先立つものこのことに由来する。

作品精読の試み

第一節 黒い巨人の事件、「魂の凍るような光景」

作品冒頭は、先述のように「そのときおれの心は、屈していた。」で始まる。いきなり「屈していた」という異化的表現である。異化というのは事態が尋常でないことの強調表現だが、すぐ次の文章に滑らかに続かず、そこから始まる節全体にそれとなく読者の心構えを向けさせる。「おれ」が何者かは節の最後で初めて分かるのだが、貧乏暮らしの物書きで、ある町のさかな屋の二階に間借りしている。三歳の女の子のいる三人暮らしである。もう一人は妻女だろうが、どういうわけか、作品にまったく顔を出さない。「おれ」の年恰好も分からない。小さな子がいるから、まだ若いだろう。「おれ」は女の子の手を引いて、朝パンを買いに出かける。店の奥に小児麻痺の子がいて、ドタリバタリと全身の力ではいっずっている。帰り道で具合悪いことに、右の足がブラブラしている、木の杖をついた少女と道で行き違う。戦争中に誤って工業用の油でつくられたテンプラを食べたために、神経が

麻痺しているのらしい。「おれ」は気持ちが悪く落ち着かない上に、子どもにも尋ねられたりすると、説明できそうもないので戸惑う。パンはつけて買ったが、昼はさかな屋からマグロのナカオチをもらって食いつないでいる。しかもそのさかな屋からは、店をたたんでパンパン屋をやりたいと通告を受けている。この家の大家で、地づきのヤクザの京柳親分がそんなことを考えているようだ。町の隣のY市が基地の町であり、その米兵が目当てだ。Y市との間は山で、そこには無数の横穴が開いており、その穴全体が火薬庫になっている。夜中をすぎると、貨物列車が何千キロという爆弾をそこから運び出しては立川や横田へもっていく。朝まで何度も目を覚ます。朝近くになると、逆方向から騒々しい音をたてて貨物列車がやって来て、朝鮮の戦争で壊されたトラックやジープや戦車などを積んでくる。Y市の隣に修繕工場があるのだ。

ある日、さかな屋二階の「おれ」たち三人がねころんでいる部屋へ、刑事が三人勝手にどさどさと階段を上がつて来た。ヨーコさんの家を見はるのに、「おれ」たちの部屋が恰好の位置なのだ。ヨーコさんは女学校出で、英語もしゃべる方は結構間に合い、パンパンで食っている。

繁盛しているようだ。刑事たちは「おれ」が執拗に抗議して怒鳴りまくっても平気だ（翌日再度の抗議に謝りに来たが）。その少し前、ヨーコさんの家に英文の手紙を書くアルバイトに行ったとき、脱走兵がいることに「おれ」も気づいていた。しかし「世に行動中の刑事ほど、おれの痛にさわるものはない」のだ。そういう場に出会うと、刑事の眼鏡のガラス玉にすぐとある男の顔がかさなって見える。「下ぶくれの頬っぺたをして、分厚い唇の上、鼻の下にヒゲを生やして、まるい眼鏡をかけた、発音が不自由な男」のことだ。「おれ」には、その名前を平静な心で呼ぶことが出来ないの、Qと呼んでいる。「われながら、不可解だが、どうにも避けがたく抑えがたく、そいつの、そのQの顔がかさなるのだから、不思議だ。何か骨のズイまで、達しているのだから、不思議だ。何かなふうにして作品に初登場する。Qは、下ぶくれの顔からの連想であろう。この引用は、刑事とのつながりで、骨の髄にまで達するような仕打ちを身に受けた主人公の、戦時下の過去を想像させられる記述である。とは言え、具体的なことは何も書かれていない。

一週間後、MP「アメリカ軍の憲兵」の指揮による黒

人脱走兵狩りが行われる。「おれが生涯のうちで見たいちばん悲惨で、魂の凍るような光景」だ。ジープが二台やっつて来る。外に出てみると、裸の黒い巨人が、雪の積もった畑のなかの電信柱にしがみついている。MPたちは大型のピストルを持ち出してパーンパーンと撃ちだした。黒人をなぶりものにしてているのだ。日本の警官がタバコを吸いながら眺めている。黒い男は異様な声をあげて泣き出した。裸の黒人は誰にも声をかけられず、ぼろ屑のように放り捨てられた。まったく「人権どころのはなしじゃない。」しかし「こんなとき、裸の相手に、こんなことをするというのが、実は白い奴らの、そいつらの方が人生に対して犯罪人なのだ。」とまっとうな考えを吐露する「おれ」も含めて、眺めている大供子供たちは、血の気をなくして、なんの反抗の気配もない。やがて日本人警官がMPの指示で、ピストルをかまえ、黒い男を取り囲んだ。MPの乗用車がやって来て、黒人兵を連れ去った。

そのときおれの耳に「あれは、いかん！」という「おれの伯父さん」の厳しい声があった。伯父さんは東大を出た、古手の新聞記者で、戦時中フランスとドイツにいて、

やがてアメリカ軍につかまり、たくさんの監獄を経験して戦後帰国した。伯父さんはさかな屋の近くに一人身で住んでいて、米と肉をもって夕食をいっしょに食べに来た。「奴らは敵味方ってことよりも、色の方での区別の方が深刻なんだ。問題は色なんだ。」と伯父さんは言う。「白人の世界で、長く暮した有色人の、痛切な心の屈折」が「おれ」に感じ取れる。伯父さんは、あのあと東大へ行って、皮膚科の権威と会ってきた。「注射一本で、黒い人間が白くなり、白い奴が黒くなり、黄色いわれわれもどうなど自由にかわりうるといふ、そういう方法は、あるいは希望は、ありうるものかどうか」をさぐっているのだ。「おれ」は、五十近い白髪の男が、それまで彼に縁もゆかりもなかった、わけのわからぬもののことを、情熱的に話すのを不気味に聞いた。「日本は、国際社会へ復帰するについで、平和憲法のほかには、なんにも土産にするものがないんだ。憲法と、もうひとつだ、この注射をもってゆけたらいい。」とも言う。そしてこれを題材にして、読んだ学者が感動して研究に一念発起するような小説を書き、ノーベル賞を取れ、と「おれ」を励ました。心が「屈していた」理由には、描かれた食や住や環境

の劣悪な事情の数々が属しているであろう。朝鮮の戦争と黒い巨人の事件もそこに関わっていた。そして人々とも見ぬ官憲の態度の連想から、「おれ」の心の中に天皇が登場して来た。ここまでが第一節である。日常つき合っている人たちが一通り顔を並べている。なかで「伯父さん」は特異な位置を占めていて、小説の締めくくりにもう一度登場する。なお朝鮮での戦争が始まったのが、一九五〇年六月二十五日で、何度か休戦会談が行われたが、その後も戦闘は止まず、ようやく一九五三年七月二十七日に休戦協定調印に至った。

第二節 美質の構造、「マゲンスイって、お気の毒ねえ」

第二節は、やはりふさぎこんでいる「おれ」が、子供の手をひっぱったりおんぶしたりして、H町へ行く海岸添いの道を歩いているところから始まる。第一節の二ヶ月ほど後だ。小さな岬の突端にあるホテルが接収されて、米軍のオフィサーズ・クラブになっている。その裏のほうを行くと、庭が何千坪もありそうな、ばかでかい邸がある。それがQの別邸＝御用邸なのだ。平静な心で名を

呼ぶこともできない「そいつ」が「おれ」の心の底に宿って、「おれ」の足をここへ向けさせたのだろうか。オフィサーズ・クラブは、いつも楽隊がブカブカドンドンやっているのだが、今日はひっそりしている。一週間ほど前に、マッカーサー元帥が解任になったせいだ。ラジオでそのことを聞いた時、「おれ」は雨の中を出かけて、濠洲にある占領軍総司令部に足を運んだ。二時間もわけもわからず立ちんぼしたあとに、「マ元帥」の車がやって来た。そのとき周りの会話のなかに「マゲンスイって、お気の毒ねえ」という声が聞こえた。「マゲンスイが気の毒だって、どこを押したらそんな音が出て来るものか」、そういう「ボタンがどこかにあって、それがどういう歴史をもっているかということがおれにもわかる」、「それでもしかし、その音をあからさまに聞いて、いくらか元気を失った。気が、屈した。」「おれ」が足を運んだのは、きつとマッカーサー解任に対する人々の反応を知ろうというのだったろう。解任は一九五一年の四月である。第一節は二ヶ月前だから、逆算して一九五一年二月頃だったことになる。因みにマッカーサー帰国の日には、大使館から羽田までの沿道に都民ら二〇万人も見送ったら

しい。

その日の夜、さかな屋の親父とヤクザの親分がそろって二階へとんとんと上がって来た。二人もマッカーサーについて同じようなことを言い、そればかりか、「リッジウエ元帥に悪くないですかね」と言うのだ。もっぱら親分がしゃべる。「えらいお見送り振りだったつてえ、ラジオで言っていましたかね、そんなにしちやあ、リッジウエにわるかるうじやないかとね」。こんなふうにも多そうな声に口裏を合わせながら、要するに、マッカーサーが解任になった状況で、パンパン屋開業に具合悪いことがなければ、さつそくやりたいということなのだ。ヨークさんがほかのパンスケたちを「指揮」するためにここへ移って来て、「おれ」たちがヨークさんの家へ移るといふ案を、「おれ」は我慢して承諾した。ヨークさんの家は、もつと線路寄りにあるから、よほどの我慢である。そもそもそろって二階へ上がって来るというのは、不吉なものを持ち込んでくる、第一節の刑事を思い起こさせる書き方だ。「どきどき」と「とんとんとん」とでは音が違い、違うだけの意味もあるだろうが、大屋は店子や、ましてその間借り人に強い力を持ち、従うしかなかった

のだろう。

さて「マゲンスイって、お気の毒ねえ」に戻ろう。「おれ」は思う、「そう思うことは、それはたしかに美質だろう。美質の、その構造が、マゲンスイだのQだの、上の方からサアと矢のような恰好でもつて、↓、とこんな恰好で超音速で降って来て、心にぐさつと刺さる。と、心の琴線というやつが、うてばひびくでジーンと鳴る。そんな鳴り方を、おれの心も、するのだ。」上からのご意向が何の抵抗もなく、人々の心情にそぐうように変形されて受け止められ、有難がられる。そして「おれ」には気に食わないけれども、それが「おれ」の心の中でもはたらく。天皇制を国民の側から支える「美質の構造」のようなものが出来上がっているのだ。

「おれ」は金がなくてバスに乗れないのだが、眠った子供をおんぶして、バス停に立っていた。やって来るだろうと思う車を待っているのだ。人があまり通らないのに、やたらに自転車に乗った警官が通る。かつて御用邸を通過して海へ流れ出る川の上流に青酸カリを投げ込んだ奴がいたことがあり、用心しているのかもしれない。主人公がバス停に立っていることや、三歳の女兒を連れて

いることも審訊問をかわす対策に思えてくる。そのときジープを先導させて不意にやって来た。下ぶくれの、色のよくない顔が見えた。「それがぐつと近づいたとき、今度は、おれの方が不意に、右手を、後から考えれば、ハイル・ヒトラーみたいに、掌をひらいて、やあ、というみたいに挙げて、挨拶をした。」「手を挙げた途端に、実におれが、ぎよつ、とした。」「おれ」の挨拶に天皇もぎよつとしたように見えた。MPに守られて、何だ、と思われた気がしたのだろうか。天皇の口許の筋肉がぐつとひきつり、何か叫んだみたいで、「おれ」にあの黒人の絶叫を思い起こさせた。

「いまの、ひどく若い人たちのことは知らないが、ひどく若くはない人々は、それぞれにみな天皇のことをおのおの肉体のいのちに、じかにかかわるものとして考えたことがある筈である。考えたどころではなく、それは事実としてじかにかかわった。・・・いまはしかし、いのちのことは、措く。措くといつても、これを書いていまのいま、おれのいのちは、矢張り何かを感じて固くちぢこまっていることを、おれは白状しておく。・・・感じるどころの何かの正体は、いえは危険感にほかなら

ない。きざはしの下にたむろしている取次どもが何をするかかわらぬ、という漠然たる危険感、だ。」「おれ」はおのが「肉体のいのちに、じかにかかわるものとして」天皇のことを考えざるをえなかった世代だ。戦時下に青春時代を送り、第一節での脱走兵事件のようなことに遭遇すると、自分自身の内奥に強い痛みを感じる。ずっと上の世代、八十八歳のじいさんが田舎の家にいる。Qが地方行幸で回って来た時、コタツにもぐりこんでいるじいさんに「見に行かないのけ」と訊ねると、「いくさにまけたQなんぞ、だれが見たいか」と言った。烈々たる精神がその言葉の奥にあったのはたしかだが、コタツから出て、何かするというのでもなかった。「烈々たる精神」が何かは読者の推定に委ねられている。「勝った、勝ったと国民を欺きおって」という怒りであろう。けど若い世代はじいさんとも「おれ」ともちがっている、と「おれ」はここで思っている。世代による天皇に対する感覚の相違は、時代の移り変わりによる天皇制の位置の相違とも連動しており、この時期では上に立つマツカーサーとの二重の支配構造になっているから、少し複雑な問題である。先ほどの「美質の構造」の説明でも、「マゲンスイダ

のQだの、上のほうから」というふうにいっしょに括られていた。それに何よりも新憲法による象徴天皇制への移行がある。

第二節で、「おれ」は天皇を見に御用邸のほうへと出かけたなり、マッカーサーを見に占領軍総司令部へと出かけたり、たしかに行動的ではあるのだが、結果は、自分のなかにもはたらく「美質の構造」を確認したり、天皇に思わず挨拶してしまい、ぎよつとしたりして、やはり心が屈するのであった。そして自分にそうでなかった時期があったのを、その対極のような行動をしたことがあったのを思い出す。

第三節 「一生にいっぺん限りなき愛国心かられ…」

「おれ」は日本の敗戦前後上海にいた。八月十一日、朝目抜き通りにやたらに青天白日旗が目立つなと思いなから、それがなぜかとも考えないで、日本の留学生時代から親しく、いまは大新聞の総編集をしているゴゲツ「呉珮」のところを訪ねて行った。そして「とうとうここまで参りました。日本が裏切ったとは思いません。・・・お

元気で」と言われ、日本のポツダム宣言受諾をはじめて知った。短波放送などで前夜のうちに日本の敗戦は知れ渡っていたのである。「そして、お元気で、というゴゲツ君のいい方のうちに、逃げるつもりらしいな、とおれは感じ、それならばご無事で、と祈りたい気持が、切ないほどに、急にこみあげて来た。そして同時に、逃げるのだな、という感じ方をした、そういうおれ自身を、汗が吹きだすほどに、嫌った。」日本の敗戦は、上海にいる日本人たちをまっさかさまに突き落とし、同時に日本に協力して働いていた中国人たちをも頼るべき何もものもない状態にしてしまった。そのもつとも優れた人間の一人であり、親しくもあつたゴゲツの別れの挨拶に、「おれ」は「逃げるのだな」と感じ、そんなふう感じたことで激しい自己嫌悪の念に襲われた。あるいはその「おれ」自身が上海へ来たことに逃げもあつたのだろうか。対等の協力者だったはずのゴゲツを自分が心のどこかで日本への従属者と見なしていたこと、しかも自分がまだ親船のうえに乗った気分であることに気づいたのである。このあたりは人と人との対等の尊重とそれが崩れることへの堀田の鋭敏な感覚がよく出ているところだと思ふ。

八月十五日がやって来て、天皇のラジオ放送を聞いた。いわゆる「終戦の詔勅」である。雑音まじりでよく聞き取れなかったが、負けたとも降伏したとも、ひとことも言わないのを、不審に思った。そのときはじめて「おれ」は、なんだか凶々しいような、ひどいことばをつかえば、盗人ただけじゃないようなものだ、と思った。そしてゴゲツやいわゆる大東亜共栄圏に山という筈の、日本側に協力した人々に対して、天皇は何と挨拶をするのか、とそればかり気にして耳をそばだてた。けれども、遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス、それつきりだった。「何という奴だ。何という挨拶だ。お前のいうことはそれつきりか。嫌味な二重否定で、それで事は済むと思っているのか。そのほかは、まったくいまのおれのこの文章みたいに、おれが、おれが、おれの忠良なる臣民が、おれだけが可愛い、というだけではないか。」主人公のこのとっさの反応は彼の立ち位置を鮮明に伝える。その言わんとする心髄は、継いで彼自身の手で整理されて引き出されている。「これでは日本人が可哀想だ、と感じた。」のである。「何故可哀想か。これだけの挨拶では、日本人はゴゲツ君やそのほかの中国人やそのほか諸々の協力者に対して、それが

たとえどのような人物であれ、またどんな目的で日本側に近づいて来たにもせよ、だ。相対することが出来ないからだ。放送がおしまいになると、猛烈に腹がたつて来た。何ともいえぬ薄情さが、魂にこたえた。」人間としての判断をするときに、日本人の内輪のなかへひっこんではならない、相手がどんな意図かということを実に口実にしてはならない、これは一人一人の人間にとつてそうだが、まして日本人を代表する位置にある天皇がわが身本位であれば、日本人は立つ瀬がないのである。ゴゲツたちを中国の文学史が「漢奸」、民族の裏切者として扱うのは正しいだろう、しかしそうとしてもその正しさを、そのまま鵜呑みにする資格は日本人にはない。

しかし他方、詔勅の天皇に対する主人公の反応の仕方には、どこか身内に対するように、肩をゆすぶって口説いているようなところがある。「お前」という呼称もそれに見合うものだ。彼にもやはりもう少しまじなことが天皇の口から出ないかという期待と落胆とがあったにちがいない。そのあと彼は、天皇のことをいう、そのこと自体のなかに「親がかり根性」みたいなものがひそんでいないかと考えるようになるが、それは漢奸の問題を徹底

して考えつめたことから来ているのであろう。「そして海老が頭をしっぽにくつつけるほどに、屈した心で考えた、何か正確なことをここで一言、どうしてもいわなければならぬ」と思った。戦争の正当化でもなく、通り一遍の詫び言でもなく、言い訳でもない、自分たちがこんな運命におちいったことについて、正確なことを一言、天皇抜きで、言わねばならない、と。これを百万部も刷って、全中国に空からばらまこうという計画は、少なからぬ日本人の協力も得られ、思いがけずばやく実現しかけたが、印刷工場で結局受け付けられなかったために、頓挫した。これは「告中国文化人書」として、堀田のイニシアティブとともに今では読者に知られている事実だ。

「おのれの属している国というものを、ともに生きていく人民国民というものを、その歴史を、あんなにも全身で、ひたむきに愛したことはかつてなかった、天皇も、軍も、官も抜きで、だ。」これを「おれは一生にいつぺん、限りなき愛国心から動き出した」とも言う。漢奸の問題をめぐって、日本を代表すべき天皇と正反対の立場に至ったことから「愛国心」が生まれたのは、道筋としても爽快だが、核心は、上から降りて来る言葉に惑わ

されず、自分たちの言葉で正確なことを言わねばならない、と考えたところから、自分たちが日本の人民国民の歴史とともにあるという一体感を得たことにある。

国民党の漢奸追求が始まり、それに乗っかって漢奸を嘲笑したりさげすんだりする日本人たちに「おれ」は強い違和感をもつが、蒋介石のあの「暴にむくいるに暴をもつてせず」に対する日本人の反応にも同様のことを感ずる。蒋介石は日本敗戦の日の演説で、この古くからの言葉を引用し、多くの日本人に感銘を与えた。暴の代表的人物である蒋介石がそう述べたことにはその背景がある。とくに中国大陸に八〇万の日本軍がいること、共産党勢力に対しますます劣勢になっていることを抜きにそれを考えることはできないであろう。もつとも「おれ」の違和感は、「暴をもつてせず」を都合よく歓迎し、むくいられて当然の暴である自分たちの侵略の重みをどこかへやってしまっていることにある。それを歓迎する自分たちの「歴史的な資格」を問いたたすことを忘れている。天皇が天皇なら、臣民も臣民で、おれが、おれがなのだ。

第四節 天皇と基本的人権

天皇にまつわるさまざまな経験を、戦後十年経って「おれ」が思い出し、考えているのが第一節から第三節までであったが、それらを一瞬に思い出させるきっかけになったのは、ひとつのざれ唄であった。第四節はその話である。一九五五年三月頃、新宿のバーに出かけたときのことである。もう十二時を過ぎていて、スタンドには「おれ」ひとり、椅子テーブル席に男が三人いて酒を飲みながら碁を打っていた。六十代半ばを越すと思われる爺さんが先生と呼ばれていた。碁が終わってその先生が細い声でうたをうたい出した。広津和郎原作の『女給』が映画化（一九三一年公開）されたときの「女給商売サラリトヤメテ」という主題歌の替え歌であった。そのうたのことばが「おれ」の胸を衝いた。この日「おれ」は家を出るとき、精力増進剤をいくつも吞んでいた。それで一人で夜半にバーに姿を現わすのだから、それなりの思惑があったとしか思えないが、替え歌を聞き、歌詞を知り、歌が延々と続くと、どうやらその思惑ごと吹っ飛んでしまったようだ。マダムに書き取ってもらった歌詞は、

「天皇商売さらりとやめて／ながみやさんと二人のすまい／しらみつぶして小首をかしげ／ちんちんというたはいまはゆめ」というようなもので、えげつないのだが、そこにはあるあたたかさもある。だが「おれ」に言わせれば、「そのあつたかさが、いやなのだ。要するに、奴隷のうたではないか。もし反抗が含まれているとしても、それは一人前の人間としての反抗ではないだろう、奴隷の反抗だろう。ああ、いい加減にしないものかなあ、とおれが思った。やりきれぬ、たまらぬ。．．．おれのなかにもそういう奴隷がいるというのだ。」ここには「あつたかさ」という新たな観点が登場しているが、「おれ」はそれに背筋が寒くなる思いをする。奴隷根性をかぎつけたからだ。天皇への揶揄があるにしても、「一人前の人間としての反抗」とは無縁だと「おれ」は思う。しかしそういう「おれ」自身のなかにもやはりそんな奴隷がいることも感じている。「よく、天皇は、あれじゃまったく基本的人権もないみたいなものだね、と生活の不自由さ加減を推測して同情する人がある。しかし、とおれは考えた。商売とも職業とも、何ともつかぬものにあらずさわる人と基本的人権とはどういふかかり合いになるものか。基本

的というからには、商売職業、つまり暮しをたてる手段とかかわりなく、人権はそれこそ基本的に存在するものなのか。そうではなからう、手段の如何によつては、監獄に放り込まれ、自由を奪われるのではないか。」というのだが、この「おれ」の論理の運びには少し混乱があるのではないか。「商売職業、つまり暮しをたてる手段」によつて人権をもつ人と持たぬ人に分けることができるだろうか。基本的人権はどの人間もが持つという、近代が生み出した、人類の未来を拓くフィクションだ。「商売職業」以前の子どもにもあるのだ。天皇も基本的人権の目で人を見るようになるなら、天皇であることに耐えられなくなるだろう。しかしだからと言って、天皇に人権を否定するには及ばない。奴隷根性を剔抉し、「一人前の人間としての反抗」を支える論理としてせつかくたどりついた基本的人権の追求がここではその徹底性を欠いているのではないだろうか。

とはいえ、とにもかくにも天皇を基本的人権との関係で考える場においてことが重要だ。唄が「あたたかさ」をもつと思われるのは、天皇と国民との権力関係を捨象しているからであろう。何かにつけ、天皇の名のもとに

痛めつけられ、いのちの危険にさらされた戦時下の青春をもった「おれ」は、黒い巨人の事件での日本人警官や刑事たちにそれを思い起こし、「マゲンスイって、気の毒ねえ」という言葉に「美質の構造」を聞き取ったのだ。その論理は天皇への同情にも同じように働いているのだろう。厄介なのは、それに同調する気持ちが自分のなかにもあることだ。しかし敗戦時、上海にいたとき、漢奸の問題がきっかけになって、上から降りて来た「詔勅」の言葉に疑念を抱いた。上海に来て、「大東亜戦争」での日本軍の実態を目にしたこともその土台になっていたに相違ないが、それでも天皇は別だという思いは続いていただろう。中国の友人たちへの不誠実で薄情なその言葉がそれを揺るがした。「天皇も、軍も、官も抜きで」心底から自発的に動いたのは人生で初めてだった。そしてそれが上海在の少なからぬ人士をも動かし、実現しそうなところまで行った。これらのことの根底には、国家の危機、「大日本帝国」の断末魔ということがあったのであり、そのことをもちろん忘れてはならない。主人公自身、それを「美質の構造」を脱した唯一の機会として思い起こしているということは、その後国家を追い詰める、

あるいはそれに迫る場をまったく持てなかつたということでもある。いや、その後どころか、敗戦時のそういう場でも日本国民はそのような主導権を何ら發揮できなかったのであった。

黒人兵事件は、年配の国際ジャーナリストである「伯父さん」に、自らの痛切な体験に基づいて、ひたすら人種問題の解決策へと向かわせた。皮下注射で色を変えることによって人種差別をなくそうというのであった。しかし人種差別も複雑にからみあつた社会的差別の一環であり、何らかの技術の開発によつて一気に変えられるものではない。他方その同じ事件は、主人公をしてやはりみずからの痛切な体験に基づいて複雑な社会的差別の中心にある天皇制問題に向かわせた。「伯父さん」の激励は、ノーベル賞と関わりそうもないこの天皇小説を生んだのだった。

まとめ

以上、作品テキストをできるだけ丁寧に追ひ、必要な引用もし、時にはコメントをはさみもして来て、おおよ

っぱには私が作品の要と見なすことを伝えられたと思うが、最後に私なりにそのまとめをしておきたい。

堀田の「敗戦十年」を記念する作品は、一言でいえば天皇小説であった。しかし天皇や天皇制がそのものとして問われるというのではなく、主人公の天皇との関わり、あるいはもつと言えは、天皇との関わりで主人公が自分の経験や態度を想起し見つめなおすという風であった。

そうした天皇との関わりでの主人公の経験や態度は、戦後十年間の支配機構の三つの時期に照応している。①天皇に絶対的権力が集中していた時期——第三節がこの大日本帝国の最終時期を対象とするが、主人公は上海にいた。中国や「大東亜共栄圏」の対日協力者たちを薄情に切り捨てる天皇の詔勅に愕然とし、自発的に協力し合い、自分たちの思いを素直に伝えようといふまいい行動を起こす。また第一節は米軍占領下だが、黒人脱走兵の事件で、権力の無慈悲さと日本人の刑事や警官の態度が、青春の時期に起因する主人公の骨の髄に達するよう痛みとその天皇とのつながりを浮き上がらせる。②第三節以外は、戦後の新憲法による象徴天皇制の時期だが、第一、二節は、占領軍が日本の国家機構に超越した権力

をもつていた時期である。第一節は、上述の通りだが、第二節では、マツカーサーの解任をきっかけに、日本人の意識の「美質の構造」が問題提起された。これは本論でも少し詳しく見たが、自分に対するマツカーサーや天皇の上からの恵みのまなざしを想定することで、救いと感動を得ようとし、そのために上への迎合的姿勢を強めるということであり、主人公はその広範な浸透ぶりを「心が屈する」ほどに知ったのである。③第四節は、対日平和条約と日米安全保障条約によって冷戦の一方の側に組み込まれる形で独立して以降の時期である。戦後十年を経て、主人公はバーで天皇を対象とした替え唄を耳にし、その歌詞に何の反抗心も感じ取れないことに困惑する。この屈した心を「おれの敗戦十年」に顧みて、これはいつたにどういふことだろうとあれこれ思い起こしながら書き記したのがこの小説である。

この小説から私たちが受けとめるべき最も重要なことと私が思うのは、主人公が自分もその浸透を被りながらも、同時にどこを押せば、その音が鳴るかが分かりもしている、そのメカニズムを捉え、読者に提起していると思える「美質の構造」の問題である。これは公が権力と

一体化し、見上げる存在となり、国民が見下げられることになじんで心地よくさえ感じている状態、そのためみずから主体として自発的に自分たちの歴史に関与しようとしないう状態と言ってよいだろう。作中ではあからさまに「奴隸」の心とも呼ばれていた。「見下げられる心地よさ」はそれによって作られる国民の多数者が内外の他者に対し排他的になり、見下す関係によって強められる。明治維新以降を一応日本の近代とすると、明治の初年代を除けば、ずっとそうだった。相継ぐ戦争がその「構造」づくりにより多大の寄与をしたに違いない。「美質の構造」はまるまる日本近代の産物であった。国民が自分もいっしょに作り上げたためにそこから破り出することは容易でない。私たちの一人一人がその構造を見極めることで、主人公と作者の「屈する」思いへの深い共感を経て、その対象化をさらに具体的に進める場へ出ることが必要であろう。象徴としての天皇によって天皇制が権力機構の一端を変わらず担っていることが見えにくくなっていることも関わりがあるだろう。六十余年前の堀田の問題提起は、すでに象徴天皇制への移行がもたらした危機意識に発していると思われる。第二節には「これを書いている

いまのいま、おれのいのちは、矢張り何かを感じて固くちぢこまっていることを、おれは白状しておく。」と書き込まれていた。上海での経験は、自主性と相互協力の広がりがある歴史の大きな動きにつながる方向を示唆していた。あのときあったひたすら行動への広い共感はともかく、国家権力そのものの危機状況がその土台になっていたことは間違いないが、それは当てるにできることではない。自覚的・持続的にその方向を追求することを促すものである。

もう一つ、作品から提起されていることに、基本的人権の問題がある。この言葉はいまだに私たちの日常になじんでいない。天皇のいわゆる「人間宣言」も、基本的人権は無縁だった。上から発した「美質の構造」宣言というに近い。作品の第一節には人権という言葉が一度登場した。この節はいささか奇妙な構成で、最初に身体障害者が二人登場し、その後パンパンのヨーコさんが現われ、それから黒人が出てくる。それらがどんなつながりをもつか明らかにされず、そこにQも出てくる。私は最後の節で基本的人権が天皇に對置されることから振り返って、ようやく、しかしなんとなく、そういうことな

かという思いに至った。身体、性、人種などで個人が周りからあらかじめ負荷された責任を負わされる状態というところが共通している。天皇もその同じ差別システムのなかで対極の特権的な位置を占めている。第四節の説明には少し混乱があったが、基本的人権は各人が人間としての尊厳をもって対等に向き合うことを主旨とする。これが日本語に、つまり日本人の生活になじむことが、「美質の構造」の打破に通ずる道であろう。この小説の最後の言葉はここにあると思う。

〔付記〕

昨年の富山文学の会研究大会で、生誕百周年を迎える堀田善衛に小特集の企画がなされ、『曇り日』のことなど」と題する講演に臨んだが、話のマクラで終ってしまい、本題に入れなかった。本稿は、そのとき用意したレジュメ資料を基にしながら、それに大幅に手を加えたものであることをお断りしたい。

佐多稲子「水」における敗北と春の陽

— 感情表現をふまえて —

中山 悦子

一・はじめに

万物の根源は水である。生命の維持には不可欠であり、ほとんどの人にとっては、非常に身近なものであると言える。佐多稲子（一九〇四—一九九八）は、若い頃、「本が読みたい。渴しているものが水を飲みたいように」という欲求があった。それで、上野の清凌亭での座敷女中を辞め、日本橋丸善書店洋品部へと勤めた。五十七歳の時、短編にタイトルもシンプルに「水」とつけ、世に送り出した（昭和三十七年五月一日、『群像』五号）。同作品は、富山県ゆかりの作品として、作者佐多稲子も来富者として県内で挙げられている。『群像』創刊七十周年記念号（平成二十八年）において、戦後を代表する名作短編の一つとして、三島由紀夫、太宰治、円地文子、室

生犀星らと収められている。佐多稲子と同年生まれに、幸田文、堀辰雄、舟橋聖一、丹羽文雄、武田麟太郎がいる。

本作「水」では、主人公の少女・幾代および母親として周辺の人物や風景の描かれ方が、抑制されている文章の中でもリズム感をもって、まるですぐ目の前の情景のように描かれている。独特の言い回しで強調される表現は、稲子の言語的感性が光り、多くは語られていない作中でも読者の心へと強く響く。短編の巧者といえ、筆者は、芥川龍之介や円地文子进行を思い浮かべるのだが、特に、稲子の一歳年下の円地の短編、「ひもじい月日」（第六回女流文学者賞受賞）は、主人公が身体的弱者の女性であり、稲子の「水」を読む時、同作品を思い起こさせる。円地は稲子と同じく、長谷川時雨主宰『女人芸術』への執筆もあり、稲子と円地は対談などもあり、同時代の代表作家でもある。さらに、稲子は円地とは、「遠い親戚に当ることになったのである。」と自身が述べている。

佐多稲子は十六歳、上野の料亭清凌亭で座敷女中をしていた時、偶然、芥川龍之介や菊池寛らに出逢い、さら

に、二十歳、カフェ紅緑で女給をしていた時、のちに二番目の夫となる窪川鶴次郎、中野重治、堀辰雄ら『驢馬』同人と出逢った。これらの偶然の出逢いは、稲子に作家という道へ進む大きなきっかけとなり、その後の人生は波瀾万丈ともなった。

さて、平成三十年は、稲子の没後二十年であり、本年は、生誕百十五年にあたる。昨年において、その記念展なるものは、長崎市や兵庫県相生市、墨田区、田端、大森など関連地で特に開催はなく雑誌の記念号としては、佐多稲子研究会編『くれない』第十二号、書肆草茫々・八田千恵子編『草茫々通信』第十二号の出版があつた。

まもなく平成時代が終わり、新元号を迎えようとしている今、本稿ではまず富山県ゆかりの文人で明治期以降の特に女性作家、佐多稲子に注目してみたい。彼女の短編「水」は富山県文学関係年表に昭和三十七年、松本清張「けものみち」などと一緒に掲げられている。県ではその前年に北陸線に特急「白鳥」が登場し、県下でカラーテレビ放送が開始された年である。「水」について、立野幸雄が『越中文学の情景』で、「この短編を読む度に文学の素晴らしさに目が洗われる。さり気ない描写で人

の本質を見事に書き表している。三」と、論じている以外ほとんど見当たらないのではないかと。

「水」において、幾代の哀れさ、けなげさに同情を寄せ涙し、作者が幾代へ春の陽を当ててあげたいという表現であるなど、従来のとらえ方は出つくしている感があるのではないだろうか。そこで、作者の言語表現について、特に、主人公幾代の感情表現をふまえながら、「敗北」ということばが、稲子の他作品でも目にする点でその意味するところを掘り下げてみたい。さらに、冒頭の「春の陽ざし」、および最後の「春の陽があたった」という表現は、作者が主人公幾代に対して、果たして前向きな温かい目を向けて、このように描いたのかを稲子の他の作品、および稲子自身のことばなどから考察してみたい。

二．稲子の小学生での退学

佐多稲子は筆名で、本名はイネ、長崎市八百屋町に、父・田島正文、佐賀県立佐賀中学校五年で十八歳、母・高柳ユキ、佐賀高等女学校の一年で十五歳だった二人の元に生まれた。このような複雑な出生からしてその後の

人生を考えた時、苦難の道を歩むことになると思う多くの人が想像するだろう。母親は稲子が小学校に上がった年に他界、二十二歳であった。死の直前、小学校へ上がり片仮名が読めるようになった稲子に「ヨクベンキヨウシテヨイオクサンニナルヨウニ^四」という手紙をくれた母だった。叔父の佐田姓を稲子が四十二歳の時に継いだ。

幼い頃から貧窮にあえぎ、十一歳、小学校五年で退学し、キヤラメル工場で働き始めた。父は、幼い稲子に「女文士にしてやろう」と言ったことは稲子の心に残った。

父の弟である早稲田大学生だった叔父の佐田秀実を頼りに一家は長崎から上京、稲子の文才は長崎で叔父に連れて行ってもらった図書館でも培われた。その後、叔父は二十五歳で他界した。本作「水」はこの叔父が亡くなった際に、稲子が経験したことを題材にしている。

大正六年、父は相生の播磨造船所に単身就く。稲子は、女給やメリヤス工場で働いて生計を立てようとしたが、困窮し、芸者になろうとしたところ、相生にいる父親があわてて引き取った。大正九年、稲子は祖母ヨツと再び上京し、上野の清凌亭、丸善洋品部に勤めた。そして、最初の結婚相手、小堀槐三とは彼の暴力と疑心暗鬼でう

まく行かず心中を図った。その後、稲子は相生に住む実父の元へ行った。そこでは、つかの間だが安らいだ生活ができ、十四歳の時、短文や短歌を投稿した。堀辰雄の紹介で、本名が片山廣子、歌人で翻訳家の松村みね子主宰の『火の鳥』に詩や小説を発表した。稲子は、いつも「テーマがない」と言いながら、自らの苦難の経験を、学歴がないことを幼い頃からの膨大な読書量と、運命とも言える作家たちとの出逢いを契機に自らのことばで表現し、生涯書き続けることによって作家として大成した。女中、女工をした経験は稲子を救ったのである。

先に挙げた、稲子が出逢った作家たち、さらには、田村俊子、宮本百合子、林芙美子ら多くの文人たちとの交流があり、稲子より先に逝った室生犀星、中野重治らを見送るため、多くの弔辞を読んだことにもなった。七十年代に差しかかろうとする頃の稲子の写真が掲載されている文献を見ると、稲子自身が大好きだったいつもの和装姿で微笑んでいる。高く盛り上がった頬骨は目立ち、しっかりとした眉、大きめの鼻、そして少々厚めの唇、全体から醸し出す雰囲気は上品である。とても優しそうに見えるが芯が強く、凜とした印象のほうがある。若い時

から美しい人だった。稲子の波乱万丈の人生は、九十四歳で静かに閉じるのである。

三・水のメタファー

水とは何か。色は、青味がかって見えるが無色透明で、日本語で、水ということばは、「MI・ZU（ミ・ズ）」という音の連続で、意味との間に必然的なつながりはなく恣意的であるが、美しい印象というものを備えている。日本語には、水、特に雨の表現は非常に多くの言い回しがある。金田一春彦は、「花は日本人の大好きな言葉で、（中略）水もまた好きな言葉で、「水を向ける」「水に流す」「水商売」「水物」「水くさい」など、たくさん、の語句を作っている。^五」と述べている

佐多稲子の「水」の最初の段落では、「泣いていた」という液体、「列車の鋼鉄の壁面」の固体、「空にはうららとした春の陽ざしが」と天、太陽、光が描かれ、タイトルは水である。水は液体、固体の氷、気体の水蒸気と形を変えられる。そして、日本の水は、清冽である。タイトルがシンプルな分、いろいろと想像ができるが決

して、物理的な内容でも水を大切にしようという話ではなく、ジェンダーの問題、身体的、経済的弱者の問題、地方と都会の格差、母と娘の深い絆、雇う者と雇われる者の考え方の違いなどモチーフが多く含まれている。

本作は、左脚が少し短い幾代が、郷里富山県の入善の紡績工場では雇ってもらえず、上京して、同郷の主人の旅館で住み込みで働いていた。幾代は実母の危篤に際しても、信頼していた旅館の主人と妻から帰郷を待つよう言われ、「ハハシンダ、カヘルカ」の電報に旅館を飛び出した。幾代は上野駅のホームで一時間後に来る列車を待つて、しゃがみこんで泣き続けている。そのような中でも、駅員が閉めるのを忘れた「水道の蛇口から出てな流れつづけている水」、それを「水道のそばを通り抜ければ」、無意識で栓を閉める。そしてまた、変わらぬやがみ込んで泣き続ける幾代、「その場所に、さえぎるものがなくなつて春の陽があつた。」という作品である。作中には、「越中金ヶ淵」「入善の紡績工場」、「富山市の病院」という富山県の地名が出てくる。地元では、「金ヶ淵」で、その名前からも、「この土地に住んでいた医者が多くの娘を誘拐し、体を押しつぶして体からにじみ出

た油を大きな釜にためて葉として売っていた。^六に始まる恐ろしい言い伝えが残っている。富山の方言「くお金、おくってくれたでエ。」と語尾にアクセントをつけて、また、「なあん。」「(気にせん)こっちや」と、出てくる。

金田一春彦が、「日本語は方言のちがいの激しい言語で、関東方言・関西方言・北奥方言・九州鹿児島方言など、それぞれヨーロッパへ持っていったら別々の国語だ。^七」と述べている方言。稲子の方言に対するとらえ方の鋭さは、『女の宿』で見られる、いわゆる大阪弁の表現でも非常にうまく発揮されている。「水」は、単行本の頁数にして十頁に満たない作だが、奥野健男が、「一行一行に無限の人間のかなしみ、生活の重さがこめられて、(二十枚足らずの短編であるが)何百枚かの長編を読んだと同じ感銘を受ける。」、磯田光一は、「つねに日本という風土を生きたる庶民の世界に、その根の一端を下ろしていた。そういう佐多氏の感性の一端を、読者は『水』のうちに見るであろう。^八」、坂上弘は、次のように評している。

佐多さんの本領であり、一つの頂点でもあろう。しかも、ここには、幾代という少女の生き方を、佐多

さんの生き方が、大きな翼のように被護し、その覆い方に、感傷のない、暖かいものが流れている。佐多さんの文学くらい、生活の仕方への感溺からも、時流の滓のような虚無からも遠いものはない。^九

「水」は稲子が五十七歳の時の短編で、当時、小中学校の教材に使用された。読み終えた学生たちは、幾代の哀れさに同情し涙したという。昭和四十年代から五十年代に教材として使用され、浮橋康彦「佐多稲子『水』—研究授業を通しての教材研究—」(昭和四十二年)や、菅野圭昭「佐多稲子『水』の教材化をめぐる—教材研究と本文批評—」(昭和五十四年)などの研究論文もあった。平成二十八年年度大学入試センター試験で、稲子の他の短編「三等車」の全文が出題されたということもあった。

稲子の「水」には、メタファーがある。「幾代の涙」と「水道の水」であり、他にもある。幾代の出身地、越中釜ヶ淵は、水の豊かな土地、山紫水明の地である富山県にあり、中でも霊峰立山連峰に近い現在の立山町である。そして、就職先の神田小川町は、関東大震災後、昭和二十二年神田小川町となった場所で、このあたりに、

「小川の清水」という池があった、もしくは、清らかな小川が流れていたともいわれている、大都会東京の真ん中である。冒頭幾代の涙と出身地、郷里、腰の曲がった母親を湯治に出したいという幾代の夢、さらに幾代の日々の仕事、皿洗いのため常に触れている水道の蛇口の栓を自らが開けることによって出てくる水、最後の、幾代が無意識に閉める水道の蛇口の栓から勢いよく出た水、すべて関連づけられている〈水〉といえよう。また、「水」では、幾代にとつての母はまさに大地で彼女の根源であり、最後の、展（ひら）けた景色も大地、先に述べたさまざまな形で表されている水、灰色のスカートが表す心の色も灰色だがそのようなことはおかまいなしに「空にはうらうらとした春の陽ざしがあった」。「ハハキトク スグカヘレ」「ハハシンダ、カヘルカ」と緊急定文電報が続げざまに稲子の元へと届く。二通目の電報で急いだ上野駅では、自分がすぐにでも乗りたくても故郷の富山へ向けては走らない列車がホームにどつしりと陣取り、多くの人々が奇異な目をしゃがんで泣いている幾代へと送る格好の場となっている。上野駅を出発する際起こる列車とレールとの摩擦からの火花と、「火・水・空

気・地」と四大元素とも読める。「春の陽ざし」と列車にさえぎられて、幾代のしゃがみこんでいる上野駅のホームの「駅員詰所との間の狭い場所は蔭になつてい」て、陽と陰も描かれていると言えないだろうか。

稲子にとつての水とは、何であろうか。一家が上京して住んだ家は隅田川の近くにあり、稲子自身が勤め先のキヤラメル工場の往復に、電車賃がなく歩くこともあった。稲子が、窪川鶴次郎と結婚し、自宅の場所を決める際、夫婦にとつて重要なことは、工場があり、労働者が住んで、そして、水がよいところであった。

ここで、稲子のデビュー作（昭和三年）でプロレタリア作家としての道を歩み始めた『キヤラメル工場（こうば）』から、水に関する表現を挙げてみる。キヤラメル工場で働く女工らは、キヤラメルの仕事が途絶えると化粧液の曇洗いをさせられた。湯ではなく水で洗わなければならない場面である。

少し水の外に手を出しているとぴりぴり痛んで見る
見るヒビが切れた。すると彼女たちはあわててその
手を水の中へつつこんだ。



① 東京・大森駅前八景坂「馬込文士村の住人」のレリーフ（大田区立郷土博物館、同資料展示室には、佐多稲子の直筆草稿「北陸の空と海」がある）
（平成30年4月13日撮影）



② ①と同所（同日）
佐多稲子、後ろに吉屋信子

黙りこくって壘を洗っているひろ子の鼻先からはなみだが落ちてきた。一〇。

女工たちが壘を冷たい水ではなく、湯で洗いたいと願っている。女工頭がその交渉にいつている間のことである。冷たい水は厭なはずなのに、手を少しでも外へ出すとヒビが切れる。そこで、その冷たい水へと手をとっさに入れるのである。へ水で救われるのである。何とも心が痛み、読んでいるのも辛い表現である。

四：灰色、春の陽―感情表現をふまえて

次に、本作での感情表現をみていきたい。感情とは、主に「喜怒哀楽」の四分説である。ここでは、佐多稲子の小説においてだが、それらには分類できない、語句のみならず、文レベルで感情が表現されていることは多々ある。まず、窪川稲子名を含んでの主な作品のタイトルをみてみると、『キャラメル工場から』、『くれなゐ』、『素足の娘』、『私の東京地図』、『灰色の午後』、『女の宿』、『樹影』、『時に佇（た）つ』、『夏の葉』、『年譜の行間』などのように比較的短く、難解な語や想像が及ばない語は含まれていない。もちろん、稲子がいともタイトルをつけているとは限らない。その点、本稿で取り上げている「水」はシンプルでつい、水に感情などをつけて長くしそうなものだがそうはしていない。このシンプルなことは、我々の身近な水についての作品だと、読者へ容易にその世界へと入って行けることを印象づける。

「水」は冒頭から出てくる「しゃがんで泣いていた。」「幾代は自分の膝の上で泣いていた。」など、「泣く」という表現が最初の段落で既に三箇所あり、幾代という泣

いている少女を強調している。それ以外にも最初の段落では、暗い、冷たい、地味な表現で埋めつくされている。「列車の鋼鉄の壁面」、「列車にさえぎられて、詰所との間の狭い場所は蔭になっていた」「グリーンのセーターに灰色のスカートをはいて」というふうにある。そのような中で、唯一明るく暖かい表現は、「正午を過ぎたばかりで、空にはうらうらとした春の陽ざしがあつたが、」という箇所である。次の段落では「涙はとまらず」「涙を拭いていた」と、「哀」の表現が続き、読者をも哀しみが連続する予感へと引き込んでゆく。

さてここから、「水」において、喜怒哀楽では分類できない感情表現を挙げていきたいのだが参照として、時枝誠記等に師事し、表現分野の研究者である中村明の『感情表現辞典』（六興出版 昭和五十六年）を参照したい。「①喜②怒③哀④怖⑤恥⑥好⑦厭⑧昂⑨安⑩驚⑪複合」と詳細に分類しているのでこれを元に、「水」で用いられている幾代、主人・妻、母親の感情表現を各立場から見てそのまま抜き出し、稲子の表現力を観察したい。

①喜・・・母親のたのしいおもしろい出話

②怒・・・母親はまだおこっているような調子、聞いて

③哀・・・しゃがんで泣いていた、涙はとまらず、涙を

いたけれど反応さえ見せなかった、

拭いていた、自分ひとり打ちひしがれた悲哀にしていることをそのまま受け入れて、とどめようもなくあふれ出る涙、幾代の身体をあわれむように見まわした。胸の中で母親を呼んでいた、幾代は優しい微笑みを浮かべているだけだった、(母親の)しのび泣き、苦労の悲しみ、母親はふびんがって、幾代の左脚が短いことを自分のせいのように謝ることがあった、いきなり大声でわめいて、あけすけな評言は、自分の悲しみをひそめた身体の中までずけずけと踏み込まれるようにしか聞けなかった、細い、しぼるような泣き声を上げて突っ伏した、唯一の安心の場所が無くなることだった、幾代の身体の悲しき、母親の罪のために幾代が悲しみを背負っているのかもしれない、哀れみ、可哀想、劇しい悲哀、悲哀を深くしていた、完全にひとりになる、ひとりで背負ってゆく、その騒がしさは無関係だった

④怖・・・頼りなくまずしいことにちがいがなかった、瞳

孔のひらいてゆくような不安な表情をした、主人の疑いは大勢の使用人との関係で身についた警戒、背をこごめ、はやし立てられた、あけすけなほめ言葉までつけ足した

⑤恥・・・恥ずかしい、幾代の方が恥ずかしくなつて

⑦厭・・・主人は狡猾に目を働かせた、不人情を言葉の上で瞞着しながら、半ば威圧を加えてまざまざと不機嫌になった。払いのけられたことが口惜しくて意地になつて「いやだつてば。」母親は真剣な声を立て身ぶるいして、重い足、悲しみを運んでそこまで歩いてきた

⑧昂・・・泣く、涙

⑨安・・・幾代は満足していた、安心

⑩驚・・・驚く

⑪複合・・・「次の電報を待つんだね。ほんとに危篤なら、今から帰つたつて富山までじゃ、間に合やしないよ。」「はい。」そう答えるしかなかった幾代、負けてしまった自分の弱さ、敗北のまき添えにした口惜しさ、それは無意識に行われ

ただけであつた、唇を噛んで涙を浮かべた

このようにしてみると、「⑥好」はまったくなく、「喜・怒・恥・昂・驚」もほとんど出てこない。いかに、この作品が、「哀・怖・厭・その複合的」な感情表現で覆いつくされているかがわかる。幾代は、「明るいとはいえないにしろ、素直、どこかに負けん気をひそめていて、それが素直さにもなり、身体の引け目を見せぬ働きものにもするらしかった」とあり、これはまるで稲子自身を物語っているようである。そして、幾代にとつて母親の深く大きな存在に、逝つたあとで気づいた。「兄や姉の前にさえ、勝気にふるまう意識の操作」をしていた幾代は、「母親に対してだけは感ぜずにすんだ。」のだった。

次に、「春の陽があたつた。」という表現について考察したい。稲子は、『国文学解釈と鑑賞』の「この人にきく」という特集において、渡邊澄子と鈴木康之との鼎談において、「水」における表現性について、最後の「その場所に、さえぎるものがなくなつて春の陽があたつた。」という結末について語っている。

そうそう、そう。これを私が、この、幾代に対して春の陽を当ててやりたくて、意図的に書いたんじゃないかという解釈があるわけなんです。(中略)

私、別にそういうことはないのですよ、それは深読みなよ。二

再度、『キャラメル工場』から、「陽」について描かれている場面をみたい。女工たちの仕事室は、終日陽が当らなかった。窓から見える家の屋根には広告板立てがあり、その広告板には一日中陽が当たっていた。「その陽の光は幸福そうであった。二三」と書いている。陽への憧憬、自分たちがいる場へは当たってくれない寂しさがある。

ところで、先に紹介した富山の方言は、微妙なニュアンスを表すのに、カタカナを使用し、抑揚についても説明がされるなど、その土地で使われていることばをしっかりとらえ、登場人物らは地方の者であることが強調されている。稲子には、ことばに対する敏感さがあり、テンポがあり、ことばが特段難解でなくても洗練されている。「グリーンンのセーターと灰色のスカート」グリーンとグレーではないかと言えるが、ここに、稲子の独特の表

現のよさ、リズムが表れ、グレーでは平凡で効果がない、読者へ読みやすさからにしても響かないのである。灰色は灰のような色合い、黒・白とともに無彩色で、赤・青・黄の三原色の色料を混ぜ合わせた時、暗い灰色が出来る。他の何色とも合わせられない。落ち着きがあると言えるが、感情を表に出さない、無難、あいまい、ぼんやりとした感じである。幾代を市井の一少女として表すのにこうした色は最適で稲子は使っている。グリーンは、緑の色、自然の色で安定、平和の色であり、堅いイメージがある。稲子の作品には、灰色ということばはたびたび登場する。『夏の栞―中野重治をおくる―』では、親不知の様子を次のように書いている。

その日の北陸の海は、曇り空ながら和いでいた。(中略) 空と海は合して灰色に深く沈みながら茫漠とひろがり、波は高く渚に打ち当たって飛沫を上げていた。三

その他、稲子は五十六歳の時、自伝的な長編小説、「灰色の午後」を『群像』に連載した。窪川鶴次郎と田村俊子の恋愛関係が引き起こした、稲子に対する裏切りを、

五. 幾代の敗北

幾代の感情表現で次のような箇所がある。



③ 幾代の出身地設定の町・
越中釜ヶ淵 現在の釜ヶ淵駅
(大正 10 年開業)
(平成 30 年 4 月 8 日撮影)



④ 現在の釜ヶ淵駅 ホーム
富山地方鉄道立山線
富山県中新川郡立山町(同日)

川辺折江と惣吉夫婦として描いている。四十一歳で窪川と離婚し、窪川稲子から佐多稲子になった彼女にとつて、「灰色」とは、あきらめを意味する色、暗く心も沈むような色なのだが、身近に感じ、表現としても、最優先で必要な色彩であり、語感であり、もしかしたら用いることで安心感を得ようとしたのかもしれない。

昨日の電報のとき、主人に負けてしまった自分の弱さから、母親まで敗北のまき添えにしてしまったような口惜しさがあつて、幾代の悲哀を深くしていた。

「敗北」を広辞苑で引くと、「古くはハイホクとも。「北」は逃げる意 ①戦いにまけて逃げること。敗走。②転じて、争いに負けること。―を認める」と、書いてある。敗北と聞くと、「文学の敗北」と、芥川龍之介の文学を言った宮本顕治を思い浮かべる人もいるだろう。芥川が自ら命を絶つ三日前、稲子へ自分に会いに来るよう言い、突然、「あなたは、もう、もいちど死にたいとおもいませんか^{一四}」と問いかけた。稲子は、「脂くさいレストランの二階の女給部屋で、ひとりでむせび泣いた」のだった。自ら命を絶つことは敗北なのだろうか。例えば、命を絶つという行動自体の前に、自らが敗北だと認めたくなくて、自分自身に向けてだけ言えることばかもしれない。その行動自体は敗北とは別のもので承知した次の段階である。

幾代にとつて、腰の曲がった歳より老けて見える母は、自分らしくいられる唯一の存在であり、過酷で寂しく口

惜しい思いをしていた、旅館での下働きにも、「給料を貯めて、一度は母親を湯治に出したい」という夢があったからこそ、耐えていた。入善の紡績工場で働いている姉が母親を既に湯治に出していた。幾代は負けん気が強いので、自分も働けるようになったら、「今度は自分が湯治に出してやりたいとおもった」のだった。幾代の左脚が短いことを不憫に思い、自分のせいのように謝る母、小生だつた幾代をはやし立てる男の子たちに、大声でわめき小石を投げ、幾代の方が恥ずかしくなつてその場から走つて逃げたくらい驚く行動をとつた母、その母親を失い、旅館の主人夫婦が帰郷を許さなかつたことでは無い、優しく、お悔やみのことばをかけてくれなかつたことでもない、自分ですぐに帰ろうとしなかつた、できなかつた、優しい主人夫婦と勝手に思いこんでいた自分の甘さが情けなく、すべてに敗け、今その場からようやく逃げ出し、母の元へ急いでいるのである。幾代は、ことばはほとんど発せず、感情も終盤まで表さない。母が危篤の電報を受け取つても主人に「こんなものがきたんですけども」と、一切取り乱すことなく、相手に返事を委ねるように遠慮がちに伝え、主人の冷たい返事に対して

も「はい。」とすぐ引き下がることしかなかった。

稲子自身は生きている間ずっとたたかっていた。稲子は、「たたかい」と各作品の中で表していた。いつ、何とのそれかという、稲子が生まれた時から既に始まっていたもの、まず、彼女が自分自身ではどうしようもできない境遇とのたたかいであつた。学生同士だつた両親、生母の早世、実父の転職、転地。家は貧しく、学校で充分な教育も受けられなかつた。そのことを、稲子は幼い時から受け止めなければならなかつた、既に承知していたその「いつもどこか冷めた、すべてを受け入れている自分」とのたたかいでもあつた。稲子が言う。「自分の人生、将来はもう灰色にしか描けない。夢が持てなくなつていたんですね。」清凌亭で働いていた頃である。そして、その後、「出戻りで、子供があつて、自殺未遂という恥しいこともやつてのけて、世間から言われる悪いこと、全部しちやつたんですもの。(中略)それならこれからは自分の思うように生きよう。世間の目に縛られまいと思つた。」稲子は、二十八歳頃、日本プロレタリア文盟の機関誌の編集や、小林多喜二、宮本顕治らと連絡を取りあつた。日本共産党へ入党した。昭和十年に「働く女性」の

編集に関わったと起訴され、懲役二年執行猶予三年の判決が下りた。その後、四十七歳のとき日本共産党から除名処分を受けた。

稲子は、片山廣子が、「芥川さんはご自分だけではなく、ご自分の死によってまわりの人たちまで一緒に死なしておしまいになりました」といつていたことを聞いている。「自らの敗北は認めたくなくて、自分の母親までその敗北のまき添えにしてしまった、あくまでも幾代の口惜しさによって、悲哀が深くなった」のである。

稲子が、『くれない』で描いた、夫・窪川鶴次郎が稲子の友人・田村俊子と恋愛関係に陥り、裏切った事件についてのことばを紹介する。

あたし自身を含めて、夫婦に起こる問題は夫婦が負うべきものだという意味で、お互いの人生の敗北だと思ってしまう。その敗北は、その後あたしの生活に波及していく。(中略) 頹廢が頹廢を生んでいく。そういう意味で人生的な敗北だと思えます。一五

六：幾代の無意識の行動

稲子の表現力は、言語学的にみても非常に巧みで、リズム良く、独特の表現で、例えば会話はまだで読者の目の前で交わされているようである。「水」では、確かに終盤がクライマックスなのだが、上野駅のホームで、「幾代がしゃがんで泣き続けている」という現象は起こってはいるが、その他に駅での一般的な風景以外、何も見られない、起こらない。行きかう多くの人々がいるにもかかわらず、水道の栓を閉める者はおろか、泣いている幾代に声をかける人はおらず、駅員ですらない。この「水」という作品は、主人公の発言はほとんどない。静かに流れてゆく中で、読者が各々感じることに委ねている。

ここで、作品の終盤、幾代が、「水道のそばを通り抜ければ、蛇口の栓を閉め」た結果、「音を立てて落ちていた水が止まった。が、(中略)それは無意識に行われただけであった。」という一文に注目してみよう。幾代のこの条件反射的な行動には、日頃から皿洗いという水を使いながらの仕事で身近なもの、水道の蛇口は仕事が終われば栓を閉めるものだという習性がしみついでいて、そ

れがこのように泣きじゃくっている間にも、哀しいかな、無意識の行動として出てしまう。そして、読者の涙を誘う場面である。雑踏の中で、水の落ちる音は幾代には聞こえてはいないだろう、視覚でとらえたということになり、栓を閉めた。しかし、実母の死を聞いて即、実家へ帰れない、乗るはずの列車が来るのにはまだ一時間もあつた。母を思いながら泣いているのに、果たして、水道の蛇口からまつすぐ流れている出しっぱなしの水が目に入り、通りがけに蛇口をひねって水を止め、また元の場所へ戻って、泣き続けるであろうか。この一連の行動を作者は、無意識のうちに行われたという。結局、その時点で即座に東京を離れることができず、そばに兄や姉がいて哀しみを分け合うこともできない、しゃがみこんで泣くしかない無力な自分自身をもてあまし、ただ泣き続けていたのである。もう一度と会えない母を想う涙の中に、危篤の際に自ら帰郷を言い出せなかった悔恨、口惜しさ、自分への腹立たしさ、幾代の敗北だったのである。

七. 佐多稲子と富山県との関わり

さて、稲子と富山県との関わりをもう少しみたい。

稲子は、富山へ来県し四十七歳、昭和三十四年十一月八日に、壺井栄、原泉、芝木好子と立山へ登り、「私もすぐそばで立山を見た、という満足感は、その立山が大きく美しく連なって私に迫っていた。」^{一六}と表現している。また、四十九歳の時には、富山県砺波市と入善町にある呉羽紡績工場を厚木たかと訪れている。また、東京・戸塚町での生活では、高岡市出身の版画家、南桂子との交流もあり、昭和三十六年、アジア・アフリカ作家会議が東京・大阪で開催された大会で、日本代表の副団長として出席している。現・高岡市出身の堀田善衛もアジア・アフリカ作家会議第五回大会へ参加している。この第五回会議の件で、稲子宛、国分一太郎から昭和四十八年九月二十四日書簡が来ている。このようなことから、富山県ゆかりの女性作家として、佐多稲子は取り上げられる機会があつてもよいだろう。室生犀星『黄金の針』で、稲子は平地文子や吉屋信子、森茉莉らとともに評されている。犀星は、稲子とは「三十年のあひだに、三四度く

らみしか會つてゐない。「七」としながら、「稲子さんのやさしさは近代風であつて日の當つてゐるように明るいのが特徴である。」など詳細に書かれている。

平成三十年四月、元・富山県立入善高等学校の校長であつた霜野仁一が他界した。霜野は、稲子と入善町で会い、昭和三十四年、東京の稲子の自宅も訪ねている。^{一八}稲子は、呉羽紡績の招待で、昭和二十八年、富山県入善町の呉羽紡績工場を実際訪れている。この取材を元に、『機械の中の青春』を書き上げた。霜野は、入善高等学校の文芸クラブで生徒を指導し、会誌「峠」の編集をし、佐多稲子にクラブ員を激励する寄稿を依頼した。若い教師の熱意を感じた佐多さんは生徒を励ますメッセージを「峠」に寄せた。さらに、富山県との関わりとして、南桂子が挙げられる。稲子が海外旅行中、ロンドンから、軽井沢の稲子の別荘にいた田島よつ宛に出した書簡には、「八日にパリからロンドンへきました。南桂子さんや宇佐美さんのお嬢さんといつもいっしょでした……。」「^{一九}とある。南桂子（一九一〇〜二〇〇四）は、現在の富山県高岡市生まれの版画家で、戦後、日本を代表する銅版画家として知られる。祖母・節子は高峰譲吉の妹である。

南は、最初の結婚のち離婚して上京、稲子の紹介で壺井栄に会い、童話を学んだ。のちパリへ渡り、銅版画を始めた。二番目の夫は版画家の浜口陽三である。谷川俊太郎や朝吹登吹子、福永武彦へも挿絵・挿画を手掛けた。このように、富山県の芸術人とも稲子は関係がある。

八・おわりに

以上のようにみてきたとおり、「水」では、幾代と母親の強く深い絆、幾代の敗北に母をもまき添えにしてしまった口惜しさがあつたという点に着目しなければならないだろう。稲子が繰り返す「敗北」「灰色」「陽ざし」について考え、幾代の「哀・怖・厭」という感情表現に注目した。幾代が水道の蛇口の栓を閉めた無意識の行動とは別の観点である。「水」では、稲子の幾代へ向けている優しいまなざしは根底にはあるとは言えるが、「春の陽があたる」という現象は、「水は当てなしに流れつづけていた。」と作者が描いているように、水道の蛇口からまっすぐに落ちる水は、何ものかによって栓を閉められたり、流れを遮られたりしなければ下へいつまでも流れ続ける

ものであるという現象と同様、普遍的なものとして描いている。解釈を讀者に委ねている。稲子が幾代を応援しているように強く明るく感じている讀者もいるであろう。だが、陽ざしは、必ずしも主人公のこれからの道を温かく見守っているというわけではなく、水道の蛇口から出る水と同様、ありのままの現象として描かれている。決して、激励しているとのみにはとらえられないことが、稲子自身のことばからもわかった。幾代の前途は、母の死後、心の支えと目的を同時に失った状況の中で、困難な道のりが待っていることは想像に難くない。しかし、それも幾代の運命ならば、彼女自身が受け入れ、考えながら生きていくのみであろう。そのような強さを稲子は、幾代の中に見ているのだろう。稲子自身が、繰り返し経験してきた困難に、自身で打ち勝ったように、である。

「春の陽ざし」の代わりに、「白雨」や「涙雨」のようなしらじらしい表現語句をもし用いていれば、作品の完成度は落ちていたであろう。

本作で「ズックの鞆、パーマネント、ガーゼのハンカチ」など、冒頭から時代を表しながらもカナでおしゃれな文字が並ぶ。『キャラメル工場』では、女工頭の妹に生

意気だと言われ、いじめられた主人公・ひろ子の「マン ト」が出てくる。稲子の母親が、小学校に入る前の稲子に、揃えてくれたハイカラな品物、ラシャのマントである。このようなハイカラな装いが作品にもたびたび形を変えて登場してくる。稲子は、赤という色が好きだった。特に、牡丹色、心の底に沈んでいる色が好きだった。色彩に敏感な稲子には、一つだけ好きなブランドがあった。著名な映画監督であった、長男の窪川健造（一九三〇—二〇一五）が三十六歳、稲子が六十二歳の時、一緒に、ヨーロッパ旅行をした際、義母よつへの土産にシヨールをと、「母にもたった一つのブランド漁りがあった。」とし、「ロンドン出立間際になってまでイエーガー本店でのショッピングに拘泥したのであった。」^{二〇}と語っている。イエーガー JAEGERとは、英国の紳士・婦人衣料品の高級ブランドである。もともと稲子は「エガー」と発音したと健造が振り返っている。

余談になるが、筆者が佐多稲子を少しだけ身近に感じられる理由として、稲子が好きなイエーガー、筆者は、イエーガーの日本総代理店で勤めた経験があり、また、筆者の祖母方の縁戚に、呉羽紡績で役員をしていた者が



⑤ 佐多稲子文学碑
相生市那波南本町中央公園内
(平成30年11月21日撮影)



⑥ 佐多稲子文学碑
『素足の娘』より(同日)

いた。稲子が実際工場を訪れて作品を書いてくれたなどと、随分一方的な思いはさておき、何より、作品に精いつばいあふれる、表現豊かで言語学的才能のある稲子の短編には特に惹かれる。チェーホフとモーパッサンを愛し、両者の墓参りもしたという稲子、百十五年前に生を受け、描いた多くの作品は、現代の人や人生においても、強く心に響く秀逸なものとして貴重である。佐多稲子は、富山県出身の小寺菊子、尾竹紅吉(富本一枝)、そして窪川鶴次郎、中野重治、室生犀星、芥川龍之介、菊池寛、久米正雄、堀辰雄、宮本百合子、円地文子らなどとも関連しながら、今後も幅広く研究できるであろう。

注

- 一 佐多稲子『年譜の行間』中央公論社 一九八六年六月十日 七十九頁
- 二 講談社文芸文庫編『個人全集月報集』佐多稲子全集 講談社 二〇一四年八月八日 五十一頁
- 三 立野幸雄『越中文学の情景』桂書房 二〇一三年一〇月一日 五十四〜五十六頁
- 四 佐多稲子『年譜の行間』中央公論社 一九八六年六月十日 十六頁
- 五 金田一春彦『日本語』新版(上) 岩波書店 一九八八年六月六日 二五九頁
- 六 北日本新聞ウェブ 近代史研究会・竹島慎二「とやま地名のはなし」二二五 釜ヶ淵(かまがふち立山) 二〇一八年三月十日閲覧 <http://webun.jp/item/7371829> 医者之家に泊まった武士が医者を殺害し、釜を川の流れが深くよんでいる淵へ投げ捨てたところ、淵の底から亡くなった娘たちの泣き声が聞こえるようになり、釜ヶ淵と呼ぶようになった。稲子は来県時に聞いたか。
- 七 金田一春彦『日本語』新版(上) 岩波書店 一九八八年六月六日 五十九頁
- 八 磯田光一「評伝的解説 佐多稲子『現代日本の文学』二十五 円地文子 佐多稲子集」学習研究社 一九七五年十月一日 四七八頁
- 九 坂上弘「解説 佐多稲子『女の宿 佐多稲子短編集』旺文社

- 一九七六年七月二十日 一九八頁
- 一〇 「キャラメル工場から」『現代日本の文学』二十五 円地文子
佐多稲子集』学習研究社 一九七五年十月一日 二五七頁
- 一一 「文学のことばを語る」『国文学 解釈と鑑賞』第五三巻七号
至文堂 一九八八年七月一日 六十七～七十六頁
- 一二 「キャラメル工場から」『現代日本の文学』二十五 円地文子
佐多稲子集』学習研究社 一九七五年十月一日 二五五頁
- 一三 佐多稲子『夏の葉―中野重治をおくる―』新潮社
一九八九年六月二十五日 一八二～一八二頁
- 一四 佐多稲子「私の東京地図」『作家の自伝』三十四 佐多稲子』
二〇〇二年十一月二十五日 日本図書センター 一八五頁
- 一五 佐多稲子『年譜の行間』中央公論社 一九八六年六月十日
二二二～二三三頁
- 一六 佐多稲子『女の道づれ』講談社 一九六六年五月十日 一九四頁
- 一七 室生犀星『黄金の針 女流評傳』中央公論社
一九六一年四月五日 五十六頁
- 一八 北日本新聞「記事十五面「わたしと越中文学」①霜野仁一
「佐多稲子と『水』」二〇〇八年十月一日
- 一九 日本近代文学館編『文学者の手紙七佐多稲子』博文館新社
二〇〇六年四月二十八日 八十二～八十三頁
- 二〇 窪川健造「三つの喜び」佐多稲子研究会編『凜として立つ』
青柿社 二〇一三年八月二十三日 百三十五頁

【付記】本稿での「水」の引用は、『佐多稲子全集』

第十二巻 講談社一九七八年十一月二十日に拠った。

※相生市立歴史民俗資料館文化財専門員の中濱久喜氏には、同館展示の佐多稲子資料についてのご解説、刊行物のご惠贈、文学碑のご案内等ご協力いただいた。また、佐賀市在住の八田千恵子氏には、『草茫茫通信』十二号「凝視の先に―佐多稲子の文学―」を、すみだ郷土文化資料館からは、たより「みやこどり」第二十号「生誕百年すみだゆかりの文学者」をご惠贈いただいた。ここに御礼申し上げます。

【参考文献】

- ・小林裕子編『人物書誌大系二十八 佐多稲子』日外アソシエーツ 一九九四年六月二十五日
- ・小林裕子『佐多稲子―体験と時間』翰林書房 一九九七年五月二十日
- ・佐多稲子研究会編・発行『くれない』第九号 追悼号 一九九九年十月二十日
- ・『草茫茫通信』十二号「凝視の先に―佐多稲子の文学―」 二〇一八年六月二十九日 書肆草茫茫 八田千恵子

黒部ダムをめぐる作品群

—吉村昭「水の葬列」と「高熱隧道」、そして木本正次「黒部の太陽」

高熊 哲也

1

吉村昭の「高熱隧道」(新潮社)と「水の葬列」(展望)は同じ一九六七年に発表されているが、「水の葬列」の元となった「墳墓の谷」の執筆が一九六二年に遡るので、作品の構想自体は後者が先であった。「水の葬列」執筆の経緯について、吉村は自伝的に自分の文学半生を綴った「私の文学漂流」で

ともかく原稿用紙に万年筆を動かしていなくてはならぬ、と考へ、二年半前に同人雑誌の「文学者に発表した『墳墓の谷』という二百七十枚の小説を、新ためて第一行から書き直すことに手をつけた。

それは、ダムの湖底に沈む落人の村を想定した小説であった。

勤めを辞めていた頃、その小説を書くために、わたしはダム工事現場を歩いてまわった。岐阜県白川郷では、傾斜の鋭い萱ぶきの大きな民家を見、その近くで進められているダム建設工事現場を見て歩いた。さらに妻の従兄が越冬隊長をしている黒部第四発電所の工事現場にも行って、宿舎で一週間ほどすごし、また、ダム工事の技術書も読みあさった。

それによって一応の知識を得て、かなりの日数を費やして、その小説を書き、「文学者」に発表した。それは『少女架刑』に類するものと『鉄橋』にあると言われる社会性との、自然な混淆を果たしたという愛着があった。

と、述べている。いくつかの重要な内容が含まれている。

まず、「水の葬列」では、妻を殺害した男が世間の目から逃れるように、k4ダムの工事現場を訪れるという設定だが、作品のモチーフとして黒部第四ダム工事現場そのもののみならず、岐阜県の白川郷の合掌造りとおぼしき集落が用いられている点である。掘り起こした墓から

拾った骨を白木の箱に入れ、自分たちの集落に火をかけ、さらに奥山に自分たちの転地先を求めていく落人の村は、ダム建設によって湖底に沈む実在の部落をモデルにはしていないらしいのである。実際黒部川上流には、山小屋などは点在しており、実際に湖底に沈んだものもあるようだが、人が定住するような村落は存在しなかった。このことは「水の葬列」が、黒四ダムがk4ダムと臚化されていることと合わせて、後述する「高熱隧道」が緻密な事実調査に基づいて執筆されているのとは対照的に、黒部のダムを舞台に取りながらも、歴史事象の中に人間の在りようを求める作品ではないことの傍証となることを意味する。作品世界は先に引いたように『少女架刑』に類する」もので、人の死と骨を描くことで、人間の実存的なあり方を追求する作品に位置付けられるものであった。一方吉村が作品に「社会性」を織り込もうとする兆しも見え、作風の転機に差し掛かっていたことをも物語る。

「墳墓の谷」を「水の葬列」に改稿する時期は、作家吉村昭にとつて文学活動を続けられるかどうかの岐路にあったと言つてよい。「ともかく原稿用紙に万年筆を動か

してはならぬ。」という言葉はその切迫した状況を回想しているものである。一九五九年から一九六二年にかけて、引用にある「鉄橋」ほか「貝殻」「透明標本」「石の微笑」と四度にわたつて芥川賞にノミネートされたが受賞に至らず、一方吉村の妻津村節子が一九六五年に「玩具」で芥川賞を受賞することになる。もちろん賞の受賞のみが作家を価値づけるわけではないが、自分の営為がなかなか認められない焦りも生むだろうし、受賞が職業作家として立つ契機となり、経済面での安定をもたらすという側面もある。事実吉村は、生活を支えるため家業である綿業を継いだ兄の会社で働きながら、文筆で立つべくかなり無理のある日々を送つてもいた。妻の芥川賞を機に、吉村が兄の会社を辞し、不転の決意で職業作家としての独立を目指したのは一九六五年のこと。翌一九六六年によりやく「戦艦武蔵」が世に出ることになる。「水の葬列」はその狭間を縫つて執筆された。

「水の葬列」の社会性をどこに求めるかは微妙な問題である。自分が社会的には犯罪経歴を持つ存在であるゆえに、社会から隔絶されたような山奥のダム工事現場に身を潜める主人公は、過去に向き合いながらいかに生き

ていくか、何も見い出せず漠とした状態にある。妻が不義を犯したのを許せなかった男は、その思いを整理しきれず、毆殺した妻の足指の骨粒を持ち歩いている。主人公「私」自身の幼少時の思い出を振り返りつつ、自分の中にある残忍性を自覚し、骨を持ち歩くことで「妻の死体を冒瀆しているような快感」に浸りながらも、「妻を毆殺した過去を持つ私には、無機物のような生き方しか残されていないのだとしきりと胸の中で反芻」し続けている。「私」が描かれる。その主人公の心に揺れをもたらすのが、やはり「骨」である。一つは工事現場の同僚にレイプされて自ら縊死した娘の遺骸が、そのまま放置されて骨になっていく姿。汚されたものを受け入れないという部落の掟があるらしく描かれる。もう一つはダム底に沈む自らの部落の墓地を暴き、白木の箱に詰めて転地へ持つていくさまである。前者を主人公が穴を掘って埋めてやることで、部落の中でその死が認められ、後者の白木の箱の一つとして運び去られることになる。

「私」が娘を悼み、晒された遺骸を土に戻してやる行為の動機として、枝から崩れるように膝を折った姿が許しを請うように印象され、自分の妻に重ねてとらえられ

たことをあげることができず。娘は自らの意思に反する形で汚されたのであり、妻のように自ら他の男に身を委ねたのではない。しかし汚されたことそれ自体が部落という社会には受け入れられなかった。その娘が縊死した姿のまま放置されることに、かえって痛ましい思いを「私」が抱いたという解き方が可能であろう。「娘の姿勢は、十分に罪を償っている。苔におおわれ、切々と許しを乞いつづけている姿勢。もし妻が、あのような姿勢をとっていたら、今の私は、妻を許さないわけにはいかない」と主人公は感じている。

「骨」は死や滅びの象徴であると同時に、人が生きて証を立てるものでもある。骨を見つめる「私」に憎悪ややすらぎやいやしといった感情をもたらしもする。それはあくまで個人の胸の奥の揺らぎにとどまるものである。しかし、そこに水没する部落を重ねていくと、重層的な作品の構造が浮かび上がる。個体としての人の死は滅びと見る他はないが、残されたものは葬送という営みで個々の心に何らかの決着を図る。縊死した娘は「私」の個人的な埋葬が契機となり、部落での葬送が執り行われ、再び共同体に迎えられることとなった。葬送はいわば人

の死を社会化する儀式として働いたわけである。さらにこの部落は、ダム建設Ⅱ電源開発という近代産業化の進展の波にさらされ、わずかな立ち退き料と引き換えにダムの底に水没していくことが描かれる。部落としての滅びである。部落の人々はその流れに背を背け奥山に落ちていき、自分たちが共同体として暮らした証は、白木の箱に詰めて運ばれるところの、墓から掘り返された骨に他ならない。さらに部落の人々は、建物に火をかけても燃え移らないようにする「自然に対する注意深さ」を持つて部落を後にする。自然に抱かれた共同体の営みを永遠に続けることを望む人々が、近代社会に背を向けた形である。このあたりが、冒頭引用した「私の文学漂流」で振り返られている、実存的な主題と社会性の混淆に関わると思われる。

もう一点指摘しておくべきは、この「水の葬列」の執筆のための取材活動で、吉村が黒部第四発電所の工事現場を訪れていることである。もちろん「水の葬列」の取材のためではあったのだろうが、黒部第四発電所は、仙人谷ダムの資材運搬トンネル（黒部川上部軌道）に接続しており、後述する「高熱隧道」の着想の原点になった

ことは間違いない。

2

立野幸雄は「水の葬列」と「高熱隧道」の関係について以下のように述べている。

「水の葬列」は「死（生）」をテーマとして、身辺的な「死」に関わる事実を想像で膨らまし、小説中に「虚構」を築こうとした。だがそれが余りにも現実離れしているので、読者はそれを幻想的として虚構小説と見なした。また、「高熱隧道」は、「死」を根底とした「戦争（戦時下）に必死に生きた人々の姿」をテーマとして、取材での証言と資料（事実）を厳選し、再構成して、その取捨選択と再構成を「虚構」の構築とした。そして読者は資料（事実）の多さと、その資料（事実）を厳選し、再構成して、その取捨選択と再構成を「虚構」の構築とした。そして、読者は資料（事実）の多さと、その資料（事実）の事件性に目を奪われ、事件報告のような記録小説と見なした。（中略）「戦艦武蔵」執筆を境にして、吉村は身

辺の体験を机上で膨らます作家から、日本全国を取材し、多くの証言者の言葉を通して事実を追究する作家に変わりました。――

吉村の作家としてのありようの変化、あるいは成長を捉えた見解である。「戦艦武蔵」は日本工房から出版されていた「プロモート」の編集人であった山下三郎との縁で、「星の王子様」の翻訳で知られる仏文学者内藤濯の子息内藤初穂との出会いから出発している。日本工房に保管されていた戦艦武蔵の建造日誌を材料に小説を書くよう勧められたという。その間の事情は先に引いた「私の文学漂流」に詳しい。吉村は、戦艦武蔵の取材を進めるうちに「武蔵」の建造日誌から立ち上る熱気「私が少年時代に感じた戦時の煮えたぎっているような空気を」を感じ「私の見た戦争を書いてみようという気持」があったのだろうか、と振り返っている。吉村は戦時中、軍部の戦争遂行方針に疑いを抱くような姿勢を持たなかった。自分が結核であるために、国民の一人として戦争に直接関与するような行動を取ることができなかったことに、むしろ忸怩たる思いを抱いていたかもしれない。――終戦

を挟んで父母を相次いで失い、自身も戦後左胸の肋骨を5本切除するような大手術を受けて、かろうじて肉体の滅びと「骨」を結びつけた死生観を戦後の文学営為の出发点においたことが、「水の葬列」のような作品を生み出しもしたのである。

現代の視点から政治・経済状況を分析し、軍部の台頭と国体思想を柱に戦争にむかう日本の姿を捉えることは、もちろん重要な学術的な営みである。一方、戦争の熱に浮かされていた国民たちの実相は実相として存在した。まして吉村はそれに直接的な行動者として参加することがかなわない状況にあった。「熱気」「煮えたぎっている空気」という回想は、戦争を肯定する姿勢云々ということとは全く無縁である。進行する事実を見つめる眼を持つこと、そしてその事実の見え方は自分の立ち位置によって当然変化するものだという意識を、自らの戦後の文学営為につなげることへの意思の現れたと捉えたい。「戦艦武蔵」を挟んで、「水の葬列」から「高熱隧道」への作風の変化は、事実把握の相対性を踏まえた上で、自分の主題を作品化する方法の確立ということになる。

吉村はその事実の見え方・相対性を、文学作品の評価

という面からも、深く認識することになる。先に触れた作家活動の危機ということとも関連がある。「水の葬列」の評価をめぐって、

朝日の文芸時評を今月から担当した大岡昇平は、小説の後半がリアリティーを欠くと言ひ、『作者の知性を疑う』とまで言っているのに対し、毎日の平野謙は、これを今月の第一等の作品と推し、本多秋五も本紙（東京新聞・引用者注）の文芸時評で『胸の琴線にふれる』としている。三

と評価が割れたことを振り返っている。同時代評が必ずしも適切な評価を下すとは限らないし、ましてや文芸作品に関する価値判断は、「個性によるもので、（異なりを見せるのは）当然のこと」ではある。事実の見え方はあくまで相対的なものであるということへの確信の深まりが、戦艦武蔵の建造記録とそれをもとにした多くの証言を材料に小説を書く方法に吉村を向かわせたとも考えられる。材料としての事実の見え方・相対性をどのように作品化していくかに力を注ぐ創作方法が要請されたとい

うことになる。またその結果生まれた作品が読者に享受される時にも、相対的な価値判断から毀誉褒貶が生じることを受容する姿勢も同時に育まれたと言えそうだ。同人雑誌への執筆を続けながら、合評会などで議論を戦わせた経験を積んだ吉村が、読者・受賞選考者の評価に一喜一憂したとは言わないまでも、自分の作品がどう映るかに意識的ではなかったはずはない。それを乗り越えてこの創作活動なのだという、一種開き直りとも言える境地に達したのである。このことは先の評価の割れに合わせて、吉村が同人雑誌「文學者」編集長をしていた時期に、自分が没にした作品が、総合雑誌の新人賞を受賞するエピソードを交えて書いていることもその傍証となると思われる。

3

さて、「高熱隧道」は「戦艦武蔵」とは違い、材料としたのは、文献や記録よりも工事現場にいた人たちへのインタビューが中心だった。「水の葬列」の取材のため黒四ダムを訪れたことがきっかけになったと先に述べたが、妻津

村節子の従兄の小町谷武司が勤務していた佐藤工業が、その工事を請け負っていたこともあって、当時の工事関係者への取材に結びついたことを吉村自身が述べている。^四

「高熱隧道」の舞台となったのは、黒部第三発電所を建設するために建造された仙人谷ダムの資材運搬用トンネルである。戦争遂行のために軍需物資を製造するため、電源開発が国策として進められ、一九三六年八月着工、一九四一年一月完工という突貫作業で、雪崩や爆発を伴う難工事のため、三〇〇人を越える工夫たちが犠牲となった。高熱隧道という名称は、黒部川上流の仙人谷から阿曾原谷までの軌道トンネルの掘削にあたって、摂氏一六〇度を超える高熱岩盤を掘り抜けたことに由来する。ダイナマイトの自然発火のおそれにおびえながら、岩にダイナマイトを詰める穴を掘る工夫に黒部川から引いた水をかけ、さらにそのホースを持つ工夫の後方からさらに放水するエピソードは、小説「高熱隧道」で広く世に知られることになった。現在は、黒部峡谷鉄道の樺平駅に設置された縦坑エレベータをのぼり、関西電力が運行する関西電力黒部専用鉄道が敷設されていて、途中その熱気を体験できる見学用のコースも用意されている。

トンネルの完成は、トンネルの貫通により、ダム建設のための資材を運び、ダムからの水路によって電力を得ることにその目標がある。仙人谷ダムの場合は国策としての戦争遂行のため、後述する黒部ダム（黒四）の場合には、戦後復興の家庭用、産業用の電力需要に応えるためと異なるのだが、いずれもその当時の技術の粋を集め、難工事を乗り切って、近代産業に寄与することになりはしない。従ってトンネルの貫通には、達成感と喜びが伴うはずであるが、「高熱隧道」では次のように描かれる。^五

交代の穿孔夫が、ズリ（爆破した岩石片）引用者注をかけたがった。鑿岩機の音が一瞬やんだが、また新たな轟音が起った。ズリの山からおりてきた穿孔夫は、二人とも仰向けに倒れた。

やがて、鑿岩機が不意にうつろな音に変わった。探り鑿のみの先端が、仙人谷側坑道の切端に突き抜けたのだ。

人夫たちは、号泣することも忘れたようにただ腰を落とし、荒く息をしているだけだった。

常に生命の危険に隣接しながらトンネルを掘る工夫た

ちは、この工事さえ終われば非人間的な環境から、一時でも解放されるはずなのである。そして貫通の日の夕刻、ダイナマイト紛失に気づいた工事の指揮者である根津（工事事務所長）は、藤平（第一工区工事課長）天知（日電工事監督主任）らとともに、工事現場を立ち去る。脳裏によぎるのは工事の犠牲になった工夫たちの無残な遺骸や、遺体に取りすがって泣き叫ぶ遺族たちの様子である。「死者の怨嗟」を感じながらトンネルを下り続ける三人を描くところで作品が終わる。やや唐突な印象を抱かせるラストシーンである。

「高熱隧道」の主題は、「死」をやりすぎし、突き上げるような人間の暗い情念・情動に身を任せる人間を描くことにある。工夫たちは高い賃金^六のために、命を賭して劣悪な労働環境に耐えるのであるが、目前の工事が進捗しないといつまでも苦難の日々が続く。従って技術者たちが苦境を乗り切るために思いつく、さまざまな技術的な工夫に半信半疑ながら従い、その成果があれば、すなわちその工夫の恩恵に与って、自分の安全が少しでも保たれ、仕事が楽になれば工事に従事する。しかし爆発や雪崩といった危機に直面すれば、もちろん工事の指揮者

たちにいらだち、憤りを胸に反抗心を抱く。一方指揮者たちは、そういった工夫たちの心情を察しながら、労働力を集約すべく工夫たちの制御を試みるのである。

根津が爆発でばらばらになった工夫たちの遺体を畳針で縫い合わせて遺族に引き渡す場面がある。藤平は根津が「遺体を抱く行為を、人夫たちに対する一種の「演技」からだと言いたかったのかもしれない。」と推測する。藤平の目には、トンネルを貫通させるために有効だと思えば、報償を出して掘進競争をおおりもするし、遺体処理を黙々と続けることで、工夫たちへの寄り添いを見せて、その反抗心や恨みを和らげもする根津の姿が「異様なもの」として映る。そして吉村は、その根津にも人目を忍んで世話する女とその子供たちの存在があり、トンネル掘削に伴う孤独をいやす時があることをさりげなく描き添える。根津が家庭的な暖かみや安寧な幸福を求めているとは言いがたい。根津がトンネル掘削以外に自分の働き場がないことを逆説的に示唆するものだと考える方が自然である。

戦争遂行という国策の陰で、トンネル貫通という（擬似）的な目的の達成のために身を投じ、坑道を掘り進む

以外にはない状況におかれた工夫たちや工事責任者たちの群像が浮かび上がる。〈疑似〉的とは、トンネル貫通はそれに携わる人間たちの達すべき目的ではあっても、なぜ自分がそこに身を投じるか、その実現によつて得られるものが何であるかが曖昧であるという意味である。工夫たちはましの多い賃金のみを、工事責任者たちは難工事を成し遂げた手柄をのみ求めたのではあるまい。自分にもたらされたある状況下において、目前の何事かに没入することでは、自分の存在のあり方を模索する他ない人間のあり方を吉村は描いたのだと考えられる。それは「水の葬列」で、娘を埋葬する男のありようや、部落を捨てて落ちていく村人たちの姿とも重なる。

この二作（「戦艦武蔵」と「高熱隧道」引用者注）を書いている時、事実というものにもたれることはせず、あくまでも小説を書かねばならぬという意識が絶えず働き、事実の取捨に専ら神経を使つた。そうした意味から、『星への旅』『水の葬列』に対する姿勢と一脈通じるものを感じていた。^七

吉村は「戦艦武蔵」を境に記録や証言を材料に事実立脚した作品を構築する方法を確立したが、事実の取捨選択や再構築を通して、そこに実存的な主題を盛り込んでいく文学姿勢は貫かれており、やはり虚構の物語を生成する小説家なのである。

4

「高熱隧道」における虚構（材料の取捨選択）に関して、どうしても避けて通れないのが、朝鮮人労働者の問題である。

難工事を支えた男たちが朝鮮から徴用されてきた人間である事実を明らかにすることは、この世紀の大事業を推進した人間ドラマに支障をきたすと吉村昭は考えた。吉村昭は「強靱な体力を駆使して遂にトンネル貫通を果たした」人間ドラマを書く場合、「朝鮮の人を労働者に使つた」というと虐使したのではないかと考えがちですが、事実は比較にならないほど高い給与が魅力となった。ともかく朝鮮の人と書く主題が妙にねじれてしまうおそれ

があるので、ただ労働者という形で押し通しました。また自分の主題を明確にするためフィクションとして書きました」（新田次郎との対談「取材・事実・フィクション―書き下ろし『陸奥爆沈』をめぐるて」一九七〇年）と語っている。（中略）トンネルを貫通する意志に取りつかれた男たちの執念、高熱の温泉が噴出し、泡雪崩で八十四名の死者を出した苛酷な自然との闘いという主題を貫通するためには、その工事に従事した半分以上の人間が朝鮮人であった事実は無用の存在と化さざるをえないと吉村昭は把握する。

引いたのは川西政明の評伝「吉村昭」である。途中の吉村の証言は孫引きの形になるが、そのまま用いる。事実関係の確認からすれば、川西の言葉に「徴用」とあるが、日本の労働力不足を補うために朝鮮人を強制的に連行する制度が整えられたのは、一九三九年七月からとされ、それまでは形式的には自由通航の形を取っていた。黒部第三ダムの工事は一九三六年～一九四〇年なので、トンネル掘削のための朝鮮人労働者たちは、その制度の改変期、すなわち過渡期的な時に就労したものとみられ

る。吉村の「虐使したのではないかと考えがちですが、事実は比較にならないほど高い給与が魅力となった。」という言葉は、この辺りの事情を指す。またトンネル工事に従事する工夫たちには、賃金面だけでなく、栄養補給や医療の面でも格別の配慮があったという記録もあり、作品にも生かされている。もつとも、日本によりよい労働条件を求めて朝鮮人労働者がやってきたのは、日本の植民地政策の結果であり、状況的な強制性は否定できない。また「工事に従事した半分以上の人間が朝鮮人であった事実」とあるが、川西がどのような資料に依ったかはわからないが、異説もある。いずれにせよ、朝鮮人労働者の存在がなければ、仙人谷ダム工事の完遂はなかっただろうとは言えそうだ。

川西の見解は吉村の証言に沿って展開されており、「主題のねじれ」として、トンネルを掘る男たちの執念や苛酷な自然との戦いを描くために、朝鮮人を登場させなかったとある。根津始め工事推進の指導者は史実としても日本人であったが、彼らがダム完成への暗い情動に突き動かされていたことを中心に据える一方、労働者にも同様の心理を見て、置かれた状況下で、目前の何事かに没

入することで自分の存在のあり方を模索する人間を描くことを主題の一つとみるとどうなるか。人間の実存的あり方という主題を前に、朝鮮人労働者を描いてしまうと、指揮者たちへの反抗心や怨嗟、また工夫に接する指揮者たちのありように別の要素が付け加わってしまう。朝鮮人労働者をめぐる社会問題性を切り離したい吉村の思いはそのあたりにあったのではないか。また、自然の苛酷さを際立たせる際に朝鮮人労働者を描くかどうかは、さほど重要ではないはずだ。

ダム建設に携わる朝鮮人を描くと、戦争遂行のためとしての国策として朝鮮人労働者たちが働かされたことが作品の前面に出てしまうマイナスがあり得たという見方が成り立ちそうだ。もちろん作品の中では国策による突貫工事の推進が悲劇を招いたことは描かれている。しかし悲劇に巻き込まれつつ、トンネル掘削に命がけで挑む工夫たちの心理や、トンネル貫通のために、工夫たちを制御しようとした工事指揮者たちの情動を描ききるために、朝鮮人労働者が多数働いていた事実は捨象された。一九六五年に日韓基本条約が発効したが、その折日韓で激しい反対運動が起こった。「高熱隧道」が発表される二

年前である。その時代背景が影響したかどうかは定かではないが、吉村が作品の純度を高めようという意識のもとに執筆を進めたことは確かである。そのために有用な事実とそうでない事実は取捨選択され、事実に立脚してはいても、あくまで小説家吉村昭は、自らが構築する虚構の物語の中に、人間の真実を浮かび上がらせる。

しかし一方、「高熱隧道」が広く読者を獲得し、しかもかなり綿密な取材に基づいて作品が構成されたことが理解されればされるほど、仙人谷ダム工事における朝鮮人労働者の存在が埋もれていってしまう結果を招く。このあたりが、史実を再構成することで作品を構築するタイプの小説についてまわる困難さであろう。

5

木本正次の「黒部の太陽」は一九六四年毎日新聞社(連載小説が単行本にまとめられたもの、映画「黒部の太陽」の上演に併せて一九六七年に講談社から再版出版されている)から出版され、一九六八年熊井啓監督(配給…日活)によって映画化されることで、広く知られることに

なった。従って小説「黒部の太陽」は「高熱隧道」よりも先の出版である。しかし「高熱隧道」には先行作として「墳墓の谷」「水の葬列」があり、「黒部の太陽」が「高熱隧道」に影響を与えたとは考えにくい。むしろ映画「黒部の太陽」の中に、仙人谷ダム建設のためのトンネルの難工事が織り込まれており、映画化する際に「高熱隧道」が生かされたと見るべきであろう。「高熱隧道」が戦時期に生き、死んでいった人々を営みを埋める仕事であるのに対し、「黒部の太陽」は産業技術の革新が高度経済成長を支え、人々の暮らしに豊かさや希望をもたらす確信を描いている。トンネル工事における犠牲者たちは、前者では、戦争遂行という目的の前に非人間的な労働のうち、に積み上げられたのに対し、後者では、戦後復興を遂げ、明るい未来を目指すための尊い礎として扱われる。

「黒部の太陽」が描くのは、言わずとした黒部第四ダム（一九五六年七月着工一九六三年六月完工）の建設である。ダム建設に先立ってやはり資材用トンネルが必要で、長野県大町市と御前達を結び、後ろ立山連峰を貫くトンネルの破碎帯突破が小説でも映画でも中心のモチーフである。主題は明確で、苦難を乗り越えて破碎帯に

挑む男達の群像劇を、具体的な数値を織り込みながら、工事の進捗を技術進歩と重ねて描くことに主眼が置かれている。またサブテーマとして、中心人物の一人、芳賀公介（関電黒四建設事務所工事担当次長）の娘が白血病に罹患し、ダムの貫通と娘の回復を重ねて祈る父親の葛藤や家族の思いの交錯が織り込まれている。トンネル掘削とダム建設が明るい時代を築くという主題に、家族愛をかさねた構想である。

木本正次が黒部第四ダムを題材にルポルタージュスタイルの小説を書こうと思つた動機は、後書きとして記された「紙碑への志」に明確に述べられている。

「黒四建設の技術の歴史を書くのは全く私の任ではありませんが、私は黒四で苦労した大勢の人たちの、人間の記録を書きたい。またこの工事で殉職した百七十一人の人々のために、紙碑を立てたいと思うのです」

ということを、ダム建設当時関西電力の会長だった太田垣士郎に直接述べて、賛同を得た経緯が語られている。そして、それが木本の恩師にあたる長谷川伸の「私の文

学の目的は、埋ずもれた人、誤解された人、悲境に死んだ人などのために、紙碑を建てることだ」という言葉に触発されたことが合わせて紹介されている。従って「黒部の太陽」に登場する登場人物達は実名で書かれることになった。

太田垣土郎は一八九四年兵庫県城崎郡城崎町（現・豊岡市）生まれで、京都帝国大学経済学部卒業後、日本信託銀行に入行し、後阪神急行電鉄（現阪急阪神ホールディングス）に移り、戦前は鉄道事業に従事した。戦後になつて一九五一年、電力界の再編成が行われ関西電力が発足すると、初代社長に就任。戦後の電力不足事情をいち早く見抜き、大規模な水力発電所の建設に踏み切った。戦後の復興が目覚しい一九五〇年代になり、関西地域の電力事情の逼迫の打開策として手がけたのが「黒四ダム」の建設である。一九六四年、自ら建設を決断したダムの完成の翌年に逝去している。享年七十歳であった。木本は太田垣の国家再建の情熱に敬意を抱き、その偉業の担い手たちの群像劇を目指したのである。

「高熱隧道」では達成感や喜びと無縁な開通を迎えたさまが描かれたが、「黒部の太陽」ではそれとは対照的に

トンネル開通の場面は明るい。確かに貫通に向けての先着競争なども描かれるが、貫通の瞬間は

意気込んで工夫たちは掘り続けた。ぽっかり穴があいて、その瞬間、冷たい風が吹き抜けて通った。信州側から始めて触れるそれは黒部の風だった。そしてその穴から矢板の頭が見えた時には、思わず歓声が、坑内にとどろいた。^八

と描かれ、祝賀会が催される。すなわち、技術の粋を集めて破砕帯を抜いた高揚感に満ちあふれ、戦後復興から高度経済成長への時代を先導する自信と誇りを、技術者や労働者たちで共有する。「黒部の風」という言葉が象徴的である。

小説「黒部の太陽」の主題は、映画化されることさらに強調されることになった。いくつかのデフォルメが加えられている。^九三船敏郎が演じた北川（小説では芳賀は、トンネル掘りに立ち向かう男の群像劇の中心的存在であり、一方病の二女（目色とも多）を気遣う父親像を兼ね備えた原作に沿った人物であるが、石原裕次郎が演

じた岩岡（小説では笹島）は、原作と異なつて大学を出たばかりの青年に設定が変更（実際の笹島は四〇歳くらい）されている。これは石原の俳優的魅力を前面に出し、北川の長女（榎山文枝）との恋愛を描くためと考えられる。さらに、仙人谷ダムのためのトンネル掘削における悲惨な工事をひきずつた人物として、原作にはない岩岡の父「源三」（辰巳柳太郎）が造形されている。岩岡に、新しい時代を担う青年技術者として、日本の将来を担うようなイメージを与えようと、仙人谷ダム工事の完成のためには人命を軽んじるような陰惨さに対して、黒部第四ダム工事は事故防止や安全面への配慮が最大限になされた、民主的な工事遂行であったことを際立たせた。

もう一点付け加えると、原作でのダイナマイト事故を、佐藤工業の古株社員（宇野重吉）の若い息子（寺尾聰）が事故死するエピソードとして描き、尊い犠牲者を悼む老夫婦（妻は北林谷栄）の姿をラストシーンに挿入したことが挙げられる。映画製作にあたって、三船と石原は、制作費の問題もあつて劇団民芸に協力を求め、宇野重吉も快諾したと言われている。そういった事情もあつて、民芸の主力役者を主要人物にすすめるキャストイングにな

つたということも確かである。しかし映画「黒部の太陽」は小説「黒部の太陽」の主軸に沿いながらも、恋愛エピソードや人間愛、民主的で活力あふれる人々の姿を描くことを中心に製作が進められたことがうかがえる。映画化の狙いまたその際行われたデフォルメは、記録・ルポ小説をドラマに昇華させることにあつたということになる。そして本来の小説「黒部の太陽」の主題が一層強調される結果となつたのである。

6

二〇〇二年にはNHK制作番組では、「シリーズ黒四ダム 秘境へのトンネル 地底の戦士たち」が放映され、同年のNHK紅白歌合戦に中島みゆきが初出場場で登場し、プロジェクトXの主題歌であつた「地上の星」を、真冬の黒部川第四発電所地下道からの生中継で歌っている。また「黒部の太陽」は一九六九年（日本テレビ系列）と二〇〇九年（フジテレビ系列）の二度にわたつてテレビドラマ化もされている。さらにあまりテレビ放映されなかつた映画「黒部の太陽」のDVDが二〇一三年に発売

された。二十一世紀に入ってから、黒部ダム建設に関わる作品や情報が相次いで出ている状況にある。

さらには、二〇一八年には関電大町トンネル開通60周年企画として「くろよん特設ページ」が開設されている。

(http://www.kepco.co.jp/brand/kuroyon_history/)黒四ダムを中心に据えた観光開発は著しく、一九七一年に全線開通した立山黒部アルペンルートは、現在中国や台湾からの観光客を誘致して活況を呈しており、先に紹介した「高熱隧道」の見学コースも二〇二四年に一般開放される計画があると聞く。

戦後の復興の象徴的な存在とも言える黒部ダムは、今や建設後六〇年を越え、その歴史の意味が問い直されつつある。電源開発という意味では、高峰謙吉が起こした東洋アルミナム株式会社が計画した弥太蔵発電所を起点にとると、その完成が一九二三年であり、一〇〇年近くの歴史がある。発電事業はその後日本電力・関西電力と引き継がれ、平行して黒部地域に鉄道が敷設され、現在の富山地方鉄道、黒部峡谷鉄道につながっている。「電源開発は、近代産業化に欠かせない営為で、とりわけ黒部川流域地域は、そのメッカと言ってよい。その光と陰

が凶らずも、本稿で取り上げた作品群に表れている。それは圧倒的に人間を拒むような自然に対する飽くなき挑戦でもあった。

「高熱隧道」では泡雪崩ホウが、信じがたいような威力で越冬用の宿舍が吹き飛ばすエピソードが描かれるが、「自然の力の底知れぬ恐ろしさ」「黒部溪谷の自然の力は、想像もおよばない強大なもの」といった表現が用いられている。「犠牲」を伴う「自然への戦い」は、表向き「人間の進歩」だが、その情熱が掘るものの「おさえがたい隧道貫通の単純な欲望」に支えられたものであることは既に述べた。一方、「黒部の太陽」には

『黒部には、怪我はない』

そういう言葉がある。：黒部の谷では事故とは『死』の意味であって、中途半端な怪我などはない、ということなのだ。

という一節がある。近代技術の粋を集めてなお抗いがたい圧倒的な自然の存在が厳然としてある。しかし作中の太田垣士郎は

「破砕帯では既にすべての科学的、技術的方法を講じ尽くしたというこたかね?…その方法を、やり尽くしてみようじゃないか」

と関係者たちを奮い立たせ、困難を乗り越えて戦争で失われた生活を取り戻し、希望ある未来を切り開く意義を説く。近代産業技術と自然との戦いが、そしてその支配が幸福を導くことが信じられていた時代であったということは、題材を共通にしながら、全く異なる作品世界を構築しようとした二作品に通底する。黒部川流域の電源は今も私たちの生活を支え続けている。二十一世紀を迎えて、前世紀の尊い犠牲の上に成り立ったダム建設の時代を振り返り、跡づけようという営みが先に述べた状況なのである。一方、コンクリートによる巨大建造物であるダム建設は、自然環境への影響も大きく、中国の三峡ダムや、八ツ場ダムの問題が記憶に新しいが、自然との共生を求める現代においては、反省的に振り返るべき開発形態でもある。やがては施設の老朽化や耐用年数の問題も表面化するだろう。山岳地帯を川が削り取るという、

日本の国土形成のある種の典型的な特徴を備えた富山の地勢から生まれた、ダムに関する文芸作品や、そこから派生したさまざまな人文的な営みについて、一度立ち止まって深く考察してみるべきだと考える。

【主な参考文献】

- 1 吉村昭「私の文学漂流」(一九九二年一月・新潮社)
- 2 川西政明「吉村昭」(二〇〇八年八月・河出書房新社)
- 3 笹沢信「評伝吉村昭」(二〇一七年三月・白水社)
- 4 立野幸雄「越中文学の情景」(二〇一三年一〇月・桂書房)
- 5 内田すえの・此川純子・堀江節子「黒部・底方そごいの声」
黒三ダムと朝鮮人(一九九二年一二月・桂書房)

註記

- 一 参考文献4による。
- 二 参考文献2で川西は、父が戦争に負けるといったことに兄英雄とともに反発したエピソードを綴り、「この一九四一年二月八日の

記憶は吉村昭の精神の根幹をなすものである。戦争に「勝つことを強く願ってこそ勝利も得られる」と日夜刻苦勤勉した日本人像が、吉村昭が求める日本人像の根幹に位置することになり、彼の史実を求めての遍歴の旅の基本もまたここにあったからである。」と述べている。

参考文献1による。

参考文献1による。

引用は新潮文庫版『高熱隧道』（一九七五年）によった。他も同じ。

「高熱隧道」には「しかしなんといい第一の問題は、金銭ですよ」根津が、笑いながら鳴門に顔を向けた。「手当が倍ですからね、かれらはあきらかに割のいい仕事だと思っっているんです。」

という記述もあるし、その実態については当時の他の賃金や中間

搾取も視野に入れた詳しい考証が参考文献5にある。

参考文献1による。

「黒部の太陽」引用は信濃毎日新聞社刊文庫版（一九九二年）による。

映画に関する記述は「黒部の太陽」のDVD版（二〇一三年株式会社三船プロダクション株式会社石原プロモーション）による。

付録のパンフレットに樫山文枝らの回想が掲載されている。

「トロッコとめぐる90年の旅」（二〇一六年）「黒部の鉄道史」（二〇一〇年）（いずれも黒部市民歴史民俗資料館の展示解説）にこの間のいきさつが詳しい。

群峰 第1号

発行日…2015年3月7日

◇研究論文・資料

黒崎 真美

横山源之助「越中魚津にて」貧民を書く

水野 真理子

翁久允の思想と関連書籍―翁久允文庫調査を踏まえて

近藤 周吾

《資料紹介》井上靖記念館蔵 井上靖宛大村正次書簡

◇2014年度 活動記録

◇総目次『富山文学の会 ふるさと文学を語る シンポジウム報告書』

◇報告書

断絶と和解の円環

—山川健一『人生の約束』論

谷川 拓矢

はじめに

山川健一。今ではその名を知る人も少ないかもしれない。現在、東北芸術工科大学芸術学部文芸学科教授であり、学科長を務める。一九七七年には「鏡の中のガラスの船」で群像新人文文学賞優秀作を受けている。以降、小説やエッセイ、映像作品のノベライズなど、きわめて多作である一方、先述のように作家の名はあまり記憶されていない。しかし、その作家的資質をたとえば批評家・秋山駿が評価していたことは書き添えておきたい。『山川健一自身によるデジタル全集解説』^一には学生時代からの秋山との親交が記されており、秋山は山川を激励する存在だったことがわかる。また、山川が小説家生命の終わりすら覚悟して世に出したという、自身のオーラ体験

を記したエッセイ『ヒーリング・ハイ』^二刊行時に、秋山は担当の新聞時評で「現代文学はもはや神祕を無視するわけにはいかない。山川健一のこの作品は小説ではないが、文学の果敢な一歩である」と擁護したという挿話も紹介されている。

本作は、そんな山川による映画『人生の約束』(二〇一六、石橋冠監督)のノベライズである。もとより映画版は石橋の妻の故郷である富山・新湊を舞台にした、監督初の映画作品であるが、小説版は「映画の企画段階から監督の石橋冠氏と意見を交わしながら書かれた」ものとされ^三、映画版とほぼ同時期に文庫書き下ろしの形で発表されている^四。本稿では山川による小説版を讀んでいくが、本作は小説版特有の語り・視点・構造により、映画版と相補的に作用しあう作品と言える。以下、山川による小説版を讀んでいく。

梗概、語り、視点、構造

まず本作の梗概を記しておく。会社の拡大にしか興味のないIT関連企業CEO・中原祐馬の携帯電話に、か

つての親友・塩谷航平から何度も着信が入る。起業して会社を二人三脚で成長させながらも、二人は方向性の違いから決別していた。電話を疎ましく思う反面、胸騒ぎを覚えた祐馬は、航平の故郷である新湊に向かう。そこで祐馬が直面したのは、予期せぬ航平の死だった。祐馬は新湊で四十物町町内会長・西村玄太郎、航平の義兄・鉄也、航平の娘・瞳らと出会う。その中で、四十物町と西町の間で曳山譲渡騒動が起きており、航平が最期を迎えるまで西町に抗議し続けていたことを、祐馬は知る。

一方、東京では祐馬の会社が不正取引の疑いで強制捜査を受ける。航平ばかりでなく、会社や仲間など、すべてを失った祐馬は、再び新湊へ向かい、航平の代わりに曳山に「つながる」ことを願い出る――。

この物語内容は映画版もほぼ同様の筋を辿るが、ここでは小説版に特有の点を確認する。まず本作は、三人称全知視点の語りで展開される。この語りにより、さまざまな時間・空間・内面に入り込むことができ、映画版では専ら演者の身体表情に依拠していた内面の表現が、叙述によって語られることになる。また小説版では、ストーリーが映画版同様基本的には語りの現在における時系

列順で語られていく中で、時おり回想が挟まれる構造となっている（とくに小説版第二章は、映画版では語られなかった祐馬・航平・陽子（航平の妻）の学生時代が回想により語られる）。作品全体についても、〈幾千もの時を超えてきた曳山〉〈そびえる立山連峰と青く輝く日本海〉の描写に始まり、それに終わるといった円環的な構造を成している。こうした点から、映画版ではともすれば単線的と捉えられてしまいかねない物語を、小説版においてはその語り・視点・構造により相対的に眺める広がりを獲得していると考えられる。そうした意味で、小説版と映画版の相補的な関係により、『人生の約束』という作品はあらためてまとまりを与えられ、束ねられていくことになるのだ。

ディスコミュニケーションから始まる

そうした視点を持つ小説版において浮き彫りになるのは、この物語にはいくつものディスコミュニケーションが輻輳していることである。

たとえば航平と瞳の魚津での面会の場面。この場面は

航平視点と瞳視点で二度語られる。その際、瞳視点では「蜃気楼」が見えたことが語られるが、航平視点では「蜃気楼」については一切語られない。瞳は航平のことを「一度もお父さんとは呼ばなかった」ということから、これは航平と瞳の隔たりを示しつつ、かつまた瞳にとって航平は幻のような存在であったことを示す。これが航平の今わの際の場面では「航平が口元に微かに笑みを浮かべると、瞳はゆっくりとうなずいた」と語られる。直接的な言葉が交わされることはないが、たしかに相互理解が交わされている。

祐馬とN&Sグローバル社員との間でも、自社の利益拡大だけを考えた一方的でエゴイステックな方針を社員に押し付ける祐馬に対し、部下は表面上従う言葉を返すことしかできないという関係が展開される。とくに部下の沢井との間では、後に和解の時が訪れ、沢井は解任された祐馬の後を継ぐ決意をする。

新湊の町で出会った祐馬と鉄也も、はじめ航平の死をめぐって隔たっている。しかし、あることを契機として和解に至る。

さらに、曳山譲渡問題に揺れる四十物町と西町もデイ

スコムユニケーションに陥っていると見えよう。こちらも物語終局において和解する運びとなる。

このように見ると、本作におけるデイスコムユニケーションから和解へという構造の、語り手による意図的反复が明らかとなる。

では、祐馬と航平はどうか。

二人のデイスコムユニケーションは、回想の中で提示される。「立ち止まった瞬間に、企業は死ぬんだ。…(中略)…だから突き進むしかないんだ」と凄む祐馬に対し、「立ち止まらなきゃ見えない景色もある」と応じる航平。二人はこうした断絶ゆえ決別することとなり、そのまま死に別れたのである。先述のいくつかのケースとこの二人の決定的な違いは、祐馬にとって和解すべき相手である航平が亡くなってしまったことである。しかし、この物語の文法から言えば、この二人にもまた和解の時訪れるはずである。では、それはいかにして訪れるのか。

手紙という契機

そもそも二人の隔たりはいかなるものなのか。先に挙

げたやりとりにもとづけば、祐馬は前だけを見据え進み続けることを信条としている。祐馬が見ている「前」とは、自社の利益を拡大し続けることである。そもそも祐馬は進化論支持者であるという設定である。一方、航平は「立ち止まらなきや見えない景色」―後景―（過去）を、文字通り「立ち止ま」って見ることの意義を示す。回想の中で航平は「大切なもの」という言葉を吐くが、祐馬と航平の断絶はまさにその「大切なもの」への認識の齟齬として表れるのである。

すなわち、本作は「祐馬が航平の呟いた「大切なもの」の意味を感得していく物語」と言える。それこそが祐馬と航平における和解である。少なくとも語り手はそのような意図のもとこの物語を進行している。語り手は航平の「大切なもの」に肩入れしながらこの物語を語っており、祐馬を、そして読者をそちらに導こうとする。そこで、祐馬と航平の和解に関して、次の視点を提示しておきたい。

この和解の契機となったのが手紙であったこと。航平の死に直面した祐馬は、死者である航平に呼びかける手紙を書く。死という決定的な断絶にもとづき書かれた手

紙。届きうる相手が不在の手紙。そこに書かれた言葉は、「書く祐馬」「書かれる祐馬」「書かれる航平」の自己内対話を発生させ、祐馬自身に跳ね返る。祐馬は自己や航平という存在を見つめ直し、「大切なもの」とは何か考え直す。加えて、こうした言葉が他者に届きうる言葉になったこと。この手紙が四十物町や西町の青年たちを動かし、両町の和解の契機となったのである。

〈祐馬―航平〉のみならず、どの和解も、その前提としてディスコミュニケーション、断絶、喪失があるということ。もともと〈祐馬―航平〉については死という決定的な断絶であったが。そもそも断絶がなければ、和解もないのである。玄太郎の「失くしてから気づくことばかりだな、人生は……」という言葉も、こうした点を象徴する呟きとして併せて思い出しておきたい。では、失われてはじめて気づくことのできる「大切なもの」とは何か。

「大切なもの」の内実

先述の通り、航平にとつての「大切なもの」は、ひと

まずは〈過去〉ということになる。具体的には心に持つ
 曳山（祭）への誇りを指す。航平は〈美・誇り〉を「大
 切なもの」とする存在である。これは、祐馬が自社の利
 益拡大だけを見据え突き進む、いわば〈経済・システム〉
 重視の存在であることと対照的である。〈美・誇り〉が〈過
 去〉とのつながりを感じ得ることによりもたらされるも
 のであるのに対し、〈経済・システム〉は〈過去〉とのつ
 ながりを断ち切るものである。

また、そうした〈過去〉とのつながり、〈美・誇り〉の
 感覚が身体的、感覚的に感受されるものであることが、
 物語中で度々示される。たとえば鉄也の「祭りは…（中
 略）…体を使って、人とつながることを憶えられる」と
 という言葉が取り上げられ、語り手により「曳山の誇りに
 満ちた美しさというものは、実は現実の曳山には存在し
 ない。…（中略）…曳山をそのような至高のものとして
 感じ、支える、地元の人間たちの想像力が問われている
 のだ。そう感じる人間だけが、つながることができると
 語られる。

以上のことから、語り手が肩を持つ航平の「大切なも
 の」は次のようにまとめられる。隔てられたもの、失わ

れたものⅡ〈過去〉を見つめ直し、そこに〈美・誇り〉
 を見出すこと。言い換えれば、そうした〈美・誇り〉は、
 それが既に隔てられたもの、失われたものであるからこ
 そ見出されるものであること。失われてはじめて気づく
 〈過去〉というものの〈美・誇り〉。それは隔てられたも
 の、失われたものであるがゆえに、目には見えないもの
 であり、そこに見出される〈美・誇り〉も目には見えな
 いものである。身体的、感覚的に感受されるものであり、
 言語化すら困難である。むしろ言葉にしてしまった途端、
 消え失せてしまうものかもしれない。しかし、それはた
 とえば形骸化した言葉のやりとりしかない祐馬とN&S
 社員との空洞化した交渉よりも、はるかに深い交感であ
 る。

おわりに

物語終局において自ら曳山に「つながる」ことを求め
 た祐馬は、航平の呟いた「大切なもの」の意味を感じ得
 ており、語り手の意図通りに祐馬に航平との和解の時が
 訪れ、物語の円環は閉じられる。そもそもこの物語にお

いては、自らの隔てられたもの、失われた（失われつつある）ものⅡ（過去）と向き合い、和解に至るⅡ（美・誇り）を見出すという構造が反復されているのであった。それは、この物語の（幾千もの時を超えてきた曳山）（そびえる立山連峰と青く輝く日本海）の描写に始まり、それに終わるといふ構造が象徴していると見えよう。

〈神は死んだ〉と言われる近代以降において、こうした構造の回帰が全知の視点で繰り返し語られることにより、永遠に反復するものを感じさせる。また、物語を相対的に捉えることを可能とし、映画版との相補的關係を成し、『人生の約束』という一つの物語を形作っているのである。

註

- 一 幻冬舎、二〇一六、七。電子書籍オリジナルのために書き下ろされたものである。
- 二 早川書房、一九九五、十二。
- 三 東北芸術工科大学ホームページ(trad.ac.jp)より。
- 四 幻冬舎文庫、二〇一五、十一。本稿における読解、引用はすべてこれに拠るものとする。

群峰 第2号

発行日…2016年3月4日

◇研究論文

黒崎 真美

「義坊」の魚津を巡る―「貧しき小学生徒」と魚津町

中山 悦子

馬場はるとラフカディオ・ハーン―ハーン作「ハル」とともに―

近藤 周吾

源氏鶏太の評伝的研究―初期と晩年に見られるペーソスを交えたユーモアについての覚え書き―

金山 克哉

高島高、その文学観と詩法―詩誌「文学組織」「文学国土」から―

◇文学散歩 報告

近藤 周吾

源氏鶏太の通学路

◇資料紹介

近藤 周吾

一木令之介「野鼠」解説

◇2015年度 活動記録

ナツツタの樹液による芋粥再現実験

関戸 菜々子^一姫野 諒太郎^二早瀬 裕也^三小谷 瑛輔^四

一 実験の趣旨

本稿は、芥川龍之介「芋粥^五」およびその典拠とされる「今昔物語集」「宇治拾遺物語」の原話に登場する芋粥という料理について、平安時代に用いられたであろう材料を用いて行った再現実験の報告である。

よく知られたものではあるが、これらの物語の筋から確認しておこう。

下級貴族の五位が主人公で、ある日、稀な機会に少量しか食べられない芋粥を飽きるほど食べてみたいと口に出す。それを聞いた利仁に誘われて、五位は敦賀で芋粥を振る舞われることになる。しかし、敦賀に到着していざ大量の芋粥を目の前になると、一杯も食べることがで

きなかった。この全体的な筋については、原話でも芥川の小説でも共通している。

原話では五位が食べられなくなった理由については特に触れられず、単にその反応に皆が笑ったということだけが語られているが、芥川の「芋粥」では、五位の食欲が失せていく過程や心理的な意味付けが詳細に書かれていることが特徴である。大量の芋粥を振る舞われたことは、「多くの侍たちに愚弄されてゐ」た頃を懐かしく感じさせるような、人生観を劇的に変えた出来事として描かれており、その点は原話とは異なる芥川「芋粥」に固有の特徴となっている。

さて、これらの物語では、当初の芋粥への思いについても、結末での五位の変化についても、芋粥という料理の味が重要な役割を持っているにもかかわらず、その点は未知のままであった。平安時代に作られていたような芋粥は、近代に入って以降は作られた報告が全くなく、完全に途絶えた食文化となっていたからである。

芋粥が作られなくなったのは、それを作る甘味料となる「ミセン」または「甘葛煎^{あまつせん}」がどのようなものであるのか、江戸時代には分からなくなっていたためである。

近年、芋粥の原料となる甘味料「甘葛」^{あまづら}がナツツタの樹液であることが石橋頭によって明らかにされ、また、それを煮詰めて糖度を七〇度程度まで高め長期保存が可能となる「甘葛煎」も再現可能であることが確認された^六。最近、石橋頭の協力のもと、奈良女子大学で大規模な再現実験が行われ、その成果が山辺規子編著『甘葛煎再現プロジェクト^七』にまとめられた。今回の我々の実験も、これに多くを拠っている。

これらの先行研究に対する本実験の新規性は、次の二点である。

一点目。先行研究はいずれも甘葛煎の再現を目的としたものであり、ナツツタの樹液を用いた芋粥の再現実験が行われたことの報告は管見の限り存在しない^八。後でも確認するが、芋粥については甘葛煎を原料とするレシピと甘葛煎に煮詰める前のナツツタの樹液を用いるレシピの二通りが伝えられている。糖度七〇度を超える甘葛煎が美味であることは既に報告されており、それを用いて自然薯を煮た場合に美味なものになることは十分に予想されるところだが、甘葛煎の段階を経ずに作るとどのような味になるのか、また美味と言える糖度の芋粥を作

るためにどの程度の糖度や量のナツツタが必要となるのかという点を明らかにすることは、甘葛煎の再現を趣旨とする先行研究とは異なる課題となる。

二点目は、先行研究においては九州や奈良のナツツタによる再現が行われており、北陸の気候や植生におけるナツツタの樹液による再現はなされていないということである。ナツツタの樹液の糖度は寒さと関わっていることが前掲の先行研究によって知られており、地域や季節、採集時期の実際の温度の違いによって、樹液の糖度や味には大きな違いが生じる。「今昔物語集」、「宇治拾遺物語」、「芥川龍之介「芋粥」において大量の芋粥が作られた舞台となっているのは北陸の敦賀である。前掲書で山辺規子は「全国各地で甘葛煎再現実験がなされれば、また見えてくるものがあるかもしれません」と述べているが、「今昔物語集」、「宇治拾遺物語」、「芥川龍之介「芋粥」に関して最も重要性が高いのは、北陸のナツツタによる再現ということになるだろう。

既知のことからであるが、古典籍に見える芋粥の情報について確認しておこう。芋粥の製法は、芥川が読んだとされている「今昔物語集」の本文^九には次のように描か

れている。

何ぞの湯桶すぞと見れば、此水と見は味煎也けり、亦若き男共十余人許出来て、袂より手を出して薄き刀の長やかなるを以て、此の署預を削つゝ、撫切りに切る、早う署預粥を煮る也けり

「今昔物語集」と同様のエピソードは「宇治拾遺物語」にもあり、芥川龍之介はこれらをもとにしたとされている。芥川「芋粥」では、芋粥を作る場面は次のように描かれる。

芋粥とは山の芋を中に切込んで、それを甘葛の汁で煮た、粥の事を云ふのである。(中略)

五位はさつき、あの軒まで積上げた山の芋を、何十人かの若い男が、薄刃を器用に動かしながら、片端から削るやうに、勢よく切るのを見た。それからそれを、あの下司女たちが、右往左往に馳せちがつて、一つのこらず、五斛納釜へすくつては入れ、すくつては入れするのを見た。最後に、その山の芋が、一つも長筵の

上に見えなくなつた時に、芋のにほひと、甘葛のにほひとを含んだ、幾道かの湯気の柱が、蓬々然として、釜の中から、晴れた朝の空へ、舞上つて行くのを見た。

また、日本最古の料理書と言われる『厨事類記二』には次のようにある。

暑預粥ハヨキイモヲ皮ムキテウスクヘキ切リテミセン
ヲワカシテイモマイルヘシイタクニルヘカラス又ヨキ
甘葛煎ニテニルトキハアマツラ一合ニハ水二合ハカリ
イレテニル也石ナヘニテニルチヒサキ銀ノ尺子ニテモ
リテマイルラス云々或説云銀ノ提ニ入テ銀ノ匙ヲクシテ
マイルラスヘシト云々

このように、『厨事類記』では、「ミセンヲワカシテイモマイル」場合と、「ヨキ甘葛煎ニテニルトキ」の二通りのレシピが記されている。「ミセン」とは「未煎」、すなわち煮詰める前のナツヅタの樹液であり、煮詰めたものが「甘葛煎」である。「ミセン」は調味料としては日持ちしないため、冬季に「ミセン」を採取してから長期間の

保存が利く形態を経なければ利用不可能な時期には専ら「甘葛煎」への加工を経た料理法が採られ、「ミセン」の産地において冬季に芋粥が食される場合では、両方の料理法が可能であったと考えられる。

今回実験を行う富山は、かつての国名では越中だが、「今昔物語集」、「宇治拾遺物語」、「芋粥」で舞台となった越前敦賀と同じ北陸の気候であり、また『甘葛煎再現プロジェクト』でも触れられているように、『延喜式三三』卷三三、「大膳下」の「諸国貢進菓子」条および『延喜式』卷三七、「典薬式」の「諸国進年料」に、「甘葛煎」を納めていたことが記録されている地域でもある。すなわち「甘葛煎」およびその原料である「ミセン」の産地であったわけで、冬季に「ミセン」から芋粥を作ることが可能であったのはこうした地域であったと考えられる。そこで本実験では、「甘葛煎」を経由したレシピに限定せず、「ミセン」から直接作ることも含め、芋粥の再現が成功するかどうかを検証することになる。特に、「今昔物語集」、「宇治拾遺物語」では「味煎」に「暑預」を直接入れているとあることから、難度が高い工程とされてきた「甘葛煎」の再現も今回の実験の目標の一つには含まれるが、

それだけにはこだわらない。

これらの物語中では、京都では少量しか作れない芋粥が、敦賀では大量に作られていたという設定となっている。これについて石橋頭は「五位のために消費した味煎の量を控えめに五石として、実験の数値から原料のツタに換算すると、およそ三〇〇本分に相当する。現実にはとても不可能な数字である^三」としており、金額でいえば「一千万円を超える^四」という。利仁の権勢を強調するための誇張であるというのが石橋の見解であるが、前述のように、ナッツタの樹液には気温が関係しており、北陸の気候で十分な糖度と量のものを用意する難度が小倉や奈良と同様かどうかという点も確認される必要がある。たとえば、北陸では高い糖度のナッツタが容易に大量に集められるということになれば、「ミセン」を用意するための手間は変わってくることになり、「今昔物語集」、「宇治拾遺物語」において敦賀で作られたことになっている芋粥の量が誇張であったのかどうかという解釈に関わってくる。これも、今回の実験によって検討される点の一つとなる。

また、芋粥の味そのものも、芋粥をめぐる物語群の解

釈に関わってくる。五位が大量に食べたいと願ったのが現実的なものであったのか、あるいは五位の特異な嗜好を示すものであったのかは、味覚的な面を抜きにして考えることはできない。今回の実験は、初めてその点からのアプローチを試みるものである。

まとめておくと、今回の実験の目的は、以下の三点ということになる。

一点目。ナツツタの樹液によって芋粥を作ることができるとどうかを確認し、また、その工程がどのような様子になるのかを把握する。

二点目。北陸におけるナツツタの採集や樹液の採取の様子がこれまで実験が行われてきた他地域と同様のものとなるかどうかを確認する。また、樹液の糖度を確認する。それによつて、「今昔物語集」、「宇治拾遺物語」、「芋粥」における北陸での芋粥大量作成を非現実的なものと解釈すべきかどうかを検討する。

三点目。ナツツタの樹液による芋粥の味を確認する。「今昔物語集」、「宇治拾遺物語」、「芋粥」において、主人公の五位が大量に食べたいと願ったことや、大量の芋粥を目の前にして食欲を失ったことの解釈について示唆

が得られないか検討する。

二 構想と準備の経緯

二・一 実験の構想

富山大学人文学部東アジア言語文化コースの選択A科目として開講されている「日本文学演習」（担当教員：小谷）では、平成二十八年年度より、アクティブ・ラーニングの試みとして、学生たちがそれぞれの関心とアイデアに基づいて勉強会を互いに提案し合い、多様な形で文学を学び合うことを推奨してきた。

平成二十八年年度卒業生の代から開催されてきた勉強会の一つに「文豪飯」というテーマがあり、文豪にゆかりのある食べ物を再現して実食してきた。過去の卒業生の成果は冊子にまとめられており、平成三〇年度二年次学生を中心とするチーム（代表：関戸）もこのテーマに関心を持ち、森鷗外が食べていたという「まんじゅうご飯」や、宮沢賢治が好んだという天ぷらそばとサイダーの組み合わせなどを再現・実食するなどしていた。

「日本文学演習」と並行して、平成三〇年度前期に開講された別の科目「日本文学特殊講義」(担当教員・小谷)で芥川龍之介「芋粥」を扱った際、芋粥が現代では全く食べられなくなっている料理であること、その材料となる甘味料の「甘葛煎」の再現の段階については近年他の地域で行われた例があること、しかし芋粥の再現実験については報告が見られないことなどを紹介した。これに授業を受講していた「文豪飯」チームのメンバーが関心を持ったことが、構想の始まりである。

その後、富山大学理学部教授の唐原一郎氏を通じて植物の研究を専攻する大学院理工学教育部の姫野諒太郎、早瀬裕也が紹介されてメンバーに加わり、ナッツタの分布や同定、採集方法などについての知識をチーム内で共有し、さっそくナッツタを探索することとなった。

二二二 ナッツタの探索と採集許諾確認

ナッツタ(単にツタとも) *Parthenocissus tricuspidata* (Siebold et Zucc.) Planch.) はブドウ科ツタ属の落葉性のつる性木本である。日本国内では北海道・本州・四国・

九州、国外では朝鮮半島・中国に分布し、山野に普通に見られる。晩秋には赤く紅葉する^{一五}。ナッツタの葉は、生長段階によって二く三つに分かれたり、切れ込みが入らなかったりと、変異に富み、ウルシ科のツタウルシ (*Toxicodendron orientale* Greene subsp. *orientale*) やウコギ科のキツタ (*Hedera rhombica* (Miq.) Bean) に似る。特にツタウルシは触れることでかぶれを生じる有毒植物であり、誤って採取しないよう注意が必要である。

キツタは常緑で、冬でも葉が残っているため、夏に葉のあるナッツタ「夏蔦」に対して「冬蔦」と呼ばれる^{一六}。したがって、冬でも葉が残っていればそれはナッツタではなくキツタであるわけだが、葉のない冬につるだけの状態のナッツタを、他の枝葉もある場所で探し出すのは難しいと考えられた。そこで、葉のある季節にあらかじめナッツタの自生を確認しておく必要があった。

また、ナッツタは採集後時間が経つと乾燥して樹液がとれにくくなる。そのため、なるべく実験場所から距離の近いところで採集する必要がある。そこで、七月一日、富山大学五福キャンパスすぐ近くの呉羽山から探索を開始した。ナッツタは日向に多く見られることから、

探索場所は道路沿いなど、比較的探索しやすい箇所に限定される。したがって、呉羽山全域の探索もそれほど労力を要しないが、半日がかりの探索を複数回行っても、十分な太さのナツツタを多く発見することはできなかった。

そこで探索範囲を拡大して、五福キャンパス内や、近隣の住宅地、神通川付近などを数ヶ月にわたって探すこととなった。結果的に、五福キャンパス理学部倉庫、民家二件、富山大橋付近の橋、の四箇所、直径三センチメートル以上のナツツタを発見することができた。

これらのナツツタについて、採集の許諾を得る必要があるため、それぞれ、権利者を調査することとなった。

理学部倉庫については、当該倉庫を利用している学内スタッフから採集について問題ない旨を確認したが、他は大学の外部となるため、一つ一つ権利者を確認していった。

まず富山市役所に赴いて、採集候補地のうち市が管理する土地が存在するかを問い合わせたところ、呉羽山については風致地区に指定されており、木竹の伐採については制限されていることが判明した。ナツツタを剥がす

ことが伐採にあたるかどうかは微妙とのことであったが、呉羽山には、十分な太さがあつて、かつ採集しやすい位置にあるナツツタは発見できなかったこともあり、候補から外すこととした。

富山大橋の近くの橋は、松川と県道44号線が交差する地点で、県道の北側に県道にほぼ平行にかかっている小さな橋である。この橋の管理については、富山県が管轄していることを富山市役所から知らされ、県庁に赴き、富山県土木センターの許可を得ることができた。

近隣の民家については、訪問して実験の趣旨を説明し、許諾を得ることができた。

二二二 第一予備実験——代用品による最終工程シミュレーション

本実験を行うにあたり、今回はいくつかの予備実験を行うこととした。ナツツタの樹液は、採取に多大な手間がかかる上に少量しか採取できず、またナツツタも近隣で手に入るものは量が限られているため、失敗すると、同じ実験を繰り返し行うことが非常に困難になることが

予想されるため慎重を期したのである。

予備実験のうちの一つは、芋粥作りの最終工程である、ナツツタの樹液でジネンジヨを煮込む作業を、代用品によってシミュレートするというものであった。この実験は、七月二五日に人文学部日本文学演習室で行われた。

このシミュレーションでは、高価なジネンジヨの代わりに長芋を用い、ナツツタの樹液の代わりに、砂糖水、白樺の樹液、メープルシロップ、の三種類を用いた。なお、メープルシロップを用いた芋粥は、これまでに『甘葛煎再現プロジェクト』でも報告されている他、WEB上でも同様の料理を作った報告がいくつか見られる。

白樺の樹液は、ナツツタと同様に植物の樹液であり、甘みがあるものということで用意したが、当日用いたものはほとんど甘みがなく、ただ煮込んだだけの長芋というふうな味となった。砂糖水やメープルシロップでは甘みのある長芋煮が出来上がり、十数名の参加者が試食を行った。

そのときの感想^{二七}はたとえば以下のようなものである。「実際に食べてみて、これをたくさん食べるのは大変だと思いました」、「優しい味で美味しかったです、鍋

一杯食べる気には…」、「メープルが1番食べやすかったです。けど、わたしは3口で飽きました…」、「最初のうちは美味しいと思ったのですが、だんだん辛くなってきました。／あれが鍋いっぱいに作られているとなると、匂いだけでもいいやつてなりそうです…」、「とにかく食べ切るのがしんどかったです…」、「ほんの少しの量だけ食べられるからこそ美味しいんだらうなと思います」、「一口目に「あ、おいしい?」って思ったのも束の間で、すぐに苦しくなりました」、「芋粥…もう満足でござる…。食べきるのが少々つらかったです」、「メープルを入れると確かに食べやすかったです…。ただ、大量に食べたことは正直思えませんでした」、「まずくはなくとも、たくさん食べたいとは思いません」など。

一口目はそれなりには美味だが、大量に食べようとは思わない、というのは、「今昔物語集」、「宇治拾遺物語」、「芋粥」の五位の感想と同様である。あくまでもシミュレーションではあるものの、これらの感想からは、芋粥をめぐる五位の心境の変化は、芋粥の味の特性を踏まえたものであったのではないか、という予測が立てられた。もしそうだとすれば、「今昔物語集」や「宇治拾遺物語」

で五位が少し食べただけでそれ以上の食欲を失ったのは、単に芋粥の味の特性によるものだということになる。すると、その原因を別のところに求めた芥川の解釈と翻案は、芋粥の実際の味を踏まえれば見当違いだった、ということになるかも知れない。

ただし、この予備実験で作成したのはあくまでも代用品によるものであり、ナツツタの樹液を用いた芋粥もそのような感想を生むものであるかどうかということが確認される必要がある。実は、ナツツタの樹液を用いた芋粥の味については、ここでの予測は完全に外れ、全く異なる感想が得られることになった。

二・四 実験実施時期の検討と準備

今回の再現実験にとつて、実施時期をいつにするかということは様々な意味で重要である。

まず、ナツツタの樹液の糖度が上昇している時期でなければ甘味料として用いることができないので、ある程度寒くなっている時期であることが条件となる。

他方で、ナツツタの採集が困難な時期を避ける必要も

ある。富山市は「豪雪地帯対策特別措置法」で指定されている「豪雪地帯」であり、雪が降り始めてからとなると、ナツツタの採集そのものが不可能となる可能性もある。また、ナツツタの採集と切断、樹液の採取の工程には、大量の人員が短期間に集中的に作業を行うことが必要とされており、延期や急な招集ということになると、多くの参加者があらかじめ時間を確保して実験に参加することは不可能となる。そこで、これらの両方の条件を満たす時期を慎重に検討した。

これまでに甘葛煎の再現に成功してきた奈良女子大学の実験では、一二月にナツツタの樹液の糖度が五〜一〇程度になり、一月には二〇程度となったことが報告されている。奈良と富山の気温の差を考慮すると、富山では奈良よりも早めに糖度が上昇することが予想される。また、積雪が始まる時期を避けるために、実施日は一二月二日と決定した。

この実施日に向けて、材料や道具の確保など、最終的な準備を開始した。具体的には、糖度計、軍手、ノコギリ、ナタ、ロープ、ビニール袋、テープ、コーヒーフィルター、カセットボンベなどを購入した。

二二五 第二予備実験——ナツツタの樹液採取および糖度測定

本番の四日前である一月二八日に、二つ目の予備実験を行った。目的は、ナツツタの樹液採取の工程を確認することと、この時期に糖度がどの程度上がっているかどうかを見るためである。

この時点までもにも、ナツツタを少量採取して、口の息で吹き出す方法は何度か試していたが、樹液はほとんど採取できていなかった。糖度計で糖度を計測するためには三滴ほど必要となるのだが、その程度の樹液を得ることさえできていなかったのである。原因として考えられたのは、一つは、近隣では十分な太さのナツツタの量が限られているため、それらを本実験に残しておくためには直径三センチメートルに満たないものしか使えていなかったことである。もう一つは、それまでに樹液の採取を試みたのは夏季や秋季であり、樹液を採取すべき時期である冬季になってなかったため、時期によって樹液の採取のしやすさそのものにも違いがある可能性も考えられた。

そこで、本実験に近い時期に、直径三センチメートルに近いナツツタを少量用いて、樹液を採取できるかどうか試してみることにしたのである。

この予備実験については、本実験とあわせてプレスリリースを出していたため、多くのメディアの取材を受けることになった^{一八}。

この予備実験では、樹液を一定量採取することには成功したが、糖度を計測すると、ほとんど0に近い値を示していた。たとえば『毎日新聞』は翌日、「5人が1時間かけて抽出できた樹液はごくわずかで、糖度計でも測定できない程度の甘さという結果に（中略）芋粥の再現までは厳しい道のりが予想される」と報道し、本実験の日は取材に訪れなかった。芋粥が完成する可能性は低いと予想されたからであろう。

ナツツタの樹液の糖度が上がっていなかった理由は明らかに、気温が十分に低くなっていなかったことであろう。この日の平均気温は一三・四度、最高気温が一八・四度、最低気温が一〇・五度^{一九}であった。そしてこの日まで、気温は例年に比べて高めに推移していた。たとえば奈良女子大学で一月九日に行われた第一回予備実

験では、最低気温四・〇度、最高気温一〇・六度なので、それよりもまだかなり高い。一月二八日の富山の平年値は、平均気温八・五度、最高気温一二・七度、最低気温四・八度なので、当初の見込みでは、この時点で一二月に入ってから奈良と同程度になると予想していたのだが、この年は偶然にも気温が下がるのが非常に遅かったために、この時点では十分な糖度の樹液が採取できなかったのである。

富山でこの実験を行うことの意義の一つは、早く気温が下がる北陸の気候においてナツヅタの樹液を甘味料として用いることの相対的な容易さを確認することにあつたので、その点においては不運であつたと言ふべきかもしれない。

この結果を受けて、四日後の本実験の日程を変更するかどうかについて、検討することになった。もし四日後にも同じ糖度しかなければ、芋粥の再現は明らかに不可能であるためである。できるだけ高い糖度の芋粥を、できるだけ多く作ることを目標とするならば、実験の時期を大幅に後にならした方がよいということになる。

しかし結局、本実験は予定通り一二月二日に決行する

こととした。予備実験の時点の気温は、かなり平年値から隔たつたものであり、同じ傾向が続く可能性は低いと判断したためである。

ただし、四日の内に多少気温が下がって、ある程度の糖度になつていたとしても、「甘葛煎」として保存のきく糖度七〇度まで煮詰めることが可能な一〇度以上になつている可能性は低い。とは言え、芋粥の調理は、「甘葛煎」でなくナツヅタの樹液で直接煮る選択肢もあり、「今昔物語集」、「宇治拾遺物語」におけるレシビはそちらのものである。仮に一〇度未満の糖度のナツヅタの樹液から芋粥の再現に成功したとすれば、糖度が十分に高くなつていない時期のナツヅタの樹液からでも芋粥を作ることが可能であつたことを証明することになり、甘葛煎の再現を中心とした先行研究にない、新たな知見が得られることになる。

こうして予定日通りの決行を判断し、気温の推移を見守るが、幸運にもその後、気温は下がっていくことにな

三 芋粥再現実験当日

実験当日、一二月二日の最低気温は、三・六度であった。短期間ではあるものの、期待していた冷え込みみであった。

朝八時三〇分に日本文学演習室に集合して、ナッツタの採集に向かう。住宅地のうち一件は、先方の都合により前日にあらかじめ伐採したものを演習室に運び込んでおり、その他の箇所はナッツタを手分けして取ってくる。

この際、持ち運べる程度の長さで切断する、断面から樹液が乾燥してしまわないよう、断面をテープで保護するなどの処理を加えた。一旦全てのナッツタを集めたところで重量を計測すると、二三キログラムとなっていた。

重量計測後は、グラウンドにナッツタを運び、野菜の皮むき用のスポンジで表面を洗う。ここからの樹液抽出の方法は『甘葛煎再現プロジェクト』で紹介されたものと同様であるため簡潔に記すが、太さによって二つの異なる樹液の抽出方法を用いるため、いくつかのグループに分かれて別々の作業を行った。

まず、直径三センチメートル以上のものはその場で長

さ二〇センチメートル程度に切断する。これは、遠心力を用いた樹液抽出方法を用いる。一方の端にロープを結び、もう一方の端にビニール袋を被せてテープで留め、ロープを持って振り回すことにより、遠心力によって樹液がビニール袋に溜まるといふ仕組みである。

直径三センチメートル未満の細いものは、五センチメートルに切断し、断面を斜めに切って表面積を増やし、樹液が出やすいようにする。これは、口の息で吹き出す方法を用いる。

これらの方法を用いて今回抽出された樹液は、全て合計して二八〇ミリリットルであった。奈良女子大学の平成二六年の再現実験では、四五・六五キログラムのツタから樹液一〇三三ミリリットルが抽出されたと記録されているので、抽出される割合としてはやや少ないことになる。これは、時期の問題に加え、今回用いたツタには直径が小さいものが比較的多く含まれていたことが関わっていると思われる。

樹液の糖度はいずれも三度程度で、石橋頭が甘葛煎の再現のために推奨していた糖度を大幅に下回っている。樹液を舐めると、ほんのり甘い程度である。したがって

この実験は、高い糖度のナツツタの樹液から甘葛煎を再現する目的は除外され、それほど糖度が高くない時期のナツツタの樹液によって甘葛煎を経ずに芋粥を作ることが可能かどうかを検証することに焦点が絞られることになる。

続いて、集めた樹液をコーヒーフィルターで濾過する。これに二時間ほど時間を要したため、その間に、芋粥を煮る工程の予行演習も兼ねて、対照実験用に用意したメープルシロップ、砂糖水、白樺の樹液でジネンジョを煮て試食する。七月二五日に行った予備実験との違いは、長芋ではなくジネンジョを使ったことである。当日、ジネンジョは多めに用意していたため、これは大量に作るようになった。参加者からは、長芋に比べて高級感のある味で美味しい、多く食べても飽きにくいとの感想が多く聞かれた。ただし、味付けは既に食べたことがあるものと同様であったため驚きはなく、むしろ、甘く煮たものよりも、味付けせずに煮たものを麵つゆで味付けしたものが好評であった。

さて、そうしているうちにナツツタの樹液の濾過が終わり、ピンク色の半透明の液体が出現した。濃厚なピー

チジュースのような色である。コーヒーフィルターが吸った分が減ったため、二八〇ミリリットルあった樹液は、それよりも少し減っている。これを鍋に入れて弱火で煮詰める。はじめはわずかな匂いであったが、時間が経つうちに甘い匂いが漂ってくる。ナツツタから抽出したときには茶色く濁った汚い液体だったが、濾過して煮詰めると幸福感を与えるような優しく美味しそうな香りを出すことに、驚きの声が漏れる。なお、アクは見られず、平成二三年の奈良女子大学での実験の煎縮時のものとして報告されているような「カルメラ臭」と表現されるような匂いは感じられなかった。これは、糖度がそこまで高くなっていなかったことと、キャラメル化が起こるほど加熱しなかったためと思われる。

体積が五分の一以下まで減り、糖度が二〇度を超えたところで、薄くスライスしたジネンジョを入れて、柔らかくなるまで煮る。二〇度という糖度はフルーツでいえば特に甘い部類となる数値である。これを椀に盛ると、一杯分にも満たない程度の量となった。

チーム全員で一掬いずつ試食すると、「雑味のない上品な味^①。」と表現された通りの味であった。その場での参

加者の発言を書き留めた各メディアの表現を引用しておけば、「おいしい」(関戸さん) / 「やさしい、ほんのり甘い」(目黒さん) / 「なんかバナナみたい」(小谷准教授) 三、「食べてみると、あっさりした甘さ。おなかいっぱい食べたいと思った小説の主人公の気持ちがあつた三、「ほんのり甘く、さっぱりとした独特の味で、たくさん食べたいと願った貴族の気持ちがあつた三」などである。

四 考察

この実験によって明らかになつたことや、考察が可能になつたことを、最後にまとめておく。

まず、ナツツタの樹液を用いて美味という感想が得られる芋粥を作ることは、可能であることが実証された。ただし、今回用いたナツツタの樹液は、甘葛煎を作る上で必要とされる一〇パーセントに達しておらず、煮詰めても、長期保存が可能な甘葛煎と呼べるものにはならなかつた。逆に言えば、そのような糖度がない時期であっても、芋粥を作ること自体は可能であることが判明した

ということになる。

次に、北陸では京都に比べて大量に芋粥を作ることが可能かという点である。これについては、今回の実験から明らかになつたとは言えない。そもそも、富山大学五福キャンパス付近では、十分な太さのナツツタが採集できる箇所が少なかったこと、また、今回抽出した樹液の糖度が高くなかつたことから、前日までに万端の準備を行い、二〇人で一二時間をかけても、ごく少量の芋粥を作ることしかできなかった。したがって、物語に見られるように、北陸では大量に作れるということが証明されたわけではない。

ただし、一月一日^{二四}に本実験と同じ理学部倉庫から採集したナツツタからは糖度一七パーセントの樹液が抽出されたため、さらに寒冷な時期に行えば、同様の糖度の芋粥を作る場合にも、より多くの量を作ることが可能と思われる。北陸では京都に比較すれば寒冷な時期が長い分、甘葛煎を作れるような糖度の高いナツツタの樹液を採取できる機会が多い、ということこそ言えそうである。また、仮に京都でも北陸でも同様の時期にナツツタの樹液の採取が行われていたのだとすれば、北陸の方が相対

的に糖度の高い樹液が採取されやすく、より多くの芋粥が作られる地域として認識されていたという可能性はあるだろう。

とは言え、物語に見られるような大量の芋粥を作ることが北陸ならば可能であったとはとても考えられず、これらの物語の内容は石橋頭が述べた通り、「現実にはとても不可能^{三五}」な誇張によるフィクションと捉えるべき、との解釈は動かない。他方で、仮に多くの芋粥を作ろうとすれば「下衆女共」に加えて「若き男共十余人許」が作業するという、大勢の人手が必要となる「今昔物語集」のイメージについては、誇張ではなく、芋粥作りに実際にかかる手間の大きさを踏まえた現実感の強いものであったと見るべきかもしれない。もちろん、この場面のように既にナツツタの樹液を茹で始める段階まで来ていれば、釜にジネンジョを切って入れる作業自体に一〇人以上が必要になるということはないだろうが、その前の段階も含めれば、それほど芋粥の量が多くない場合でも、大人数が必要になるのである。

典拠を視野に入れた芥川「芋粥」の解釈として最も代表的な三好行雄の論^{三六}では、「芋粥を馳走するために、利

仁はなぜ五位を敦賀まで(将て行か)ねばならないのか」ということに特別な意味があるとされていた。典拠では「利仁の勢威を支える権力も経済力も、すべて舅の有仁ゆえにもたらされたのであって、だから、利仁は岳父の支配する敦賀の地でしか芋粥を自由にできない」という事情が敦賀行という設定によって示されており、重要であったのに対し、芥川は有仁と利仁の関係についての説明を削減することによって、当時の権力事情についての歴史的背景を消去した、と論じたのである。しかし、今回の実験から見えてくるのは、地方豪族が大量の芋粥を作る上で地元に戻ったことは、彼の権力基盤などの事情によるものではなく、単純にレシピが要請する必然であったことになる。甘葛煎は、朝貢のため長期保存が可能な糖度まで煮詰められた形態だが、これは中央でも貴重なものであったため、貴族個人が大量に用意して自由にできるものではない。そこで、臨時で大量に作るとすればナツツタを直接採集して「ミセン」、すなわち煮詰める前の樹液でそのまま煮るレシピを用いるということになるが、実際、「今昔物語集」でも「宇治拾遺物語」でも芥川「芋粥」でも、敦賀では「味煎」から作られているこ

とが明記されている。樹液そのものは保存が効かないので、産地の近くでしか作れないのである。

また、味の面からも、「今昔物語集」「宇治拾遺物語」や芥川「芋粥」の解釈について、新たな手掛かりが得られた。

前述したように、メープルシロップや砂糖と長芋を用いた予備実験の結果から予想されたのは、「芋粥」自体が大量に食べることは適さない、飽きの来やすい味であったのではないか、ということであった。そうだとすれば、「今昔物語集」「宇治拾遺物語」に見られるような芋粥に飽きてしまうエピソードは、単に芋粥の味に由来したものであったということになる。しかし、ジネンジョを用いた「芋粥」について得られた感想は、メープルシロップや砂糖を用いたものも、ナツヅタの樹液を用いたものも、それとは全く異なるものであった。特に、ナツヅタの樹液を用いたものの方は、たくさん食べたくなる味との感想であった。実際、参加者全員で一掬いずつ食べた後に残った「芋粥」は、もつと食べたいという参加者達によって、すぐに食べ尽くされることとなったのである。

今回の実験から分かったのは、たとえば「今昔物語集」でいえば「舌打をして哀れ何かで署預粥に飽かむと云ければ」という五位の言動が、それ自体としては下級貴族がごく自然に持つ反応であったということである。特に芥川「芋粥」については、芋粥を飽きるほど食べたいというのには「手軽で、ささやかな欲望」⁷⁰と解釈されることが多く、その欲望を持つこと自体が「他人の嘲笑と憐憫をまねく種でしかないささやかな願望」⁷¹とされることさえあるが、これは、平安時代における芋粥の実態からいえば誤りであるということになる。芥川自身、芋粥は「無上の佳味」であり「万乗の君の食膳にさへ、上せられた」と書いているので、芥川は必ずしも芋粥を価値の低い食べ物として描いたわけではない。しかし、利仁の五位に向けた提案が「軽蔑と憐憫」を示す声であったという箇所や、五位がその提案を受けると「一同の嘲弄」を受けざるを得ないというくだりは、芋粥に関する偏った理解を導くものであったとも言える。ここでの「軽蔑と憐憫」「一同の嘲弄」は、典故には存在しないものである。典故には、この場面ではなく結末近くに、敦賀で芋粥を出されて少ししか食べられなかった五位が笑われる

場面があり、これも必ずしも嘲笑ではないのだが、芥川はこの笑いに五位を軽く見るニュアンスを受け取って、物語前半から五位が見下されていたような形にその軽視を拡大していくことによって、「無上の佳味」であるという設定と若干の齟齬が生じる表現が生まれたものと思われる。

芥川は、芋粥のイメージや情報をどの程度正確に持つことができていたのだろうか。実際に芋粥を作る際の様子として特徴的なのは、その匂いである。それは、煮詰める前で二〇〇〜二五〇ミリリットル程度という少量であつても、部屋中に甘い匂いが充満するほどのものであつた。芥川「芋粥」では、「芋のにほひと、甘葛のにほひとを含んだ、幾道かの湯気の柱が、蓬々然として、釜の中から、晴れた朝の空へ、舞上つて行くのを見た」と印象的に書いているように、その特徴を言い当てているようにも思われる。これは偶然の一致なのか、または芥川は「甘葛のにほひ」について何か情報を持っていたのだろうか。

甘味料の匂いについて想像するための材料を考えてみると、たとえば砂糖などの甘味料では、キャラメリゼが

起こる程度に加熱しなければ香りは立たず、また「甘葛」の正体として江戸時代に推定されていたというアマチャヅルの汁も、枯れ草のような匂いがわずかにする程度とされており、芥川の描写は、そうした例の連想からは導かれにくい記述のように思われる。

なお、「今昔物語集」「宇治拾遺物語」の該当話本文には「味煎」とのみ書かれていて、「甘葛」という言葉は見られないにもかかわらず芥川は「甘葛」と書くことができていく。これは、芥川が参照したのが定説通り『校註国文叢書 第十七冊』の本文であつて、その頭注に「山の芋を切込み甘葛（アマヅラ）の汁にて煮たる粥をいふ、頗る珍品にて当時主上にもきこしめし又上流社会にも、もてはやされたる事物語類に見えたり」とあることに依拠したものと思われる。しかし、ここにも「甘葛」の香りについては書かれていない。

実は「今昔物語集」にはもう一箇所、甘葛が出て来る箇所があり、そこには香りのヒントとなる記述もある。それは芥川が「好色」『改造』大正一〇年一〇月）で典拠とした説話である。懸想した侍従の糞尿を見てやろうと考えた平中の企みが見破られ、代わりに美味でよい香

りの物体が便器に入れられていた、というのが話の筋だが、たとえば『日本古典文学全集』^元の本文、巻第三十「平定文假借本院侍従語第一」では、「野老合七たきもの 藁あまつらニヒチクリテ」という製法で作られたものが「馥シキ事無限シ」と形容されている。「馥シ」さの元になったものとして、「藁たきもの」がまずあるので、「藁あまつら」の香りがよいことを確かなこととして教える表現とは言えないが、総合的に香りがよいものを作るための材料として選ばれていることから、推測の手がかりにはなり得るかもしれない。芥川は大正五年の時点でこの話を読んでいて、甘葛がよい香りであることを知っていたという可能性がまず考えられる。そうだとすれば、五年後に書く作品の典拠であるこの話を、芥川が大正五年の時点で読んで印象に残していたということになる。

しかし、詳しく検討すれば、その可能性はほとんど無いことが分かる。芥川が参照したとされる『校註国文叢書第十七冊』では、肝心の「藁あまつら」の箇所が「纂つぐみ」という異なる字に翻刻されており、ここから甘葛の香りについての情報を得たことはあり得ないのである。当時芥川が参照した可能性が指摘されている他の文献を見ても、

『国史大系 第十六卷』^{三〇}では「纂」となっており、こちらルビがない。『改定史籍集覧 第九冊』^{三一}では、「藁」に近い活字となっているが、ルビがないので甘葛と同定するのは困難であろう。『丹鶴叢書 今昔物語下』^{三二}でも「纂」である。

このように、芋粥に関する情報という観点からは、芥川は定説のように『校註国文叢書 第十七冊』を参照したことが示唆されるのみで、他の候補を読んだことを示す積極的な根拠は確認されない。管見の限りでは「甘葛」の匂いについて芥川が確かな情報を得ることが可能であった文献は確認できず、したがって、匂いについては典拠にない情報を芥川が推測で付け加えたものと考えられる。

最後に、大量の芋粥を見て食欲を失った五位の心情の変化に、芋粥の料理としての特徴がどのように関わるかという点についてまとめておこう。先にも述べた通り、芋粥は貴族でさえ通常は少量ずつしか口にできない高級な料理であり、さっぱりして飽きの来にくい味であるため、多くを食べてみたいという欲求を持つ五位のような人物がいることは自然なこととして描かれていたと考え

られる。そうした願望を口にすること自体は「他人の嘲笑と憐憫をまねく」ようなものでは決してなかったのである。

敦賀で利仁が大量の芋粥を作らせる場面は、石橋が述べた通り、「現実にはとても不可能」な誇張であった。これは芥川が誇張したわけではなく、「今昔物語集」「宇治拾遺物語」の時点で、現実味の無いファンタジーとして描かれていた。五位がそれを前にして食欲を失う場面も、起こり得ないような驚くべき出来事が目の前で起こったのを見た人間の反応として捉える必要がある。

「今昔物語集」「宇治拾遺物語」で五位が食欲を失った場面は、大量の芋粥を目にして「疎しく成ぬ」と書かれているばかりで、その変化にあたって芋粥の味や香りが影響したかどうかについては全く書かれていない。従って、本来感じられていた希少さの感覚が損なわれた場面だと後世の読者が解釈するのは自然とも言ってもよいのだが、「甘葛」や芋粥がどのような料理であるかを知る当時の読者は、当然ながらその味や匂いを思い浮かべた上でこの場面を解釈できたはずである。芋粥は、少量であっても調理中に香りが漂うような料理であるため、芋粥

が大量に調理されている場面では、その美味しそうな香りがむせ返るばかりに立ちこめていることになる。そして、その匂いは、あの飽きのきにくい上品な味を想起させるものでもある。ということは、五位が食欲を失ってしまうという事態は、それほど驚きをもたらす出来事であったことを示すものとして表現され、読まれたと考えられる。

芥川「芋粥」の時代には、芋粥の味も匂いも、そもそも大量の芋粥という設定がいかに非現実的なものであるかという認識自体も、作者と読者の双方にとつて曖昧なものになってしまった。それが「芋粥」という小説の表現と解釈を限定することになったと言えようが、他方で芥川は、「芋のほひと、甘葛のほひとを含んだ、幾道かの湯気の柱」を現代に蘇らせもした。これが偶然であったのか、古典の博搜や推測の鋭さによるものであったのかは不明だが、結果的に芋粥の調理場面的確な形で再現し得ていたことは、この作品の価値として、今日改めて認めることができるだろう。

注

- 一 富山大学人文学部東アジア言語文化コース学生
 二 富山大学大学院理工学教育修士課程学生
 三 富山大学大学院理工学教育修士課程学生
 四 富山大学人文学部准教授
 五 芥川龍之介「芋粥」(『新小説』大正五年九月)
 六 石橋頭「古代の甘味料 甘葛煎のはなし」(山辺規子編著『甘葛煎再現プロジェクト』かもがわ出版、平成三〇年三月)にまとめられている。
 七 山辺規子編著『甘葛煎再現プロジェクト』(かもがわ出版、平成三〇年三月)。本稿はこの研究に多くを拠っている。
 八 ナツツタの樹液を用いず、メープルシロップなどで代用したのものについては前川佳代「甘葛煎とイモガユ」(山辺規子編著『甘葛煎再現プロジェクト』かもがわ出版、平成三〇年三月)にあり、その他 WEB 上などにも多くの報告がある。また、甘葛をアマチャヅルとする説に基づく再現の報告は存在するが、アマチャヅル説は甘葛の正体が分からなくなっていた江戸時代に生じた混同に基づくものであると石橋頭によって指摘されており、本稿は石橋説に拠っている。
 九 引用は、芥川が参照したとされる「利仁將軍若時從京敦賀將行五位語第十七」(池辺義象等校註『校註国文叢書 第十七冊』博文館、大正四年八月)を用いた。なお、ここでは作品全体の名称が「今

昔物語集」ではなく「今昔物語」と表記されているが、本稿ではこの文献を念頭に引用する際も、一般的な名称である「今昔物語集」と書くこととする。

- 一〇 長野晋一「芥川龍之介と古典」(勉誠出版、平成一六年一月)など。
 一一 塙保己一『群書類従 卷第三百六十四 飲食部一 厨事類記』(国会図書館蔵)
 一二 皇典講究所、全国神職会校訂『校訂延喜式下巻』昭和六年一月、大岡山書店
 一三 石橋頭「古代の甘味料 甘葛煎のはなし」(山辺規子編著『甘葛煎再現プロジェクト』かもがわ出版、平成三〇年三月)
 一四 石橋頭「芋粥のはなし」(『都府楼』平成三年)の計算によるが、引用は前川佳代「甘葛煎とイモガユ」(山辺規子編著『甘葛煎再現プロジェクト』かもがわ出版、平成三〇年三月)が紹介するところによる。
 一五 米倉浩司「ツタ属」(大橋広好、門田裕一、邑田仁、米倉浩司、木原浩編『改訂新版日本の野生植物2』平凡社、平成二八年三月)
 一六 「ツタウルシ」「ツタ」「キツタ」(茂木透写真、太田和夫・勝山輝男・高橋秀男ほか解説『山溪ハンディ図鑑4 木に咲く花 離弁花2』山と溪谷社、平成一二年一〇月)
 一七 日本文学演習では、学習活動に関わるコミュニケーション用に、チャットソフト Slack を用いており、勉強会を開催した際は、参加者がそこに感想を書き込んで、参加者以外にも知見を共有するようにしている。ここでは、この勉強会用のスレッドに参加者が

書き込んだものを抜粋した。

- 一八 「富大・日本文学近代ゼミ 芥川の「芋粥」再現 樹液で古代の甘味料 来月2日、ジネンジョと調理」『富山新聞』平成三〇年一月二十九日、「芥川の「芋粥」どんな味 富山大 古代料理再現に挑戦」『北日本新聞』平成三〇年一月二十九日、「芥川の「芋粥」どんな味? 富山大 来月、再現実験に挑戦」『毎日新聞』平成三〇年一月二十九日、「芥川短編 題材の古代料理 「芋がゆ」再現 なるか 富大文学ゼミ生が挑戦」『北陸中日新聞』平成三〇年一月二十九日など。その他、ケーブルテレビ「北日本新聞ニュース」で生放送として撮影されていたが、番組映像は未見。
- 一九 以下の気象データは全て気象庁ホームページ「過去の気象データ検索」(<https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>)、平成三〇年一月二十四日閲覧)による。
- 二〇 石橋顕「古代の甘味料 甘葛煎のはなし」(山辺規子編著『甘葛煎 再現プロジェクト』かもがわ出版、平成三〇年三月)
- 二一 「芥川龍之介の「芋がゆ」を学生が再現」(チューリップテレビ「ニュース6」平成三〇年二月三日放映、記録は「富大生たちが奮闘! 芥川の「芋がゆ」再現に挑戦」(http://www.tulip-tv.co.jp/news/detail/index.html?TID_DT03=20181203184303) 平成三二年一月二十六日閲覧)
- 二二 「芋がゆいとうまし 芥川の短編に登場 「高級さ わかった」 富大生 12時間かけ再現」『読売新聞』富山地域面、平成三〇年一月四日)
- 二三 「芥川の芋粥 甘くさっぱり 平安貴族愛した菓子再現 富大文学部生 ナッツタの樹液煮込み12時間」『富山新聞』平成三〇年一月三日)
- 二四 前掲の気象庁の記録によれば、一月九日の最低気温がマイナス一・六度、一〇日がマイナス二・九度、一日が二・四度と推移しており、この年の一月で最も寒い時期であった。
- 二五 石橋顕「古代の甘味料 甘葛煎のはなし」(山辺規子編著『甘葛煎 再現プロジェクト』かもがわ出版、平成三〇年三月)
- 二六 三好行雄『芥川龍之介論』(筑摩書房、昭和五一年九月)
- 二七 高橋博史『芥川文学の達成と模索』(至文堂、平成九年五月)
- 二八 三好行雄『芥川龍之介論』(筑摩書房、昭和五一年九月)
- 二九 『日本古典文学全集 38 今昔物語集(4)』(小学館、平成一四年五月)
- 三〇 『国史大系 第十六卷』(経済雑誌社、明治三四年一〇月)
- 三一 『改定史籍集覧 第九冊』(近藤活版所、明治三四年六月)
- 三二 『丹鶴叢書 今昔物語下』(国書刊行会、大正元年二月)

富山文学の会 2018年度 活動報告

第63回	4/26(木)	研究会 はじめに—文学と観光の相互連関 没後20年 佐多稲子「水」を読む	(高志の国文学館) 中山悦子	8名
第64回	6/17(日)	公開読書会 富山大学日本文学分野近代ゼミ共催 山内マリコ『メガネと放蕩娘』を読む	(富山大学) 小谷瑛輔	41名
第65回	8/11(土)	研究会 「高島高の戦争詩」 山川健一『人生の約束』	(富商会館) 金山克哉 谷川拓矢	14名
第66回	10/14 (日)	文学散歩 中央通り・いたち川 山内マリコ『メガネと放蕩娘』ツアー	村上瑞季	9名
第67回	12/12 (水)	忘年会・打ち合わせ	(ウィット・モア)	8名
第68回	2/12(水)	研究会 『群峰』5記念号 合評会	(富商会館)	8名
第69回	4/20(土)	研究大会 第10回記念大会 「翁久允—研究の現在と展望—」 司会 基調報告 「翁久允の渡米—移民地文芸の出發」 対談 「想い出すままに—父翁久允—」 研究展望 「『翁久允文献目録』を編集して」	(高志の国文学館) 水野真理子 八木光昭 逸見久美氏・水野真理子 須田満氏	

群峰 第3号

発行日…2017年3月4日

◇研究論文

黒崎 真美

横山源之助と郷土の人々

今村 郁夫

原典の書き込みから見る小泉八雲「常識」―ヘルン文庫

調査から―

金山 克哉

北方の冬 高島高論

近藤 周吾

坂口安吾と富山

小谷瑛輔

〈子どもたちの時間〉の現代―山内マリコ論序説

◇富山文学の回第7回研究大会 八木光昭先生講演抄録

◇文学散歩 報告

澤田 隆彰

高志の国文学館周辺の文学散歩

◇2016年度 活動記録

群峰 第4号

発行日…2018年3月3日

◇研究論文

木下 晶

林忠正「外山博士の演説を読む」をめぐって―日本西洋

美術教育の提言―

孫 媛媛

芥川龍之介の金沢訪問と室生犀星

水野 真理子

小寺菊子の作品に垣間見る宗教観―「他力信心の女」―「念

仏の家」より

谷川 拓矢

現代女性作家による富山文学の変遷―木崎さと子から

山内マリコへ―

◇講演筆録

上田 正行

千石喜久と言う詩人―「日本海詩人」を視野に入れつゝ

◇文学散歩 報告

黒崎 真美

魚津文学散歩報告

◇2017年度 活動報告

ヘルン文庫が 富山に来て 95 年

富山とハーンを結ぶ教育・研究の願い

ハーンの蔵書「ヘルン文庫」は、愛弟子の田部隆次と兄・南日恒太郎の教育の情熱から、旧制富山高校を経て、富山大学にもたらされました。
南日が『ヘルン文庫蔵書目録』に、「願わくは、ピエリアの泉とならんことを」と記したとおり、現在も新発見が生まれています。



ラファディオ・ハーン
小泉八雲



田部隆次 南日恒太郎



ヘルン文庫
1924 (大正13) 年 創設

富山八雲会は…

ハーンやヘルン文庫を調査・普及します

ハーン作品にふれ、貴重なヘルン文庫の調査・普及を通じ、地域文化の進展に資する市民団体です。

会員の個性を生かし 多彩な活動を行います

月例会・公開セミナー・秋のセミナー (写真) のほか
英語・日本語紙芝居 ハーン作品から制作・実演
有峰ツアー 8月 大自然の中でハーン作品朗読
県民カレッジ自遊塾 など、活動メニューはさまざま

書籍出版に関わっています

『日本の心』C・Lブラウネル著 高成 玲子 原訳 本会編 (桂書房)
『故郷は今も草芽吹き』高成 玲子 著 富山八雲会
『ラファディオ・ハーンの英語教育』平川 祐弘 著 (弦書房)
『ラファディオ・ハーンの英語クラス』平川 祐弘 著 (弦書房)
紀要『へるん倶楽部』広報誌『ニューズレター』年刊

新規会員を募集しています

一般会員 年会費 3,000円 大学生までは無料です
広く本会への参加、ご協力をお待ちします

2019年5月～10月

県民カレッジ自遊塾 「へるんセミナー」

多彩な観点でハーンを学びます。入門にどうぞ!

お申し込み希望は kino@pa.ctt.ne.jp 木下まで



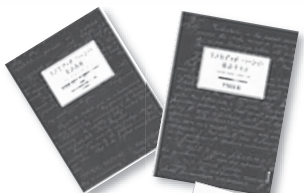
月例会『骨董・怪談』の輪読 など



公開セミナー 6月



秋のセミナー 馬場記念公園 など



詳細は WEBサイトをご覧ください

編集後記

▼富山文学の会は○九年、富山大学教授（現・名誉教授）の金子幸代先生を中心に活動を開始しました。爾来、幾多の試練を乗り越え、文学の研究を地道に続けてきました。先生はご病氣となられ、富山を去られました。が、この会や文学に賭ける情熱は健在で、ご寄付やご寄稿によっても明らかです。

▼こうした先生の思いに応えようと企画したのが、一〇周年を記念して編んだ今回の特集号。エッセイを載せたのが新しいところで、初期メンバーには懐かしく、途中から参加した会員やこれから参加しようとする会員にとっても、金子先生や初期会員の高志を知る縁となるのではないでしょうか。内外のご協力を深謝します。

▼この会は優れた研究者集団にもかかわらず、あるいは世知に疎い文学者ばかりゆえか、プレゼンスを高めることが不得手ですが、新しい世代のためにも不可欠な場と信じてやみません。引き続き、有形無形のご支援を賜りたく存じます。

近藤記

群峰 第5号

二〇一九年四月二〇日 発行

編集・発行 富山文学の会

連絡先 富山市本郷町13

富山高専専門学校（本郷キャンパス）

高熊教員室

